内村鑑三の信仰詩・訳詩・短歌等集成

——附、解題、解説、文学観、略年譜

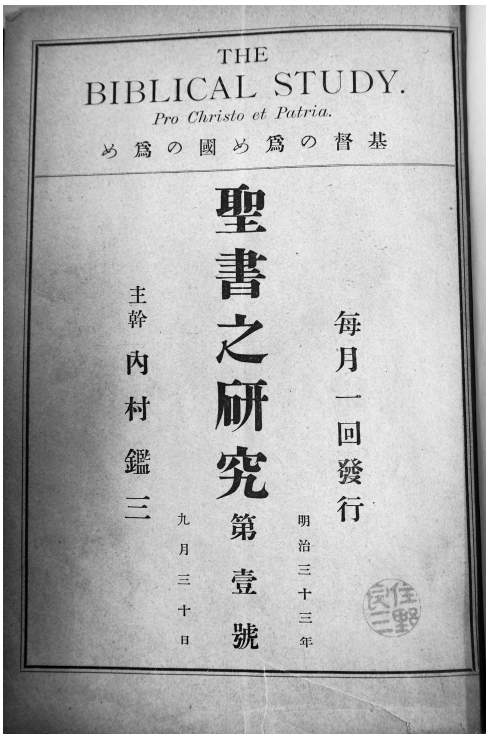
編・解題・解説　小林孝吉
（キリスト教研究所協力研究員）

Meiji Gakuin University
Institute for Christian Studies
明治学院大学キリスト教研究所

内村鑑三（1861～1930年）
今井館教友会所蔵資料

「宣言」

聖書に曰く生命の水の河あり、其水澄(き)く徹りて水晶の如し、神と羔(こひつじ)の宝坐(くらい)より出づ、河の左右に生命の樹あり、其樹の葉は万国の民を医(いや)すべしと、（黙示録廿(にじゅう)二章一二節(にじゅうにせつ)）、余輩は天上天下此福音(ふくいん)を除いて国民を医す者の他にあるを知らず、此誌豈(あに)今日に於て出でざるべけんや。



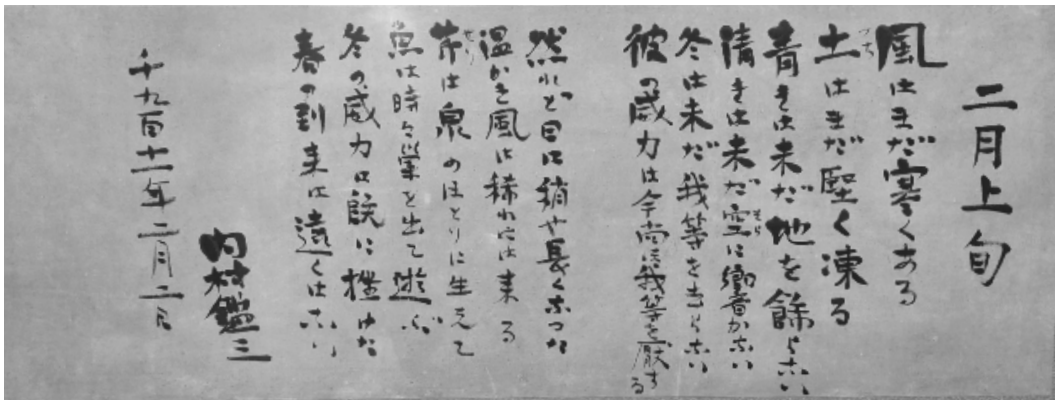
THE
BIBLICAL STUDY.
Pro Christo et Patria.
基督の爲めの國の爲め

聖書之研究
第壹號

毎月一回發行
明治三十三年九月三十日

主幹 内村鑑三

『聖書之研究』創刊号（1900年9月）
今井館教友会所蔵資料


二月上旬

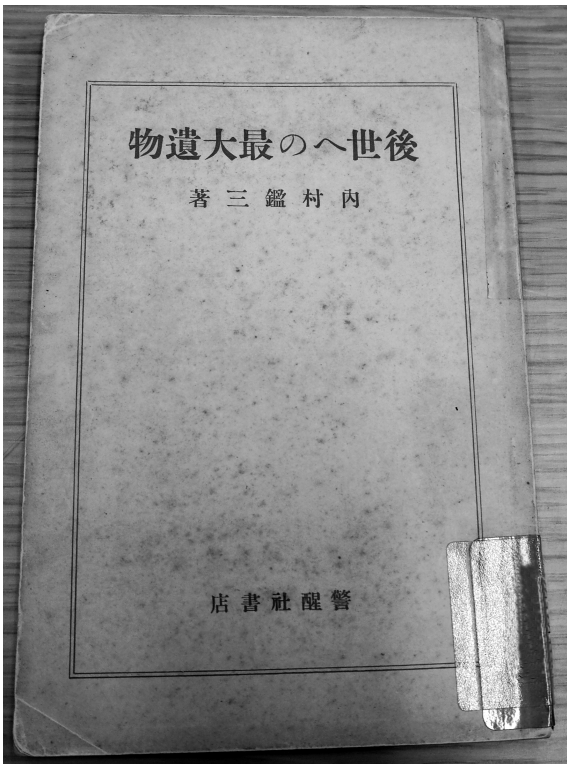
風はまだ寒くある
土はまだ堅く凍る
青きは未だ他を餘さず
清きは未だ空に響かず
冬は未だ我等をきらず
彼の威力は今尚我等を厭する

然れど日は猶々長くなつた
温かき風は林間に来る
草は泉のほとりに生えて
魚は時々巣を出て遊ぶ
冬の威力は既に去りぬ
春の到来は遠くはない

内村鑑三

千九百十一年二月二日

詩「二月上旬」（「二月中旬」の異稿）　今井館教友会所蔵資料



『後世への最大遺物』
今井館教友会所蔵資料

即ち此世の中は是は決して悪魔が支配する世の中にあらずして、神の世の中であると云ふ事を信ずる事である。失望の世の中にあらずして、望みの世の中であることを信ずる事である、此世の中は悲みの世の中でなくして、喜びの世の中であるといふことを我々の生涯に実行して其生涯を世の中の贈物として此世を去るといふことであります。其遺物は誰にも出来る遺物ではないかと思ふ。

内村鑑三の信仰詩・訳詩・短歌等集成

——附、解題、解説、文学観、略年譜

編・解題・解説
小林孝吉
（キリスト教研究所協力研究員）

はじめに――内村鑑三と信仰詩・訳詩・短歌について

日本近代の夜明けに生まれ、近代の戦争の時代を経て、明治、大正、昭和初期まで生涯一人のキリスト者、伝道者として生きた内村鑑三（一八六一―一九三〇年）という無教会主義の創始者がいる。そのキリスト教思想と信仰の希望の水脈は、一条（ひとすじ）の生命の河として後世へ、未来へ通じている。

内村鑑三は、明治維新の七年前に、江戸小石川鳶坂上（現、文京区本郷）の高崎藩の武士長屋で誕生し、武士の子として儒教的環境で育つ。一六歳のとき、アメリカからW・S・クラークを招聘して建学された開拓使附属札幌農学校に、太田（新渡戸）稲造らとともに二期生として入学する。そこでクラークによって蒔かれたキリスト教と出会い、「イエスを信ずる者の契約」（Covenant of Believers in Jesus）に署名し、一八七八年に一七歳で、メソジスト監督教会宣教師M・C・ハリスから洗礼を受ける。卒業後の一時期、開拓使御用係の官吏として漁業調査等に関わるが、最初の若き結婚の失敗も影響して、内部の「真空」に促されるように、苦悩の渦のなかでキリスト教大国アメリカへと渡るのである。

そこでアマスト大学のシーリー総長と運命的に出会い、その言葉によって贖罪の「霊的回心」を経験する。日本を新しいキリスト教国にする夢を抱いて帰国したあとは、ミッションスクールでの宣教師らとの軋轢、第一高等中学校教育勅語奉読式での「不敬事件」などがあり、教会、教派によらない無教会信仰者となるのである。また、日清戦争を義の戦争と論じたことを恥じ、日露戦争以後、キリスト教による「非戦論」の立場を貫くとともに、日本における誌上の「信仰共同体（エクレシア）」として『聖書之研究』を創刊し、主筆として三〇年間、二つの「J」（JesusとJapan）のもと旧新約聖書の研究・講解とともに、「福音」の伝道者として生き、第一次世界大戦後はキリストの「再臨」と「再臨信仰」へいきつくのである。

内村鑑三は、一九〇〇（明治三三）年に創刊した『聖書之研究』（全三五七号）に、旧新約聖書六六書の講解をはじめ、無教会信仰によるキリスト教思想、福音について著述し、『内村鑑三全集』全四〇巻（岩波書店、一九八〇―一九八四年）、『内村鑑三信仰著作全集』全二五巻（教文館、一九六二―一九六六年）、『内村鑑三聖書注解全集』全一七巻（教文館、一九六〇―一九六二年）、『How I Became a Christian』『Representative Men of Japan』など、英文も含む多数の著作を後世に残し、日本のキリスト教界だけではなく、広く社会に、世界も含む多くの人々に影響を与えつづけている。その研究書、評伝は、国内外を含め、厖大な数にのぼっている。

一方、内村鑑三は信仰、聖書研究にかかる著作ばかりではなく、近代という時代と日本の同時代の文学を論じた「何故に大文学は出ざる乎」「如何にして大文学を得ん乎」などの代表的文学論もある。また、ダンテ、ミルトン、ゲーテ、バニヤンなどの世界文学にも目を向けるとともに、悲嘆の魂の慰めとなる「寒中の木の芽」、「天然」宇宙の美と歓喜のきらめく「春の到来」、キリスト教的非戦論へとつながる「寡婦の除夜」、天職を体現した「桶職」、信仰詩「イエスを思ふて」、再臨をテーマとした「我等は四人である」等々、自らも二〇篇ほどの信仰詩と、日記（「日々の生涯」「一日一生」として『聖書之研究』に連載）を含むと一〇〇首もの短歌を発表している。

内村鑑三の信仰宇宙の片鱗をあらわした「天地の花なる薔薇」（『聖書之研究』五四号、一九〇四年七月二一日）という、雑誌の頁の埋め草に使われた、わずか四行の詩がある。

其花に伴ふて刺（とげ）あるは
其、地の産なるの証（あかし）なり、

其刺に伴ふて花あるは
天の之に宿るの徴(しるし)なり。

薔薇の鋭き刺は地の産を、美しき花は天の宿りを証(あかし)する、天然の徴(しるし)である。讃えるべき天に裏づけられない地はなく、暗鬱なる地には天の光が射すのである。天地は創造的、進化的宇宙である。

また、初期の英文の読書記録であるLiterary Notesや、訳詩集『愛吟』などに見るように、ブライアント、ホイッティア、ロングフェロー、ホイットマン、ワーズワース、テニソン、ブラウニングなど数多くの米英等キリスト教詩人の詩を、自らの信仰に基づき、本書に収めただけでも約七〇篇、彼が「精神訳」と呼んだような「信仰訳詩」として、近代文学的にも評価が高い独自な翻訳・意訳を行い、さまざまな著述のなかに収めることで信仰的世界を多面的に伝えている。そのなかには、繰り返し引用されている詩も数多くある。内村鑑三研究においては、文学的領域にあたる詩、訳詩、短歌等の作品集成、および解題、解説、文学観からなる研究資料集は、重要な研究領域となるであろう。

この『内村鑑三の信仰詩・訳詩・短歌等集成――附、解題・解説、文学観、略年譜』は、内村鑑三研究の文学的基礎資料となるとともに、内村鑑三の信仰と福音を文学的側面からとらえることで、二〇二一年で生誕一六〇年を迎えた内村鑑三のキリスト教思想とその人物像に新たな光をあて、内村鑑三研究の進展に寄与することを目的としている。

目次

はじめに――内村鑑三と信仰詩・訳詩・短歌について……3
凡例……11

一　詩・解題

海……13
楽しき生涯（韻なき紀律なき一片の真情）……14
寒中の木の芽……15
〔正義は口にあり〕……16
寡婦の除夜……17
新詠……18
陸中花巻の十二月廿日……19
天地の花なる薔薇……19
春は来りつゝある……20
春の到来……20
秋酣なり……21
二月中旬……21
我等は四人である……22
『其日其時』……23
イエスを思ふて……24
今年のクリスマス……24
エスペランザ……25
建碑……26
桶職……27
秋の夕……28
〔秋は秋として善し〕……28

二　訳詩・解題

〔如何なれば艱難にをる者に光を賜ひ〕……31
『或る詩』（無名氏）……32
ラウンフホール公の夢（ラッセル、ローエル）……33
〔羽翼あらば何処に飛ばんわが魂よ〕（ヘンリー、バートン）……34
〔噫、聖霊よ、爾は諸ての宮殿に勝り〕（ミルトン）……35
〔月日と星の巧造に〕（『ファースト』）（ゲーテ）……35
〔我もはや懼れず〕（Whittier）……36
〔然らば我は何なるか〕……36
充たされし希望（ホウヰチヤル）……37
〔冬已に老ひて力尽き〕（ゲーテ）……38
〔意を留めよ〕（オルヅオス）……38
〔罪に枯死する我等と雖も〕（オルヅオス）……39
〔我は世界の持主なり〕（エマルソン）……39
航海中（ヱラ、フィルコックス夫人作）……40
戦士の祈禱（バウル、ダンバー）……40
〔土塀の上に生ふ花よ〕（テニソン）……41

水仙花（ヲルヅヲス）……42
物の前後（ホレーシヤス、ボナー）……43
誠信なる主　“Not seldom, clad in radiant vest.”（詩人ヲルヅヲス作）……44
短命（ベン、ジョンソン）……44
ラウンフウル公の夢（ラッセル、ローエル）……45
夕暮の歌（オルヅオス）……46
死に臨んで余の霊魂に告ぐ（ホキットマン）……47
二基の墓（ブライアント）……47
〔凡て変り易きものは〕（ゲーテ）……48
紫竜胆に贈る（ブライアント）……48
〔冷たき大理石の中に於て在らず〕（ウーラント）……49
〔其は五十年前なりし〕（ロングフェロー）……49
〔嗚呼、何れの僧侶よりも〕（ホイットマン）……50
同盟国（テニソン）……50
真人の祖国（ローエル）……50
天国を望む（アイザック・ワット）……51
〔小児あり、其手を拡げ〕（ワルト　ホキットマン）……52
『シロアムの細流』“By Cool Siloam's Shady Rill.”（ヒーバー）……53
光り輝く讃美の里〔フランセス・ヴァン・アルスタイン〕……54
人生の詩（ロングフェロー）……55
万物悉く可なり（ロバート・ブラウニング）……55
ブラウニング詩集に於ける基督の再来（ブラウニング）……56
詩人カウパーの再臨歌（カウパー）……57
〔我は汝は我を離れて〕（ホッチヤー）……57
〔路傍に花咲く〕（ウォルヅオス）……58
〔大いなる神よ〕（ウォルヅヲス）……58
〔天然の堅き〕（ウォルヅオス）……58
〔地球上に我が属すべき〕（ワルヅワス）……59
〔突立つ山の曝せる胸に〕（ミルトン）……59
〔真実にして〕〔アイザック・ワット〕……59
〔汝は暴風吹き荒れし〕（ホキッチヤー）……60

三　『愛吟』（抜粋）・解題

愛吟……61
詩人の胸中（ロバート、ラブマン）……61
カンゾーナ（小歌）（サボナローラ）……62
無限大（テニソン）……62
堅き城は我等の神なり（ルーテル）……64
ロイド、ガリソン（ローエル）……65
急がずに、休まずに（ゲーテ）……66
今日（トマス、カーライル）……67
夕暮（フリードリッヒ、レッケルト）……67
エンディミオン（ロングフェロー）……68
汝の恐怖を風に任かせよ（ゲヤハート）……68
吼よ夜の風（ヘンリー、キルク、ホワイト）……69
美はしきジオン……69
世々の岩なる神よ　（詩篇九十編に依る）（エドワード、エイチ、ビカステス）……70
涙（ブラウニング夫人）……71
更に高き信仰（ジェームス、バッカム）……71
春の日は琥珀の光を放ち（ブライアント）……72

志望（マリヤン、エバンス婦「ジョージ、エリオット」）……72
汝の友（「インヂヤナポリス、ジヤアーナル」の載する処）……73
偉大なる人（アデレイド、プロクトル夫人）……73
我の要むるもの……73
善き術……74

四　短歌・解題

【短歌】

妻の柩を送りて詠める……75
〔三芳野の…〕……75
〔来て見ん…〕……75
〔いたづらに…〕……75
〔三年経し…〕……76
〔なき人の…〕……76
花を見て感あり……76
病後の歓喜……76
〔思ひやる…〕……77
〔紅葉せる…〕……77
今年の秋……77
〔我心はりまが灘や…〕……77
秋日曳杖……77
晩秋日光山中の探勝……78
関東平原の小春……78
春の曙……78
〔箒川岸を…〕……78
北海道訪問日記……79
背教者としての有島武郎氏……79
誘惑に勝つの途……80
支那と日本……80
〔百年の…〕……80
〔現世の…〕……80

【短歌・日記】

〔来り観よ…〕……81
〔喜びも悲しみも…〕……81
〔我が前に…〕……81
〔聖書もて…〕……81
〔我はたゞ…〕……81
〔木曾山の…〕……81
〔湯河原や…〕……82
〔上り下り多き…〕……82
〔今頃は…〕……82
〔泊るべき…〕……82
〔戦は一先づ止んで…〕……82
〔故郷の山と川…〕……82
〔火に怒る山も…〕……82
〔霧凝りて…〕……83
〔人は去り…〕……83
〔吹く風を…〕……83
〔千曲川岸に…〕……83
〔温かき足と…〕……83
〔我子をば…〕……84
〔メキシコや…〕……84
〔我が友に…〕……84

〔ヘルモンの山を…〕……84
〔日に日にとかはる…〕……84
〔西のうみ…〕……84
〔文明の音と…〕……85
〔人の子の…〕……85
〔故国は悪魔の…〕……85
〔三笠山人の心は…〕……85
〔義務終へて…〕……85
〔縦し種は…〕……86
〔荒れ果つる…〕……86
〔木曾山の同じ…〕……86
〔暑さこそ…〕……86
〔待望む…〕……86
〔日に日にと廃れ行く…〕……86
〔行詰る…〕……87
〔有難し…〕……87
〔近代人居らぬ…〕……87
〔来て見れば…〕……87
〔此夏は…〕……87
〔夏過ぎて…〕……87
〔神の座の…〕……88
〔カスピヤン…〕……88
〔愛子を…〕……88
〔我家に…〕……88
〔植さりし…〕……88
〔その霊は…〕……89
〔梅が香に…〕……89
〔火と水と…〕……89
〔香はしき…〕……89
〔我が家の…〕……89
「正子の北海道行を送る」……89
〔空は澄み…〕……90
〔孫去りて…〕……90
〔荷は重し…〕……90
〔上は空…〕……90
〔オリオンの…〕……90
〔アラスカや…〕……90
「札幌の春を想ふて」……90
〔忘るなよ…〕……91
〔世の幸福に…〕……91
〔日に日にと亡び行く…〕……91
桂子を迎ふ……91
〔石狩の河を…〕……91
〔温き愛の褥に…〕……92
〔喜びを共に…〕……92
〔一日に…〕……92
〔縦し身には…〕……92
〔限りなき…〕……92
〔第五十回独り…〕……92
〔元日や…〕……92
〔我家の…〕……92
〔山高し…〕……93
〔天地を劈く…〕……93
〔浅間山麓の…〕……93

〔パムパスの…〕……93
〔雪国に…〕……93
〔限りなき…〕……94
〔荒ぶ世の…〕……94
〔内村は…〕……94
〔古稀など、…〕……94
〔後志や…〕……94
〔夜をこめて…〕……95
〔古稀の春…〕……95
〔夜毎に…〕……95
〔柏木に動揺あり…〕……95
〔柏木にありし…〕……95
〔到るべき…〕……95

五　解説
内村鑑三の信仰詩・訳詩・短歌と信仰宇宙（コスモス）――神の言（ことば）の交響楽……97

六　文学観
内村鑑三の文学観――世界精神と純福音の発露……107

内村鑑三略年譜……113

参考文献……119

あとがき……121

凡例

一、詩

詩は、発表年の順序に従い配列し、題名があるものは題名、著書のなかに記された等により題名がない詩については、冒頭部分を〔　〕で補記した。詩の最後には、発表雑誌名、著書（出版社、出版年、元号）、号数、西暦、丸括弧内には元号を付記し、『内村鑑三全集』の巻数、頁数を記載した。

著書の例

『地理学考』、警醒社書店、一八九四（明治二七）年、『内村鑑三全集』第二巻（以下、全集は巻数のみに略）、三八一―三八三頁。

雑誌掲載例

『国民之友』二七七号、一八九六（明治二九）年一月四日、第三巻、二〇五頁。

二、訳詩

訳詩は、発表年の順序に従い配列し、題名があるものは題名、題名がない詩については、冒頭部分を〔　〕で補記し、題名の下に丸括弧で著者が用いた作者名等を付記した。訳詩の最後には、発表雑誌名、著書（出版社、出版年、元号）、号数、西暦、丸括弧内には元号を付記し、『内村鑑三全集』等の巻数、頁数を記載した。

訳詩集『愛吟』については、独立した章に改めた。『愛吟』の詩は、『内村鑑三全集』第四巻「愛吟」から抜粋した。そのさい、カーライル「コロムウエル伝」の「ダンバーの戦争」は省き、既出詩は初出掲載で扱い、『愛吟』初出詩は『愛吟』のなかに収めた。『愛吟』の原詩「AI-GIN（Favorite Singing）」は、原題名、作者名を記載し、原詩本文は省略した（原詩は、全集第四巻所収『愛吟』を参照）。

「余の特愛の讃美歌」に掲載された讃美歌、「聖詩訳解」のなかの詩篇等、旧新約聖書中の聖句などは、訳詩から省いた。

著書の例

〔羽翼（はね）あらば何処（いづこ）に飛（と）ばむわが魂（たま）よ〕（ヘンリー、バートン）、『求安録』、第二巻、一六四頁。

雑誌掲載例

『東京独立雑誌』一一号、一八九八（明治三一）年一〇月二五日、第六巻、一七一―一七三頁。

三、短歌

短歌は、発表年の順序に従い配列し、題名があるものは題名、題名がないものについては、発表誌、著書等の前に、冒頭部分を〔　〕で記した。短歌の最後には、発表雑誌名、著書（出版社、出版年、元号）、号数、西暦、丸括弧内には元号を付記し、『内村鑑三全集』の巻数、頁数を記載した。短歌・日記は、日記の日付、『内村鑑三全集』の巻数、頁数を記載した。

雑誌掲載例

「花を見て感あり」『聖書之研究』六三号、一九〇五（明治三八）年四月二〇日、第一三巻、一三四頁。

日記掲載例

〔来り観よ…〕「日記」一九一九（大正八）年八月五日、第三三巻、一四二頁。

四、解題

解題は、詩、訳詩、短歌の次に、「〇」以下に解題を記載した。解題の内容については、詩は信仰・文学的解釈の観点から、発表された詩等の時代・社会背景、内村鑑三の評伝的・信仰的考察、掲載誌・著作等の概要などを主な要点とした。訳詩については、作者名は著者の表記に従い、原詩の記載があるものはそれを収め、詩は作者名と、適宜生没年を付記した。解題のなかの「内村鑑三」は、「著者」と表記し、『内村鑑三全集』は巻数のみに略記した。

五、解説・文学観

詩、訳詩、『愛吟』（抜粋）、短歌ごとに、解題をもとに、文学的特徴、信仰的解釈、評伝的理解をもとに解説した。内村鑑三の文学観は、「何故に大文学は出ざる乎」（『国民之友』二五六号、一八九五（明治二八）年七月一三日）、「如何にして大文学を得ん乎」（『国民之友』二六五、二六六号、一八九五（明治二八）年一〇月一二、一九日）などをもとに、その信仰的意義とともに概観した。

六、略年譜・文献リスト

内村鑑三の略年譜は、西暦、年齢を記載したあと、事項、著書、論文名等を記載し、詩については、発表年月のもと、題名、執筆時期、掲載誌、号数を記載した。文献リストは、内村鑑三と信仰詩・訳詩・短歌等に関連し、参考にした論文、著書を著者名順に配列した。

七、聖書

聖書は、主に『聖書（口語訳）』（日本聖書協会発行、一九五五年）、『聖書　聖書協会共同訳――旧約聖書続編付き』（日本聖書協会発行、二〇一八年）、『文語訳　新約聖書』（岩波書店、二〇一四年）、『文語訳　舊新約聖書』（日本聖書協会発行、二〇一八年）などを用いた。

八、典拠・参考

詩・訳詩・短歌等の集成、著者の著述の引用については、『内村鑑三全集』（岩波書店、一九八〇―一九八四年）を基本的典拠とし、『聖書之研究』（一九〇〇（明治三三）年九月三〇日―一九三〇（昭和五）年四月二五日）、全三五七号を参照した。解題等については、『内村鑑三全集』の各巻に付された著述の「解題」を参考にし、第四〇巻所収の内村鑑三の「年譜」を参照した。

解題・解説等の執筆においては、小林孝吉『内村鑑三――私は一基督者である』（御茶の水書房、二〇一六年）、同『内村鑑三の聖書講解――神の言のコスモスと再臨信仰』（教文館、二〇二〇年）、同「内村鑑三の聖書講解と再臨信仰――臨りつつあるイエス」（『内村鑑三研究』第五五号、教文館、二〇二二年四月）等の拙著・論文をもとに、巻末の参考文献を適宜参照した。

一　詩・解題

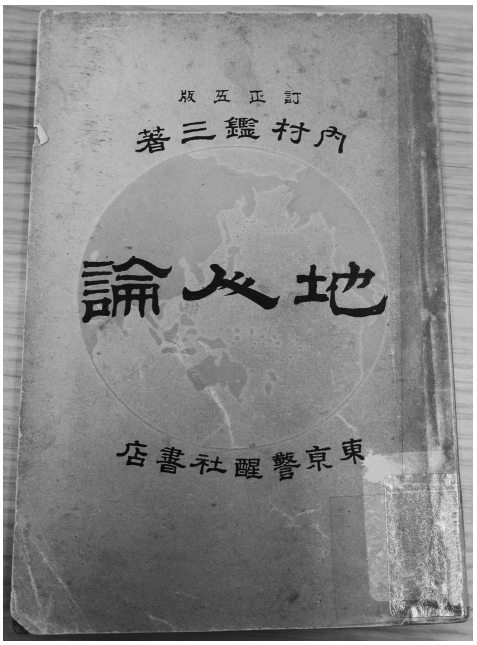
海

海よ、海よ、我を寛(ひろ)くせよ、
俗界の権者我を擒(とりこ)にし、
その古俗と旧習とは我を檻し、
我をして我が羽翼を伸(のば)し得ざらしむ。
我は海鷗の自由を慕ふなり、
我は鵬鷚(かいつぶり)の飛力を羨むなり、
無窮の霊を有する我は
此圧迫狭隘に堪ゆる能はざるなり。

海よ、海よ、我を清くせよ、
腐敗は平原都城を襲へり、
山間の仙境亦陋習(またろうしゅう)に化せり、
浩然の気我今之を全土に求むる能はず。
洋面到る処酸気多し、
海上波静かなる時風に香味あり、
清浄を愛する我の霊は
此穢此汚に堪ゆる能はざるなり。

海よ、海よ、我を強くせよ、
配慮は我の英気を挫(くじ)けり、
辛労は我の思惟を圧せり、
我精我筋　将(まさ)に縮滅せんと欲す。
濤上風(とうじょうふう)に逆ふ時我に胆力生る、
船頭梶を禦する時我に懼怖なし、
活動を要する我の生は
此軟此弱に堪ゆる能はざるなり。

（『地理学考』、警醒社書店、一八九四（明治二七）年、『内村鑑三全集』第二巻（以下、全集は巻数のみに略、三八一―三八三頁））



『地人論』（『地理学考』を改題）
今井館教友会所蔵資料

○『地理学考』は、一八九四（明治二七）年に警醒社書店から刊行され（五月一〇日発行）、一八九七（明治三〇）年、『地人論』と改題された。後に、『愛吟』（警醒社書店、一八九七年）に「附録　海」として再録された。『地理学考』の「自序」には、「此書は十数年間に渉る著者の地理学上の考察より成れり」（第二巻、三五三頁）と記され、万国地誌に歴史を加えた内容となっている。目次によると、第一章「地理学研究の目的」から地理学の歴史、地理学と摂理、亜細亜、欧羅巴、亜米利加、東洋、日本、南三大陸まで、全一〇章で構成されている。本書の冒頭には、研究の目的が以下のように記されている。「之を空間の無限大に比すれば塵埃の細微なるも尚ほ大に過ぐるが如く（中略）此小豆大の地球こそ吾人生命の繋がる所にして、我は此地に素めて生を有し、此地に育せられ、此地に自覚し、此地に愛し、愛せられ、終に此地に死骸を遺して逝く、我に生を給せし地球、我の生命を与ふる地球、我の遺骨を托する地球、我之を研究せずして休まんや」（第二巻、三五六頁）。これは内村鑑三（以下、著者と略）の基督教青年会第六回夏期学校での講演「後世への最大遺物」（一八九四（明治二七）年七月一六―一七日）とも通じている。本詩は、第三章「地理学と歴史其二」のなかの「海国」に収められている。『愛吟』の目次には、「自作「地人論」に載す」と記された詩「海」の前には、「海国」と題して、以下のような五行ほどの文章が添えられている。「渺茫たる海面是広闊の代名詞なり、山間の頑民、市街の怯夫、天涯無限蒼浪の上に浮ぶに及んで素めて宇宙の大を悟り、狭隘圧制の憎むべきを知覚す」（同、三八一頁）。我等は海を臨んで世界の民となり、退歩と嫉妬は陸の物であり、進取と寛容は海の産なり……と。

楽しき生涯（韻なき紀律なき一片の真情）

我の詔ふべき人なし
我の組すべき党派なし
我の戴くべき僧侶なし
我の維持すべき爵位なし

我に事ふべきの神あり
我に愛すべきの国あり
我に救ふべきの人あり
我に養ふべきの父母と妻子あり

周囲の山何ぞ青き
加茂の水何ぞ清き
空の星何ぞ高き
朝の風何ぞ爽き

一函の書に千古の智恵あり
以て英雄と共に語るを得べし
一茎の筆に奇異の力あり
以て志を千載に述るを得べし

我に友を容るゝの室あり
我に情を綴るゝのペンあり
炉辺団坐して時事を慨し
異域書を飛して孤独を慰む

翁は机に凭れ
嫗は針にあり
婦は厨に急はしく

児は万歳を舞ふ

感謝して日光を迎へ
感謝して麁膳（そぜん）に対し
感謝して天職を執り
感謝して眠に就く

生を得る何ぞ楽しき
讃歌絶ゆる間なし

（『国民之友』二七七号、一八九六（明治二九）年一月四日、第三巻、二〇五―二〇七頁）

○『国民之友』（民友社）は、一八八七（明治二〇）年二月から一八九九（明治三二）年八月まで発行された総合雑誌である。主筆は徳富蘇峰（一八六三―一九五七年）で、明治二〇年代を代表する論壇、文壇誌でもあった。思想家としては、中江兆民、植村正久、新渡戸稲造、内村鑑三らが寄稿した。著者は、本誌に渡米記「流竄録」（二三三―二五一号）、日清戦争を清国の覚醒のための「義戦」（日露戦争以後は、それを恥じキリスト教的非戦論の立場に立つ）と位置づけた「日中戦争の義」（訳文）（二三四号）、「日中戦争の目的如何」（二三七号）、「何故に大文学は出ざる乎」（二五六号）、「如何にして大文学を得ん乎」（二六五―二六六号）、「時勢の観察」（三〇九号）、詩では「楽しき生涯」（二七七号）、「寒中の木の芽」（二八四号）、「〔正義は口にあり〕」（三〇九号）などを発表している。徳富蘇峰は、立場の違いを超えて著者に多くの原稿を依頼し、貧窮する生活を経済的に支えたのである。彼は「思い出」（鈴木俊郎編『回想の内村鑑三』、岩波書店、一九五六年）のなかで、「内村さんのような人が明治に産出したことは明治の光だと思う。あの人は必ず後に傳わる人だと思う」（七―八頁）と回顧している。本詩は、『国民之友』の「藻塩草」欄に掲載され、そこには日清戦争（一八九四年八月―一八九五年三月）後の社会を背景にした、著者の信仰と思想が顕われている。『小憤慨録下』（少年園営業部、一八九八年）に、題名に「（明治廿九年元旦京都流寓に於て）」と付記して、「寡婦の除夜」とともに再録された。

寒中の木の芽

一、春の枝に花あり
夏の枝に葉あり
秋の枝に果あり
冬の枝に慰（なぐさめ）あり

二、花散りて後に
葉落ちて後に
果失せて後に
芽は枝に顕はる

三、嗚呼（ああ）憂に沈むものよ
嗚呼不幸をかこつものよ
嗚呼冀望の失せしものよ
春陽の期近し

四、春の枝に花あり
夏の枝に葉あり
秋の枝に果あり
冬の枝に慰あり

（『国民之友』二八四号、一八九六（明治二九）年二月二二日、第三巻、二〇八頁）

○本詩は、『How I Became a Christian』（警醒社書店、一九八五年）刊行の翌年二月、三五歳を前に『国民之友』（二八四号）の「藻塩草」欄に発表された。著者にとって、自然、天然はそのまま神の意の顕われであり、そこには四季とともに希望と慰めがあった。春は「花」、夏は「葉」、秋は「果」、冬は「慰」があり、神の創造による天然宇宙がある。著者にとって、北海道の札幌農学校の周りの自然も、アメリカのアマストの風景も、この天然宇宙のすべては、そのまま無教会の教会でもあった。また、一八九四（明治二七）年に警醒社書店から刊行された『伝道之精神』（二月一〇日発行）の「如何にして宗教界今日の乱麻に処せん乎」には、当時の「混沌たる時代」、思想の「暗黒時代」について、次のように象徴的に記している。「自然は昼を与へて亦夜を給せり、盛夏に植生の繁茂するありて厳冬に草木の凋れるあり、暗黒と厳冬とは休養の為めなり、我等が外に伸る能はざる時は内に強固なるを得べし、暗黒宇宙を掩ひ鳥獣巣に就きし時、孤燈の下、暖炉の辺、一家の団欒、友人の対座あるにあらずや、働くのみが生涯にはあらざるなり、厳風梢を払ひ、霜雪寒深き時、疎林凋零して紅花緑葉眼を歓ばさゞる時、是れ植生の根を深ふする時ならずや、冬なくして春の来るなし」（第二巻、三四八頁、「内村鑑三の文学観」、参照）。

〔正義は口にあり〕

正義は口にあり、
攻略は腹にあり、
義は名の為に求め、
名は利の為に貴ぶ。
身は党則に縛られて自由を唱へ、
心は利慾に駆られて愛国を叫ぶ、
衆愚の声に震へ、
寡婦の涙に動かず。
野の獣に断あり、
彼に断なし、
空の鳥に情あり、
彼に情なし。
風と共に飛び、
草と共に靡き、
偽善者の偽善者、
奴隷の奴隷。

（『国民の友』三〇九号、一八九六（明治二九）年八月一五日、第三巻、二三〇―二三一頁）

○『国民の友』三〇九号の「藻塩草」欄に掲載された「時勢の観察」のなかの「其一、公徳と私徳の分離」の最後に置かれている。「時勢の観察」の冒頭には、「(Facit indignatio versum.)〔義憤は韻文を助く〕」と記されている。「其一」で、著者は明治二〇年代最後の年の時勢について、以下のように述べている。公徳は私徳を離れて論ずるべきか。個人的偽善者は政治的偽善者である。義の名で利を求めるもの、紙上で天下の大義を称え情に鈍い新聞記者、著書で理想的人物を描き自らは理想を追わない文学者、勅語に低頭しなければ売国奴の名を付しながら下品な小説を

嗜む学生、虚業家である実業家、隣国の独立を称えながら自国の強大を計る国民、それらはことごとく偽善者であり、「面を被る役者」「愛国者の人形なり」（第三巻、二三〇頁）といい、「嗚呼若しアルモヂユスの秘術ありて彼等の楽屋に入るを得るならば」（同前）の後、長い「……」を付し、この詩を続けている。ここには「不敬事件」や「義の戦争」が影を落としている。著者には、エレミヤなど旧約の預言者へも通ずる、「寡婦の涙」に動じず「断」と「情」なき膨張国家へと進む近代日本社会へ、国民への信仰的「義憤」が流れている。

寡婦の除夜

月清し、星白し、
霜深し、夜寒し、
家貧し、友尠し、
歳尽て人帰らず、

思は走る西の海
涙は凍る威海湾
南の島に船出せし
恋しき人の迹ゆかし

人には春の晴衣
軍功の祝酒
我には仮りの侘住
独り手向る閼伽の水

我空ふして人は充つ
我衰へて国栄ふ
真を冥土の夫に尽し
節を戦後の国に全ふす

月清し、星白し、
霜深し、夜寒し、
家貧し、友尠し、
歳尽きて人帰らず。

（『福音新報』七八号、一八九六（明治二九）年一二月二五日、第三巻、二七三―二七四頁）

○アジアを巻き込んだ世界的な帝国主義のなかで、日清戦争はひとたび終結するが、以後日露、アジア侵略の一五年戦争、太平洋戦争まで、戦争の半世紀が続いていくことになる。日清戦争は、日本の勝利で終わり、多額の賠償金、台湾、澎湖島諸島、遼東半島を得るが、ロシア、ドイツ、フランスの三国干渉により遼東半島を返還する。その戦争は、「義戦」ではなかったのである。その二年後、そんな日本社会の年末の風景を詩にして、『福音新報』（七八号）に発表する。『福音新報』は、植村正久が創刊したキリスト教週間新聞（一八九一―一九四二年）で、前誌は『福音週報』（一八九〇―九一年）、一九三三（昭和八）年廃刊、四カ月後に復刊、一九四二（昭和一七）年に『日本基督教新報』に統合された（『世界大百科事典第二版』、平凡社）。詩は、『小憤慨録下』に「寡婦の除夜」として再録され、字句を一部改めるとともに、「（明治廿九年の歳末、軍人が戦勝に誇るを憤りて詠める）」が付加されている。著者は、自らの「愚」「不信仰」を恥じ、日露戦争へと傾く日本社会で、キリスト教による「非戦論」「戦争廃止論」へと向かうのである。日露戦争のなかで、一九〇五（明治三八）年一月二〇日発行の『聖書之研究』六〇号「〔新

年の誓ひ他」」には、「寡婦の声」について、以下のように記している。「非戦の声は微なり、然れども寡婦が其杖として頼む一人の男子を召集されし時に彼女の心底に微なる非戦の声揚る」（「微なる非戦論」、第一三巻、五頁）、「寡婦の声は勿論天下を動かすに足らず、然れども彼等も亦其憂愁を訴ふるの権利を有す」（「寡婦の声」、同、六頁）、「寡婦の声は地に於ては聴かれず、然れども天に於ては神を動かすの力を有す」（「慧き政治家」、同前）。著者の非戦論には、「寡婦の声」が響いている。また、歌人・与謝野晶子は出征した弟・鳳籌三郎を想い、「旅順口包囲軍の中に在る弟を歎きて」と付記した詩「君死にたまふこと勿れ」（『明星』一九〇四年九月号）を発表した。

新詠

霖雨の空は霽れにけり
　日の太陽は照りにけり
神は此日を祝しけん
　特に此日を祝しけん

疑団の雲は晴れにけり
　義の太陽は昇りけり
神は此身を恵みけん
　特に此身を恵みけん

此日此身を我が神よ
　活ける犠牲とし受け給へ
我と我等を恵みてぞ
　ペンテコステの火を降せ。

（『聖書之研究』二四号、一九〇二（明治三五）年八月二五日、第一〇巻、二七二頁）

○『聖書之研究』（聖書研究社、月刊）は、主幹・内村鑑三として一九〇〇（明治三三）年九月三〇日に創刊され、以後無教会のエクレシアとして、内村鑑三の死（一九三〇年三月二八日）の翌月である四月二五日まで、三〇年間、全三五七号発行された。『聖書之研究』は、「基督の為國の為（Pro Christ et Patria.）を表紙に記し、第一号は、ロマ書第一章一六節「我は福音を耻とせず、此福音はユダヤ人を始め、ギリシヤ人、總て信ずる者を救はんとの神の大能なればなり。保羅」を掲げ、次のような文章を載せている。「聖書に曰く生命の水の河あり、其水澄く徹りて水晶の如し、神と羔の宝坐より出づ、河の左右に生命の樹あり、其樹の葉は万国の民を医すべしと、（黙示録廿三章一、二節）、余輩は天上天下此福音を除いて国民を医す者の他にあるを知らず、此誌豈今日に於て出でざるべけんや」（第八巻、二八二頁、口絵参照）。この「生命の水の河」は、その信仰的生涯をかけた本誌に、著者は旧約三九書、新約二七書の聖書講解、キリスト教思想、福音・信仰的著述、詩、訳詩、随筆等を掲載した。本詩の前には、以下のような文章が置かれている。「七月三十一日講談会園遊会の日、霖雨霽れ、久振りにて日光を仰ぐ、時に我が同志中心に新光明に接せし者多きを想ひ、彼等の歓を我が心に移して左（解題では「右」に掲載、以下、同じ）の一詩を賦す」（第一〇巻、二七二頁）。参加者の一人である「東京　鹿子木員信（通學）」は、その感想を次のように記している。「七月卅一日の夕べ我講談會の附物たる園遊會は開かれぬ。終日朦朧たりし空は次第に輝きそめぬ（中略）而して其高き〳〵天穹が光り輝く寶石もて飾らゝ壮大なる神の聖工を、然れ共例令其が僅かに十七年九ヶ月の短生涯なりしと雖未だ斯かる感謝の念をもて一度も神の恵に接せざりき、……」（『聖書之研究』二四号、七四頁）。

陸中花巻の十二月廿日

外には雪は二尺余り、
寒気は膚を劈くばかり、
北上の水は浩々と流れ、
岩手の峰は遙々と聳ゆ、

内には同志は四十余り、
歓喜は胸に溢るゝばかり、
讃美の歌は洋々と挙り、
感謝の声は咽々と聞ゆ、

嗚哉美はしき此集合、
聖霊は奥羽の野に下れり、
我儕は深雪の中に在て、
栄光の天国に居る乎と想へり、

（『聖書之研究』四八号、一九〇四（明治三七）年一月二一日、第一二巻、二九―三〇頁）

○全集第一二巻の「解題」（五〇〇―五〇一頁）、山本泰次郎『内村鑑三とひとりの弟子――斉藤宗次郎あての書簡による』（教文館、一九八一年）等には、その経緯が以下のように記されている。『東京独立雑誌』第一四号以来、内村を敬愛していた花巻在住の斉藤宗次郎は、内村を継ぐ非戦論者として兵役と軍事費を含む国税の納入を拒否する旨を師・内村に手紙で知らせる（一九〇三年一二月六日付）。内村は、「今日書面を以て御問合せの件は頗る重大なる事件に御座候間御面会の上、篤と小生意見を申上ぐるまでは確定御控へ願上候」（傍点は山本、一〇二頁）と、一二月八日付の書簡を送る。その後、内村は一二月一九日、二〇日と「秘密に」（「解題」）に花巻を訪れ、斉藤に自分の意見とともに再考を促し、集まった教友に聖書講義と説教を行う。帰宅した内村から、斉藤に詩「陸中花巻の十二月廿日」が届く。書簡には、「右は今日東京市中喧騒の中を歩みながら思ひ出しましたから寫して差上げます。十二月廿三日夜」（鈴木範久「第11巻について」、全集月報5、八頁、書簡写し）と付記されていた。山本泰次郎の前著によると、「日露戦争開戦の直前、斉藤はキリスト信者として非戦主義を貫こうと決意した。そして銃殺刑を覚悟の上、兵役、納税を拒否しようとして、内村に相談した。内村は福音の精神を説いて、これを思いとどまらせた。これが花巻非戦論事件である」（九九頁）と書かれている。内村は午前二時に花巻につくと、吹雪のなかを斉藤らが引く橇で斉藤の家に着く。翌日、二人は六〇センチほど積もった雪を踏んで、北上川畔まで散歩する。朝日に輝く銀世界……。途中、内村は、斉藤にいう。「今朝はあのように話したが、しかしもしそれが君の良心の命令であるならば、やりたまえ」（一〇五頁）と。斉藤は、答える。「わたしが間違っておりました。もうアンナ馬鹿の事は致しません」（一〇五―一〇六頁）。ここには二人の非戦論者がいる。花巻の深雪のなかで、歓喜、讃美、栄光がある。

天地の花なる薔薇

其花に伴ふて刺あるは
其、地の産なるの証なり、
其刺に伴ふて花あるは
天の之に宿るの徴なり。

（『聖書之研究』五四号、一九〇四（明治三七）年七月二一日、第一

二巻、二五四頁）

○『聖書之研究』五四号の「贖罪説と近世思想（一）」（デンニー原著、宮川巳作纂譯）の最後の五行ほどの誌面の空白に題名とともに記されている（四〇頁）。題名「天地の花なる薔薇」には、黒丸の強調点が付されている。地の証として花には刺が、刺には天を宿す花が伴うのである。天地にあるものには、花と刺とがあり、これは著者の信仰宇宙でもある。

春は来りつゝある

雪は降りつゝある
　然かし春は来りつゝある
寒は強くある
　然かし春は来りつゝある
　　春は来りつゝある
　　春は来りつゝある
　　雪の降るにも拘はらず
　　寒の強きにも拘はらず
　　春は来りつゝある

慰めよ苦しめる友よ
汝の患難多きにも拘はらず
汝の苦痛強きにも拘はらず
　春は汝にもまた来りつゝある

（『新希望』七三号、一九〇六（明治三九）年三月一〇日、第一四巻、六一頁）

○『新希望』七三号の「雑録」（「病中雑記（病気御見舞御礼の辞に代ふ）」には、次のような文章が記されている。「然かし疾病に基く無為の五週間は余輩に取りて決して無益ではなかつた、余輩は之に由て神より多くの新らしき教訓を得た、余輩は病癒えて後に更に一歩神に近くなつたやうに感ずる、……」（第一四巻、五八頁）。本詩は、「角筈生」の署名のもと、その最後に掲載され、『歓喜と希望』（聖書研究社、一九〇九年）『信仰日記』（岩波書店、一九一九年）に再録された。一九〇五（明治三八）年、六月一日発行の六四号から、『聖書之研究』は『新希望』に改題され、一九〇六（明治三九）年五月一〇日発行の七四号まで同誌名で発行された。

春の到来

佳き期は来れり
春は来れり
花は咲かんとす
鳥は歌はんとす
小川の氷は解けて
其辺に菫笑ふ。

佳き期は来れり
聖霊は降れり
栄光は顕れんとす
讃美は揚らんとす
心の疑団は釈けて
其衷に歓喜溢る。

住き期は来れり
春は来れり
春は外よりも来れり
亦内よりも来れり。

（『新希望』七四号、一九〇六（明治三九）年四月一〇日、第一四巻、一二九頁）

○『新希望』の「雑録」（「雅各書の研究（七）」）の最後の頁の下段に掲載された（六二頁）。その次頁には、「本誌名称復舊に就き謹告」として、以下のように誌名を戻す社告を載せている。「本誌はもと『聖書之研究』と稱したりしが昨年五月『新希望』と改題せり、而して改題は少しく社會の意嚮に適ひたりけん、讀者は改題以前に比し殆んど三割を増加せり。（中略）『聖書之研究』の名はまた海外にまで知れ渡るに至れり、……」（六三頁）、「余輩は美名を以て世を余輩に引附けんことを懼れ茲に再び不人望なる『聖書之研究』に歸らんと欲す」（六三―六四頁）。

秋酣なり

コスモス開き、茶梅咲き、木犀匂ひ、菊花薫る、燈前夜静かにして筆勢急なり、知る天啓豊かにして秋酣なるを。

（『聖書之研究』一〇四号、一九〇八（明治四一）年一一月一〇日、第一六巻、一二〇頁）

○『聖書之研究』には、巻頭に「所感」として、著者による一〇篇ほどの短文が置かれている。それは信仰的結晶としての散文詩、自然・天然、宇宙の映す象徴詩でもある。本詩は、詩の形態をとっていないが、『聖書之研究』一〇四号「所感」の冒頭に置かれ、『歓喜と希望』に再録されている。それは「秋酣」の風景であり、「天啓豊か」な信仰詩でもある。「秋酣なり」の次には、「人生の四期」という文章がある。人生の春は、勇気、希望、夢、愛、しかし花のみで実がなく、希望は憂愁、歓喜には煩悶が伴い、夏は神の存在さえも疑う時期、秋は感涙、思惟、沈黙、感謝、祈り、実は熟し楽しき時期、人生の冬は、絶望ではなく、来らん春を待ち望み、父の家に還る……と。著者にとって、天然宇宙も、人生も「四期（季）」という信仰的宇宙のなかを巡るのである。このとき、著者は四七歳、実が熟する時期である。冬は、再臨のキリストを望み、父の家に還る、そんな再臨待望の時期である。『聖書之研究』同号の「雑録」には、「目黒の秋に想ふ」（署名「あ、い、生」）という、以下のような文章がある。「神の至聖所は嚴粛なる自然の沈默なり、風徐に人の世の秋を齎す時神はしとやかに人の子の靈魂の戸をぞ叩き給ふなる――吾は目黒の秋に默せり」（四六頁）。

二月中旬

風はまだ寒くある、
土はまだ堅く凍る、
青きは未だ野を飾らない、
清きは未だ空に響かない、
冬は未だ我等を去らない、
彼の威力は今尚ほ我等を圧する。

然れど日は稍々長くなつた、
温かき風は時には来る、
芹は泉のほとりに生えて、
魚は時々巣を出て遊ぶ、

冬の威力はすでに挫けた、
春の到来は遠くはない。

（『聖書之研究』一二八号、一九一一（明治四四）年二月一〇日、第一八巻、七〇頁）

○『聖書之研究』一二八号の「マシユウ・アーノルドの宗教観」（畔上賢造）の最後の頁の下段に掲載された（署名は「曳杖生」、四八頁）。本号には、前年に静岡の富士青年会々館での講演の大意「信仰の必要」が収録されている。その結びには、以下のように記されている。「信仰である、信仰である、神を識るの唯一の道は信仰である、其恩択に与かるの唯一の方法は信仰である、……」（第一八巻、六九頁）。著者は、風が冷たく、土がまだ凍る「二月中旬」の風景に、芹が生え、魚が遊ぶ「春の到来」を近くに感じている。そこには、神の愛なる「恩択」が満ちている（口絵参照）。

我等は四人である

我等は四人であつた、
而して今尚ほ四人である、
戸籍帳簿に一人の名は消え、
四角の食台の一方は空しく、
四部合奏の一部は欠けて、
讃美の調子は乱されしと雖も、
而かも我等は今尚ほ四人である。

我等は今尚ほ四人である、
地の帳簿に一人の名は消えて、
天の記録に一人の名は殖えた、
三度の食時に空席は出来たが、
残る三人はより親しく成つた、
彼女は今は我等の衷に居る、
一人は三人を縛る愛の絆となつた。

然し我等は何時までも斯くあるのではない、
我等は後に又前の如く四人に成るのである、
神の菰の鳴り響く時、
寝れる者が皆な起き上る時、
主が再たび此地に臨り給ふ時、
新らしきエルサレムが天より降る時、
我等は再たび四人に成るのである。

（『聖書之研究』一三九号、一九一二（明治四五）年二月一〇日、第一九巻、四六頁）

○『聖書之研究』一三九号は、ルツの死の翌月の二月一〇日発行され、全体的に「ルツ號」（「ことはり」）となり、ルツが日曜学校に学んだ角筈レバノン教会の牧師・福田錠二「主の用也」、東京牛込教会牧師・田島進などの弔辞、著者の「今日の此式を私供は葬式と見做さないのであります、今日の此式は是れルツ子の結婚式であります」「今日は是れルツ子の晴れの祝儀の日であります」（第一九巻、三三頁）と述べた「謝辞」、村山元子の追悼詩「雑司ヶ谷の里に静に眠り給ふ内村ルツ子嬢の御上を思ひまつりて」、『愛吟』より再録されたベン・ジョンソンの詩「短命」、最後に「我等は四人である」が掲載されている。本号には、冒頭「如何許の愛ぞ」の次に、「神は愛なり」という、以下のような短文が載っている。「人生に悲痛多し、然れども神は愛なり、すべての生命は死を以

て終る、然れども神は愛なり、神は少女の綻びんとする蕾の生命をさへ取去り給ふ、然れども彼は愛なり、神は愛なり、然り、神は愛なり、世は廃れ、地は壊れ、愛する者は悉く失するとも神は愛なり」（第一九巻、二六頁）。「我等は四人である」は、著者の信仰の生涯がいきつく「再臨信仰」の生まれくる水源地となる詩である。ここには、キリスト再臨＝臨りつつあるイエス――再臨信仰の原響が木霊している。死は再会への入口にして、楽園喪失後に、「新らしきエルサレムが天より降る時」（楽園回復）＝再臨は、未来社会の希望となる。「我等は四人であつた、而して今尚ほ四人である」。ルツの死の四年後、第一次世界大戦の渦中で、友人D・C・ベルから一九一六（大正五）年八月一日付書簡とともに、『日曜学校時報』（The Sunday School Times,June 24）が届くと、そこに掲載されたC・G・トランブルの「キリストの再臨は果して実際的問題ならざる乎」が著者を再臨信仰に誘うことになった。同年八月二四日付の著者のベル宛書簡には、次のようにしたためられている。「長い間私の心から消えていた古い信仰を、新しくよみがえらせてくれました。そして今や私は *παρουσία*（再臨）こそ聖書の鍵であり、これを欠いては、聖者〔書〕は初めから終わりまで、一つの大きな謎であることが分かりました」（山本泰次郎『内村鑑三――信仰・生涯・友情』、東海大学出版会、一九六六年、五〇五頁、補記引用者）。ルツの死に発した再臨信仰の水脈は、ここに噴出したのである。なお、本詩は著者が札幌農学校の時代から親しんだイギリスの詩人ワーズワース（William Wordsworth、「〔意を留めよ〕（オルヅオス）」「〔罪に枯死する我等と雖も〕（オルヅオス）」等も参照）の詩「わたしたちは七人（We are Seven）」とも通じている（今高義也『内村鑑三の世界像――伝統・信仰・詩歌』第六章）。

『其日其時』

其日其時を知る者は唯我父のみ、天の使者も誰も知る者なし。馬太伝
廿四章卅六節。

其日其時を我は知らず、
然れども知る必ず或る時、
我は面と面を合して彼を見、
我が知らるゝ如く彼を知らん事を。

其日其時を我は知らず、
然れども知る必ず或る時、
我は再たび我が愛する者と会ひ、
而して復た死あらず哀哭悲痛あらざる事を。

其日其時を我は知らず、
然れども知る必ず或る時、
我が希望は悉く充たされ、
我が涙は尽く拭はれんことを。

其日其時を我は知らず、
我は又之を知らんと欲せず、
我は聖父の約束を信ず、
我は安静に其日の到るを待つ。

（『聖書之研究』一四三号、一九一二（明治四五）年六月一〇日、第一九巻、一五五―一五六頁）

○「其日其時」とは、キリスト再臨の「大いなる日」である。それはルツとの再会という希望の日でもある。「待望生」と署名されたこの詩は、

『信仰日記』に再録された。著者は、再臨信仰を確信して以後、「基督信者と其希望」（『聖書之研究』二一二号、一九一八（大正七）年三月一〇日）のなかで、約束と恩恵の待望こそキリスト教の信仰であるといい、その文章をこう結んでいる。「真に父を信ずる子に取ては寧ろ待たせらるゝを以て喜びとなす、十年可なり百年可なり五百年可なり、否千年を一日の如く見給ふ神の約束を信じて我等は墳墓の中に待ち望む事一万年と雖ども敢て長しとしないのである」（第二四巻、一〇四頁）。著者が付記した「マタイによる福音書」第二四章三六節は、以下の通りである。「その日その時を知る者なし、天の使たちも知らず子も知らず、ただ父のみ知り給ふ」（『文語訳新約聖書』）。「其日其時」が来るとき、愛する人と再び会い、「我等は四人」となり、死による悲嘆もなく、流れる涙は拭われる、ただその日を「待望生」は平安とともに待つのである。

イエスを思ふて

イエスを思ふて我は
我が貧しきも悲しからず
他人の富めるも羨しからず
イエスを思ふて我は
唯感謝に溢るゝのみ。

イエスを思ふて我は
身の患難も苦しからず
其の幸福も慕はしからず
イエスを思ふて我に
唯平康と満足とのみ有り。

イエスを思ふて我は
事の失敗に失望せず
其の成功に雀躍せず
イエスを思ふて我は
永久の勝利者たるなり。

（『聖書之研究』一四九号、一九一二（大正元）年一二月一〇日、第一九巻、二九二頁）

○一九一二（明治四五・大正元）年は、ルツの死とともに始まり、再会の希望とともに悲嘆の一年であった。「我等は四人である」「『其日其時』」「イエスを思ふて」「今年のクリスマス」の四つの詩は、すべてがルツの死と再臨信仰に関わっている。「イエスを思ふて」は、『聖書之研究』一四九号の巻頭に置かれ、次いで「二種の神学」という、以下のような文章が掲載されている。「頭脳を以て聖書を解釈せんとする時に「新神学」あり、心霊を以て之を実験せんとする時に「旧神学」あり、「新神学」の新なるは其新なるが故に非ず、其変遷窮なきが故なり、「旧神学」の旧なるは其旧なるが故に非ず、其万世不易なるが故なり、思索は易変し、実験は不易なり、余輩は新を追ふて「新神学」に往かざるべし、又旧を諱みて「旧神学」を去らざるべし」（第一九巻、二九三頁）。著者はひたすらイエスを思い、感謝に溢れ、そこには平穏と満足があり、失敗に失望することなく、成功には雀躍しないで、彼は信仰においてイエスとともにある「永久の勝利者」なのである。

今年のクリスマス

クリスマス、クリスマス、
クリスマスは又来りけり、

而も今年のクリスマスは、
去年のそれの如くならず。

クリスマス、クリスマス、
クリスマスは又来りけり、
楽かりし一群の小羊は、
今は別れて二所に在り。

クリスマス、クリスマス、
クリスマスは又来りけり、
我等は此処に之を守り、
彼女は彼所に之を祝ふ。

クリスマス、クリスマス、
クリスマスは又来りけり、
我等に耐え難き悲痛あり、
又言尽されぬ歓喜あり。

（『聖書之研究』一四九号、一九一二（大正元）年一二月一〇日、第一九巻、三一六―三一七頁）

○一九一二（大正元）年、今年のクリスマスは、去年と違い、ルツ不在のクリスマスである。「楽かりし一群の子羊」は別れて「二所」となり、我等には絶え難い悲痛と、いいつくすことのできない歓喜がある。『聖書之研究』一四九号の最後に掲載された詩「今年のクリスマス」（五三―五四頁）の前には、以下のような「ルツ子のクリスマス　明治四十二年十二月廿四日附、鉛筆を以て書かれたる彼女の日記より」が掲載されている。「今日は待ちに待つた私共の一年中に於ける一番嬉しい又一番樂しい日なのであります、今日こそはエス様の御生れになつたクリスマスであります、家でも其祝賀式を行ふのであります、……」（五二頁）。このルツ一五歳のクリスマスは、午後六時三〇分、讃美歌「一二一番花ちり失せては」で開会され、聖書朗読、著者の祈禱、講話が行われたのである（五三頁）。

エスペランザ

一、エスペランザ、希望の野、
墨其西哥の南方に在り、
ソコヌスコの峰高く、
太平洋の水闊し。

二、エスペランザ、希望の野、
護謨樹の汁滴れ、
珈琲豆の芳香鋭く、
玉蜀黍の黄金輝く。

三、エスペランザ、希望の野、
我が教友の集まる所、
我が理想の行はるゝ所、
自由と独立の郷。

四、エスペランザ、希望の野、
新大陸の新日本、
聖書は鋤を助けて、
天は地と接吻す。

（『聖書之研究』一五六号、一九一三（大正二）年七月一〇日、第二〇巻、四七―四八頁）

○『聖書之研究』一五六号の最後の頁に「内村生」の署名で掲載された詩には、次のような前文が付されている。「在墨其西哥国エスクイントラ高田政助氏よりの書面の一節に曰く「最上の土地三百町歩貰ひ受け候……農場の名をEsperanza（希望）と名附け申候、先年先生の『研究』誌が『新希望』と改題になりし時、小生は同志に向ひ、もし未来に於て農場を建る時には『希望農場』と名附けんと申居り候処、幸にも愈々此度其運びに向ひ大に喜び居候」云々と」（第二〇巻、四七頁）。その背景は、全集「解題」によると、以下の通りである。高田政助は、ルツの存命中、内村家に勤めたキヨの夫で、本詩は著者が高田夫妻に贈ったものである。滋賀県の代議士・藤野辰次郎が榎本武揚のメキシコへの入植事業を引き継いだとき、著者の弟子・布施常松とともに高田政助がメキシコに移住して農場を開いたのである。その農場は、自由と独立、天と地が接吻する希望の地である。詩は、『信仰日記』に再録された。

建碑

武蔵野の真中、
女郎花の咲く所、
雑司ヶ谷の森に、
我がルツ子は眠る。

大理石の三塊、
長門秋吉の産、
友人の愛に刻まる、
再た会ふ日までの碑。

日は富士の嶺に入り、
月は欅の枝に懸る、
椋鳥は鳥栖に帰りて、
夕暮の霞低し。

残るは父母と弟、
静かに眠る地下の彼女、
祈る天上の祝福、
望む再会の歓喜。

（『聖書之研究』一六二号、一九一四（大正三）年一月一〇日、第二〇巻、二四五―二四六頁）

○『聖書之研究』一六二号の最後の頁（四八頁）に無署名で掲載された本詩には、次のような前文が付されている。「ルツ子の墓碑成る、友人の寄贈にかゝる、我家不相応の墓石なり、本間俊平君、其所有の石山より最良の大理石を採掘し入費と労力とを惜まず、之に加工せられし者なり、「再た会ふ日まで」の碑と称す、逝きし者の栄光、残りし者の慰藉、多数の友人の同情を記めて、永へに信、愛、望の記念として存すべし、去年十二月十一日、遺族三人其前に於て簡単なる建碑の式を行ふ」（第二〇巻、二四五頁）。その四年後、『聖書之研究』二一〇号には、無署名で著者による「一月十二日」（ルツ召天の日）という、以下のような短文が載っている。「一日は永遠の瞬間である、一人は人類の一滴である（中略）斯日我等の愛する一人の少女は我等を去りて我等の天地は一変した、斯日聖国の門は我等のために開かれた（中略）我等は永遠に一月十二日を忘れない」（第二四巻、三九頁）。後に、この「再た会ふ日までの碑」

をもつ内村家のルツの墓は多磨墓地に移された。

桶職

一、我は唯桶を作る事を知る、
其他の事を知らない、
政治を知らない宗教を知らない、
唯善き桶を作る事を知る。

二、我は我桶を売らんとて外に行かない、
人は我桶を買はんとて我許に来る、
我は人の我に就いて知らんことを求めない
我は唯家にありて強き善き桶を作る。

三、月は満ちて又虧ける、
歳は去りて又来たる、
世は変り行くも我は変らない、
我は家に在りて善き桶を作る。

四、我は政治の故を以て人と争はない、
我宗教を人に強ひんと為ない、
我は唯善き強き桶を作りて、
独り立て甚だ安泰である。

（『聖書之研究』一六五号、一九一四（大正三）年四月一〇日、第二〇巻、三三三―三三四頁）

○『聖書之研究』一六五号の最後の頁（五二頁）に「柏木生」の署名で掲載された本詩には、次のような前文が付されている。「去る二月某日余れ一日の閑を得たれば杖を三浦半島に曳けり、時に相模湾を隔て、富士の美貌を望む辺に、一人の桶職の家に在りて其業に励むを見たり、都会人士の益なき野心に駆られて騒然たるに対し、彼の静粛なる勤勉の欽ぶべくありたれば、彼の心を歌はんとて歩を運びながら左の一篇を口ずさびぬ」（第二〇巻、三三三頁）。また、前年の『聖書之研究』一五九号には、「天職発見の途」という、以下のような短文がある。「己が天職を知らんと欲する者多し、言ふ、我にして若し我天職を知るを得ん乎、我は我が全力を注ぎて之に当らんと。（中略）汝の全力を注ぎて汝が今日従事しつゝある仕事に当るべし、然らば遠からずして汝は汝の天職に到達するを得べし（中略）此外別に天職発見の途あるなし、平々坦々たる途なりと雖も其終点は希望の邑なり、感謝と歓喜との京城なり」（第二〇巻、一〇八頁）。この文章には、著者は「伝道の書」第九章一〇節を引用している。「凡て汝の手に堪ふることは力をつくしてこれを為せ」（『舊新約聖書』）。「天職」発見の途は、「希望の邑」へと通ずる。また、「天職」こそは、この美しい地球に、社会に遺すべき「後世への最大遺物」（Memento）でもある。二〇年前、一八九四（明治二七）年七月一六―一七日、三三歳の著者は、箱根で開催された基督教青年会第六回夏期学校で、「後世への最大遺物」と題した演説を行った。冒頭で、幼児期に父に教わった頼山陽が一三歳のときにつくった漢詩を紹介した。「十有三春秋、逝者已如水、天地無始終、人生有生死、安得類古人、千載列青史」（第四巻、二五一頁）。天地には始終なく、人には生死がある、そんな生涯と社会に、この世に生きた証＝「メメント」を遺して逝きたいという。後世に遺すもの、それは「金」「事業」「思想」も大事だが、最大遺物ではないといい、以下のように語った。「即ち此世の中は是は決して悪魔が支配する世の中にあらずして、神の世の中であると云ふ事を信ずる事である。失望の世の中にあらずして、望みの世の中で

あることを信ずる事である、此世の中は悲みの世の中でなくして、喜びの世の中であるといふことを我々の生涯に実行して其生涯を世の中の贈物として此世を去るといふことであります。其遺物は誰にも出来る遺物ではないかと思ふ」（同、二八一頁、口絵参照）。真面目に生きた一生涯、それこそが後世への最大遺物である、と。三浦半島で出会った、政治も宗教を知らず、ひたすら桶作りの仕事に励む桶職人に、著者は安泰に独り立つ「天職」を見たのである。

秋の夕

秋が来た、
涼しき心地よき秋が来た
嗚呼愛すべき秋よ。

老が来た。
静なる黙示に富める老が来た、
嗚呼楽しき老よ。

此後に冬が来る、
冷たき死と墓とが来る、
然る後に復活の春が来る、
而して最後に永久変らざる、
清き涼しき神のパラダイスの夏が来る、
嗚呼感謝に充る生涯よ。

（『聖書之研究』一九五号、一九一六（大正五）年一〇月一〇日、第二二巻、四二九―四三〇頁）

○『聖書之研究』一九五号の二頁目上段に「曳杖生」の署名で掲載され、下段以降は「希望の生涯」「歓喜の極」「完全なる人生」「信仰と待望」と続いている。「希望の生涯」は、以下のように記されている。「我は後を見ない、前を見る、過去を顧みない、未来を望む」「我は我救主イエスキリストの其処より降り臨るを待つ」（第二二巻、四三一頁）。「信仰と待望」には、次のような文章がある。「世に彼の再臨を促す者は信者の待望である」「ヱホバは地の極までも戦争を廃めしめ弓を折り戈を断ち戦車を火にて焚き給ふ（詩篇四十六）、然り人に非ずヱホバである、彼が臨り給ひてのみ此事は成るのである」（同、四三三頁）。第一次世界大戦下、D・C・ベルから『日曜学校時報』が届いた、その一カ月程後の詩である。秋、老、冬、死、墓のあとには、復活の春が、楽園の夏が来る、さらには再臨のイエスが臨りつつある。「嗚呼感謝に充る生涯よ」。

〔秋は秋として善し〕

秋は秋として善し、冬は冬として善し。春は春として善し、夏は夏として善し。貧は貧として善し、富は富として善し。老は老として善し、若は若として善し。神に依り頼みて如何なる時期も如何なる境遇も善からざるはなし。多分死は生丈け善く、或は生以上に善くあらん。

（「日記」一九二六年一一月三〇日、第三五巻、一二四頁）

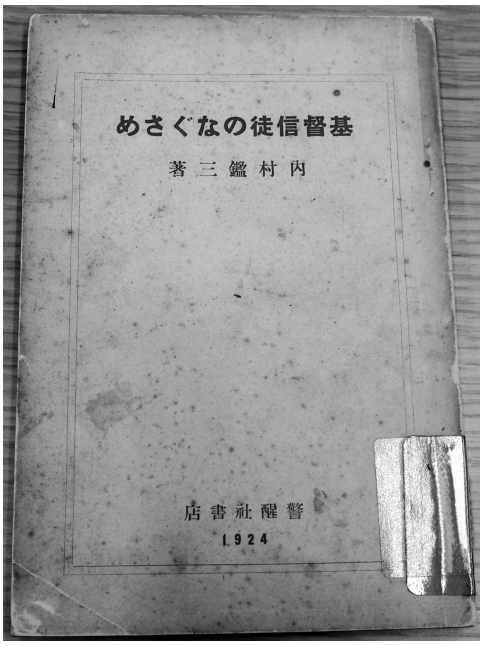
○著者の死の四年前、一九二六（大正一五）年一一月三〇日の日記に記された、題名もなく、詩形式をもたない詩である。「秋の夕」以降一〇年間、詩は発表されていない。この期間は、再臨信仰に希望を託した一〇年間とも重なっている。日記には、詩の前に、日付（火）、天気（晴）のあと、次のように書かれている。「朝起きて霜を庭に見た。柿の葉は落ちて実は小なる提灯の如くに枝に垂る。朝日に対し左の如くに口す

さんだ」（第三五巻、一二四頁）。秋、冬、春、夏、貧、富、老、若、死、神によるあらゆる境遇、物事は、すべて善し――宇宙万物人生悉く可なり。ここに著者による信仰詩の福音的宇宙がある。

二　訳詩・解題

〔如何なれば艱難にをる者に光を賜ひ〕

如何なれば艱難にをる者に光を賜ひ、
心苦む者に生命を賜ひしや、
斯かるものは死を望むなれども来らず、
これをもとむるは蔵れたる宝を掘るよりも甚はだし、
もし墳墓を尋ねて獲ば
大ひに喜び楽しむなり、



『基督信徒の慰』
今井館教友会所蔵資料

其道かくれ神に取籠られをる人に
如何なれば光明を賜ふや、

（『基督信徒の慰』、警醒社書店、一八九三（明治二六）年（以下、出版社、出版年、略）、『内村鑑三全集』第二巻（以下、巻数のみに略）、六一頁。

○内村鑑三（以下、著者に略）が三二歳になる一八九三（明治二六）年に、最初の単行本として刊行された『基督信徒の慰』（二月二五日発行）に収められた詩である。著者は、一八八四（明治一七）年二三歳で、内部に「真空」を抱えてキリスト教大国アメリカに渡り、アマスト大学でシーリー総長の言葉で贖罪の回心を経験し、一八八八（明治二一）年、二つの「J」（Jesus と Japan）のもと、祖国を新しいキリスト教国にする夢を抱いて、異教国・日本に帰国する。だが、宣教師との対立などで、北越学館などのミッションスクールの教師を辞職し、一八九一（明治二四）年一月には、第一高等学校教育勅語奉読式での低頭の仕方が「不敬事件」に発展し、二人目の妻かずは心労のために、結婚生活わずか一年九カ月で死去する。大阪の泰西学館に赴任していた著者は、そんな相次ぐ苦難と困窮する生活のなかで、『基督信徒の慰』を書き下ろした。内容は、「愛するもの、失せし時」「国人に捨てられし時」「基督教会に捨てられし時」「事業に失敗せし時」「貧に迫りし時」「不治の病に罹りし時」の全六章からなり、自伝ではないが、一信徒として生きることの悲嘆が激しく渦巻いている。本詩は、第六章「不治の病に罹りし時」に収

録され、「此快楽世界も病める我に取りては一の用あるなし」（第二巻、六〇頁）と書き、「死は我に取りては最上の賜物なり」（同前）の後に置かれ、詩の後には、次のような文章が続いている。「顧れば過にし年の我の生涯、我の失敗、我之を思へば後悔殆んど堪ゆべからざるものあり」（同、六一頁）。本訳詩には、作者名は記されていない。

『或る詩』（無名氏）

我のこの世につかはされしは、
わが意を世に張るためならで、
神の恵をうけんため、
そのみむねをばとげん為めなり。

なみだの谷や笑の園、
かなしみは来んよろこびと、
よろこび受けんふたつとも、
神のみこゝろならばこそ。

勇者のたけき力をも、
教師のもゆる雄弁も、
われ望まぬにあらねども、
みむねのまゝにあるにはしかじ。

弱き此身はいかにして、
そのつとめをばはつべきや、
われは知らねど神はしる、
神に頼る身は無益ならぬを。

小なるつとめ小ならず、
よを蓋ふとても大ならず、
小はわが意をなすにあり、
大はみむねによるにあり。

わが手を取れよわが神よ、
我行くみちを導けよ、
われの目的は御意をば、
為すが忍ぶにあるならば。

（『基督信徒の慰』、第二巻、六五頁、『愛吟』、第四巻、三四九―三五一頁）

○本訳詩は、第六章「不治の病に罹りし時」のなかに、作者名は記されずに引用されている。詩に続く文章では、汝、病床にあるが故に、この世に存することは無用であるというか、戦争にでない兵卒は、山奥に咲く蘭は、海底に生茂る珊瑚は無用であるというかと問い、六章の最後には、不治の病に怖れることなく、快復の望みとそれに耐える慰めの快楽があるとともに、「生命に勝る宝と希望とを汝の有するあり、又病中の天職あるなり、汝は絶望すべきにあらざるなり」（第二巻、七一頁）と、自らを励ますように記している。著者は、キリスト教思想家として、本書において、この世の悲嘆と受苦に絶望することなく、真の慰めは神とともにあることを一信徒の自分自身に向かって語りかけた。不敬事件で妻かずを失い、日本の国人（民）に捨てられ、教会からも非難を受け、事業にも失敗した、日本の一人のヨブである著者にとって、本書は、どのような現実の悲嘆も希望へとつながっていることを信仰において告げようとしている。それはある春、山上でイエスの語る「幸福なるかな、心

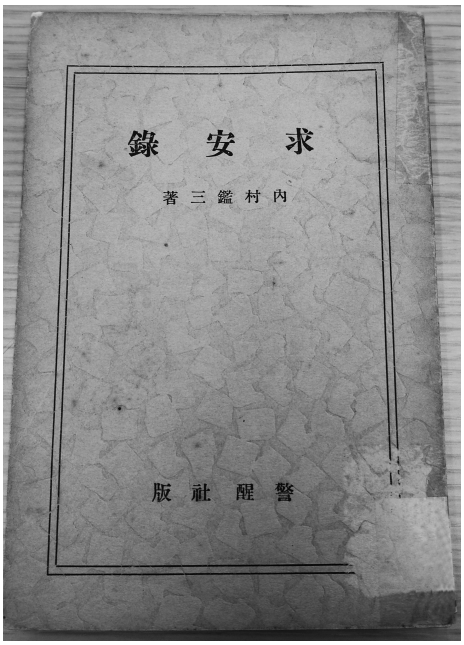
の貧しき者。天国はその人のものなり。……」（「マタイ伝福音書」第五章三節、『文語訳新約聖書』）と通じている。本訳詩は、『愛吟』に収録されるにあたり、「『或る詩』（無名氏）」と題され、一部語句、句読点が改められている。

ラウンフホール公の夢（ラッセル、ローエル）

見よ、われなるぞ懼るゝな、
聖き盃求めんと
諸国を巡るも益ぞなし、
見よ、さかづきはそこにあり
小川にくみし手杓あり、
さきて与へし其パンは
さかれし我の躰なり、
その冷水は十字架の
上より流れし我血なり、
貧き人とともにする
食こそ実にや聖餐なり。

（『求安録』、警醒社書店、一八九三（明治二六）年（以下、出版社、出版年、略）、第二巻一五九―一六〇頁、『伝道之精神』、第二巻、三二九―三三〇頁）

○『求安録』は、一八九三（明治二六）年八月に刊行された。著者は、『基督信徒の慰』刊行後の四月下旬、泰西学館を辞めて熊本英学校に七月一日まで赴任し、八月に熊本市郊外の託摩ヶ原の槙樹の下で、古い鞄を台にして二冊目の宗教書である本書を書き上げた。本書は、上下二部からなり、「安」を「求」める信仰告白の書である。冒頭「自序に代ふ」には、「口あひて腸みせる柘榴かな。」（第二巻、一三五頁）という芭蕉の句が引用されている。本書は、『基督信徒の慰』『伝道之精神』（警醒社書店、一八九四年）とともに、初期の信仰著作である（「如何なれば艱難にをる者に光を賜ひ」「『或る詩』（無名氏）」等の解題、参照）。本訳詩は、『求安録』の上の部「脱罪術　其四　慈善事業」のなかで引用されている。著者は、次のように記している（同、一五八―一五九頁）。中古時代の君主「ラウンフホール公」は、最後の晩餐で用いられた「金の盃」を探しに城門をでると、そこに「癩病を患るもの」（ハンセン病患者）が来て施しを乞う。だが、彼は先を急ぎ、怒り、懐中より金貨一個を地上に投じる。欧州諸国を巡り、やがて老い、貧困が迫り、目的を果せないまま再び城門に帰ると、その貧者・患者がそこにいる。ラウンフホール公には、彼に与える金銀がなく、一個のパンの半分と、腰の手杓で小川の冷水を汲み与える。すると、「乞食の患者」は、「栄光ある基督」となり、ラウンフホール公に祝福を与える。著者は、「読でこゝに至て余は歓喜を以て充たされたり」（同、一六〇頁）と述べている。『伝道之精



『求安録』
今井館教友会所蔵資料

神』の「其六　人の為にする伝道」のなかにも、ラウンフホール公の紹介とともに、同じ詩が収めれている。訳詩は「ラウンフホール公の夢」（Sir Launfal's Dream、「ラウンフウル公の夢」、参照）で、作者はアメリカの詩人 James Russell Lowell（一八一九―一八九一年）。原詩は、以下の通りである。「Lo, it is I, be not afraid/In many climes without avail/Thou hast spent thy life for the Holy Grail; /Behold, it is here—this cup which thou/Didst fill at the streamlet for me but now; /This crust is my body broken for thee,/This water His blood that died on the tree; /The Holy Supper is kept, indeed,/In whatso we share with another's need.」（同、一五九頁）。『伝道之精神』に再掲するにあたって、本訳詩のあとに「著者申す」として、以下のように記している。「余は此佳話を前著求安録に掲げ以て慈善事業が余の衷心の渇望を充たす能はざるを叙述せり、是余の実撿の有のまゝを記せしなれども読者或は之に依て此美談の真味を失ふを怖る、「ラウンフホール公の夢」なる韻文の作者ラツセル、ローエル氏が之をものせし原意は全く余の今此に論ずる人性的宗教を奨励せんが為にせしなり、然るに之を以て儀式外形的慈善を以て足れりと教へし如きに解せしは全く著者の誤解に基きしものなり（中略）依て今再び之を爰に引用し、以て其真意味を世に紹介し、並せて著者の思慮の浅かりしを表白す」（同、三三〇頁）。

〔羽翼あらば何処に飛ばんわが魂よ〕（ヘンリー、バートン）

羽翼あらば何処に飛ばむわが魂よ、
事業へ乎、心よりせぬ事業へ乎。
永久のあらしはこゝに吹かぬかや、
事業には、死せるうはべの事業には。
恐るべき声もて事業答へける、
こゝになし、まどへる魂よこゝを去れ。

（『求安録』、第二巻、一六四頁）

○『求安録』の上の部「脱罪術　其四　慈善事業」のなかで、「ラウンフホール公の夢」のあとに、慈善事業についてふれた部分で引用されている。一八八五（明治一八）年、著者はエルウィンのペンシルヴァニア知的障がい児養護院で、博愛主義者のI・N・カーリン院長と出会い、そこの看護人となる。一八八五年一月一日から七月二七日までの知的障がい児の看護人の体験は、『流竄録』（『国民之友』二三三―二五一号、一八九四（明治二七）年八月二三日―一八九五（明治二八）年四月二三日）に記されている。『求安録』には、「信仰不相応の慈善程危険なるものはあらざるなり」（第二巻、一六二頁）、「余は安心術として慈善事業の無益なるを悟れり、否な無功なるのみならず余は一層余の欠点を摘示せられ、尚一層の懼怖を抱き、前日に勝りて心霊未来の危険を感ずるに至れり」（同、一六三―一六四頁）と述べ、続けて本詩が収められている。原詩は、「O THAT I HAD WINGS LIKE A DOVE!」の一節で、以下の通りである。「Where wouldst thou fly? To works—to empty forms/With thy dove wings?/Will these give shelter from eternal storms—/These poor dead things?/And "working" answers with a voice severe,/"Turn back, mistaken soul! Rest is not here!" (Henry Burton, in Sunday Magazine (London, ISBISTER AND COMPANY)」（同、一六四頁、「The Sunday Magazine」のあとに「?」が、「dove wings」は「dove-wings」と表記されている）。作者は、イギリスの讃美歌詩人 Henry Burton（一八四〇―一九三〇年）。

〔噫聖霊よ、爾は諸ての宮殿に勝り〕（ミルトン）

〔噫〕聖霊よ、〔爾〕は諸ての宮殿に勝り
浄くして正しき心を受納し賜ふ、
真理は爾に存す、願くは我を教へよ、
……
我の暗きを輝し、我の低きを高め、
此問題の広遠なるに憶せず、
我をして永久の摂理を講じ、
天道の是なることを弁ぜしめよ。

（『求安録』、第二巻、一八六頁）

○『求安録』の下の部「罪の原理」に、リバイバル、学問、慈善事業、伝道など、「世の称する忘罪術は一として功力を有するものなし」（第二巻、一八五頁）、「我に世の充す能はざるの慾あり、人のみは満足し能はざる動物なるか」（同前）と述べ、本訳詩を収めている。原詩は、以下の通りである。「"O Spirit, that dost prefer/Before all temples the upright heart and pure,/Instruct me, for thou know'st; ……/……what in me is dark/Illumine; what is low, raise and support;/That to the height of this great argument/I may assert eternal Providence,/And justify the ways of God to men."—Milton.」（同、一八五―一八六頁）。作者は、イギリスの詩人 John Milton（一六〇八―一六七四年）。

〔月日と星の巧造に〕（『ファースト』）（ゲーテ）

月日と星の巧造に
たゞはかなさは人の子が
よろづの物の頭なる
今も昔も変りなき
天の光が彼の身に
彼の命は今よりも
道理と称へて道理をば
獣に劣る獣まで
神の許可にて我は謂ふ
草叢に棲むばつた虫
飛んで跳たりはねてとび
心静かに草叢の
糞の塊ある毎に
我の批難すべきはなし
己と己が身を攻むる
人こそもとのすがたにて
驚き入たる奇物なり
宿りし事のなかりせば
堪へ易かりしものならめ
己を責むる器具となし
下落するこそ憐れなれ
人てふものは夏の日に
長き後ろのすね足に
古きあだ言くりかへす
中に落付き居りかねて
その鼻端を突入れる

（『求安録』、第二巻、一九四頁）

○『求安録』の下の部「罪の原理」のなかで、著者は「罪とは何ぞや」（第二巻、一八六頁）、「善」とはと問い、「善とは神なり」（同、一八九頁）と答え、神に帰する人が「善人」にして、「罪より免かるゝの法只此一途あるのみ」（同前）と述べている。次いで、「創世記」の人類の堕罪について言及する。また、宗教界の「柔弱社会」と権力については、「教会は天国に最も近くして最も遠き処なり、悪鬼已に聖殿を奪へり、人生の荒漠実に察すべきなり」（同、一九四頁）、「如此にして人は人の敵となり、己は己の敵となり、不平不満やるかたなく、此完備せる宇宙に生れながら人類程憐れむべき動物はなきに至れり。／詩人ゲーテのメフィストー（悪魔）が神に訴へし語に曰く」（同前）として、魂の遍歴を描くゲーテの長篇劇詩『ファースト』（第一部一八〇六年完成、一八〇八年刊、第二部一八三一年完成、死後刊、桑原武夫編『西洋文学』第二版、岩

波書店、一九六七年）の「メフィストーフェレス」の言葉を引用している。『ファースト』は、渡米中にアマスト大学で読了した（亀井俊介『内村鑑三』、一三四―一三五頁）。「罪の原理」は、以下のように結ばれている。「嗚呼若し人心無声の叫号を集合し得る細音器（Microphone）ありて吾人をして其声を聞くを得せしめれば悲哀の声は天を裂き地を動かすもなほ足らざらん、嗚呼我を救ふものあらざるか、……」（同、一九六―一九七頁）。作者は、ドイツの詩人・作家Johann Wolfgang von Goethe（一七四九―一八三二年）。

〔我もはや懼れず〕（Whittier）

我もはや懼れず
曇りし自然の面かげも
今は笑を含みけり、
限りあるもの、朽ちるもの、
感じ得るものすべて皆、
触る聖霊の羽音して
希望の讃美唱へける。

（『求安録』、第二巻、二二五頁、第一一巻、四五九頁）

○『求安録』の下の部「楽園の回復　Paradise Regainned.」のなかで、「以賽亜」「約翰伝」「使徒行伝」「詩篇」などを引用したあと、「愛の泉源は神なり、我神に接して後、愛我を充たし而后又我より流れ出るなり」（第二巻、二二三頁）と記している。次いで、「われ神と和合してより我に平和を与へ得ざりし学問も今は再び無限の快楽と慰藉とを我に給するに至れり、宇宙は真に壮厳なる大美術となりたり」（同、二二四頁）のあと、ホイッティアの詩を引用し、こう続けている。「歴史は大戯曲として味ふべく、地球は大花園として眺むべし、……」（同、二二五頁）。著者は、『月曜講演』（警醒社書店、一八九八年）の「第三章　米国詩人」のなかで、Whittierについて、次のように述べている。「ホイッチエルは信仰厚きクエカア派の信者なりき。同派の主義として極力戦争を排斥し平和を担保せんと欲するものあり」（第五巻、三六四頁）。また、本訳詩は「来世は有耶無耶」（『聖書之研究』四五号、一九〇三（明治三六）年一〇日一五日）の「其五　生涯の実験より生ずる来世の希望」に再録された。そこでは「ヨハネの黙示録」第二一章の「神、彼等の目の涕を悉く拭ひとり、復た死あらず、哀み痛み有ることなし、蓋前事すでに過去ればなり（第四節）」を掲げたあと、「来世の希望が私に供せられた時に私は始めて気息を吐いたのであります（中略）其時に私は詩人ホキッチヤーの句を借りて謡ひました」（第一一巻、四五八―四五九頁）と述べ引用している。著者は、「来世は有耶無耶」の最後の部分に、以下のように記した。「私より来世の希望を奪ふ者は私の生命を奪ふ者であります、是れなくして人生は私には無味のものとなります。私の「存在理由」は確かに「来世の存在」に在ります」（同、四五九頁）。原詩は、以下の通りである。「I fear no more. The clouded face/Of Nature smiles; through all her things/Of time and space and sense I trace/The moving of the Spirit's wings,/And hear the song of hope he sings.―Whittier」（同、二二五頁）。作者は、アメリカのクェーカー教徒の詩人John Greenleaf Whittier（一八〇七―一八九二年）。

〔然らば我は何なるか〕

然らば我は何なるか、
夜暗くして泣く赤児、
光ほしさに泣く赤児、

泣くよりほかに言語なし。

（『求安録』、第二巻、二四九頁）

○『求安録』は、上の部の「悲嘆」から下の部の「最終問題」まで、本書全体が罪との格闘の告白である。全体の結びである「最終問題」は、「余は平安を得る途を知れり」「余は全く余を救ふ力なきものなるを悟れり」「力なき我、わが能ふことは祈ることのみ」（第二巻、二四九頁）と記し、本訳詩で結んでいる。「光」を求めて「泣く赤児」とは著者自身であり、その泣き声は、神へと届く祈りの「言語」となる。そこに「基督信徒の慰」がある。原詩は、以下の通りである。「"But what am I?/ An infant crying in the night: An infant crying for the light: And no language but a cry."」（同、二四九頁）。本訳詩には、作者名、題名は記されていない。

充たされし希望（ホウヰチャル）

学校帰りのふたりの女子、
たがひの目的問ひ合せしに、
彼女は云へり、妾は女王となりて治めん、
是女は云へり、妾は広く世界を見んと。

年経て後に復た会ひし時、
たがひの位置を問ひ合せしに、
彼女は云へり、妾は実に女王となれり、
貧しき人の妻にはあれど、

楽しき家族は妾の民なり、
実なる夫は妾の王なり、
愛の勤は妾の律なり、
そなたは如何に成行きにしや。

是女は云へり、広き世界は昔も今も
未だ見ぬ国となりてのこりぬ、
愛と義務との境を越えて、
妾の足は出しことなし。

広き世界のその音信に
妾は耳を傾けもせず、
妾の母の病の寝間は
妾の世界にあるぞかし。

両人互に手を取り合せ、
喜び涙にむせびて泣けり、
神は幼時の願を聞けり、
我等の望み充たされたりと。

（『貞操美談路得記』、福音社、一八九三（明治二六）年、第二巻、二九八―二九九頁、『愛吟』、第四巻、三四六―三四七頁）

○『貞操美談路得記』は、旧約聖書「ルツ記」の著者による最初の注解書である。自序には、「明治二十六年十月　京都に於て」と記され、「此書脱稿は本年七月下旬にありたり」（第二巻、二五八頁）と付されている。この年は、四月に泰西学館を辞め、熊本英学校に赴任し、八月に『求安録』を刊行し、一一月には『How I Became a Christian』を脱稿している。本文は、「緒言」「第一段」から「第七段」「末段」まで、全八段で

構成された「ルツ記」注解である。表紙には、「一名媳と姑の福音」と副題が付されている。「ルツ記」は、モアブの女ルツ（媳）とベツレヘムの女ナオミ（姑）を主人公にした、ユダヤの地の労働や情愛を描いた美しい詩的田園物語である。著者は、刊行後三カ月後に誕生する一人娘を「ルツ」と名づけるのである。この注解書の「末段」に、本詩が「極美なる一編」（第二巻、二九八頁）として引用され、次のように記されている。「基督教が家族制度を改良するは其奴隷制度を廃止せしと同一なる方法に因らざるべからず、……」（同、三〇一頁）。本訳詩は、麦の詩の物語「ルツ記」とも、奴隷制廃止を提唱した作者John Greenleaf Whittierの信仰詩の世界とも通じている。第七段「喜楽の回復　感謝の寡婦」には、次のように記されている。「小婦ルツ、ナオミの伝記は各人の伝記にして亦国民の歴史なり、宇宙の大法なり、汝暗夜に独り涙に沈むものよ、汝の救は遠からざるなり」（同、二九一頁）。原題は、「GRANTED WISHES.」（第四巻、三七八頁）。

〔冬已に老ひて力尽き〕（ゲーテ）

冬已に老ひて力尽き、　山里指して逃げ去れり、
只をり〳〵にいと脆き、　其射る雹の後ろ矢に、
青き野原は白みけり、

（『国民之友』二六五―二六六号、一八九五（明治二八）年一〇月一二、一九日、「如何にして大文学を得ん乎」、第三巻、一九二頁）

○『国民之友』に掲載された著者の代表的文学論である、「大文学は出ざる乎、大文学は出ざる乎……」から始まる「何故に大文学は出ざる乎」と、詩人は「愛の書記たるなり」（第三巻、一八六頁）と記す「如何にして大文学を得ん乎」の「自然の観察」のなかに引用されている。「ゲーテが非凡の解剖学者にしてダーウヰンに先つ五十年已に進化論の枢点に達せし事は人の能く知る処なり、然れども彼の特技は気界の現象を叙するにありしが如し」と述べ、本訳詩が収められている。原詩は、以下の通りである。「Der alte Winter in seiner Schwäche/Zog sich in rauhe Berge zurück/Von dorther sendet er, fliehend, nur/Ohnmächtige Schauer körnigen Eises/In Streifen über die grünende Flur.」（第三巻、一九二頁）。作者は、Johann Wolfgang von Goethe（前掲詩、参照）。

〔意を留めよ〕（オルヅオス）

意を留めよ爾の心の耳朶に、反響此の如きもの、触る、時、静聴熟思して心に収めよ、是れ神の声――神の声なればなり、

（『国民之友』、同前、「如何にして大文学を得ん乎」、第三巻、一九三頁）

○本訳詩は、「如何にして大文学を得ん乎」のなかで、ゲーテの「〔冬已に老ひて力尽き〕」に次いで、「自然の専門詩人」（第三巻、一九二頁）として「キリヤム、オルヅオス」を挙げ、彼によって「自然は新註解を得たり」（同前）と述べ、次のように記している。「人は神に像りて造られ自然は神の可覚的自現（Self-revelaton of God）なり」（同、一九三頁）。原詩は、以下の通りである。「Often as thy inward ear/Catches such rebounds, beware—/Listen, ponder, hold them dear;/For of God—of God they are.」（同前）。著者にとって、「自然」とは神の顕われなのである。作者は、湖水地方で生れたイギリスのロマン主義を代表する「湖水詩人」William Wordsworth（一七七〇―一八五〇年）。

〔罪に枯死する我等と雖も〕（オルヅオス）

罪に枯死する我等と雖(いえど)も、亦た道に憑(よ)る人の子なり、苦寒堅氷の冬より呼ばれ、起て陽和の正気に沐し、清爽限りなき夏に、古稀の憂慮を没せざらんや、

（『国民之友』、同前、「如何にして大文学を得ん乎」、第三巻、一九四頁）

○「如何にして大文学を得ん乎」の「〔意を留めよ〕」の次に、「春寒漸く去るの候、路傍に蓮馨花の咲けるを見て左の壮句あり」（第三巻、一九三頁）に続けて、本詩を引用している。引用後、次のように述べている。「一茎の野草、七十の老詩人に此冀望の讃美歌を供す」「詩人オルヅオス出(いで)て自然は霊化されしの感あり」（同、一九四頁）。「如何にして大文学を得ん乎」の「自然の観察」は、こう結ばれている。「未来の大文学は敬虔を以てする自然の密察より来る」（同、一九七頁）。原詩は、以下の通りである。「Sin-blighted though we are, we too,/The reasoning Sons of Men,/From our oblivious winter called/Shall rise, and breathe again,/And in eternal summer lose/Our threescore years and ten.」（同、一九三―一九四頁）。作者は、William Wordsworth（前掲詩、参照）。

〔我は世界の持主なり〕（エマルソン）

我は世界の持主なり、
森羅万象我物なり、
シーザの手腕プラトの脳、
イエスの心も沙翁の技も

（「史学の研究」、一八九五―一八九六（明治二八―二九）年〔推定〕、『小憤慨録上』、少年園営業部、一八九八年、第三巻、二七六頁）

○『小憤慨録上』は、一八八九年七月より一八九八年一〇月までに、新聞・雑誌に発表された論文、談話等が「教育」「宗教」「文学」「慈善」に分けて収められている。「文学」篇には、「文学局概観」「米国詩人」（『月曜講演』（警醒社書店、一八九八年）の第三章）「史学の研究」「伝記学の研究」「西洋文明の心髄」などが掲載されている。本詩は、「我は過去の結果にして未来の源因なり」（第三巻、二七五頁、以下同じ）からはじまる「史学の研究」に引用されている。著者は、「我」は日本二〇〇〇年間の「作」にして「東洋一孤島」の国民であることに安んじず、世界の市民になることで「広闊雑駁なる我」になるといい、こう続ける。ユダヤ人には「神」、ギリシャ人には「思惟」、ローマ人には「律」、ドイツ人には信仰の「独立」、イギリス人には「憲法」、フランス人には「文化」等、「世界偉人の協同に由りて成りし日本、之を知るに全世界の歴史的智識を要す」（同、二七五―二七六頁）。次いで、「哲人エマルソンの言実に然り」と記し、アメリカの詩人・哲学者で、カーライルとも親交のあったエマソンの言葉を引用している。著者は、『日曜講演』第一章「カーライルを学ぶの利と害」のなかで、カーライルに学ぶ第一の材料は、「著述」で、次は「書翰」、なかでもエマソンとの往復書簡であると述べている（第五巻、三二七頁）。原題は「The Informing Spirit」で、引用部分は、以下の通りである。「"I am owner of the sphere,/Of the seven stars and the solar year,/Of Caesar's hand and Plato's brain,/Of Lord Christ's heart and Shakespeare's strain."」（第三巻、二七六頁）。作者は、Ralph Waldo Emerson（一八〇三―一八八二年）。

航海中（ヱラ、フィルコックス夫人作）

風は何れの方より吹くも
かく吹かましと待つ人あれば
　東よりするも西よりするも
　吹く其風を善と定めん

波路を行くは我のみならず
海原遠く漕ぎ出る
津々浦々の百千舟
我に追風吹く時は
逆波高く捲り来て
磯根に触るゝ舟もあらん
然らば我舟行らんとて
我に方向好き風を祈らじ
行るも行らぬもいと高き
神の指図に任しつゝ
浪立つ時も凪ぐ時も
何かなる風の吹く時も
心安くぞ我が舟の
梶をば彼の手に委ね
危き波路過ぎ越して
我が行く先に着くぞ嬉しき

さらば何かなる風吹くも
かく吹かましと待つ人あれば
　東よりるも西よりするも
　吹く其風を善と定めん

（『日本人』四一号、一八九七（明治三〇）年四月二〇日、第四巻、一一九―一二〇頁、『愛吟』、三三六―三三七頁）

○本訳詩は、評論雑誌『日本人』（一八八八年四月―一九二三年九月、政教社）の四一号に発表され、原題「EN VOYAGE」（原詩、第四巻、三七五―三七六頁）が付され、著者の訳詩集『愛吟』に収められている。この年の二月一六日には、黒岩周六（涙香）に英文欄主筆で招かれた『万朝報』（朝報社）に執筆を開始し、一九〇三（明治三六）年には、「戦争廃止論」（六月三〇日）を発表し、一〇月には同誌が日露戦争主戦論に転じたために幸徳秋水、堺利彦らとともに退社する。本訳詩の最後には、「訳者註」として、以下のような文章が付されている。「曰く保守風、曰く欧化風、保守風吹きしが故に和学者は財産を作り、神主は顕位に登れり、よし之が為に洋学者は饑餓に泣き、基督信徒は迫害せられしも、幾多の守旧家は幸運を賀し佳節を祝したり、皇天素是れ同仁、豈是に厚くして彼に薄きの理あらんや、吹けよ保守風、帆を挙げよ、神主と和学者と摂理が汝を許す間は汝が栄ふべきの時なり」（同、一二〇―一二一頁）。作者は、アメリカの詩人 Ella Wheeler Wilcox（一八五〇―一九一九年）。

戦士の祈禱（バウル、ダンバー）

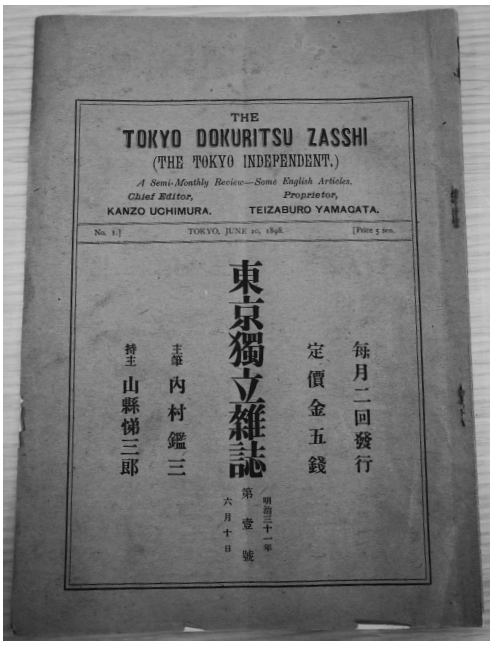
過る頃我れ或る人の祈るを聞けり。
『全能にして当るべからざる神よ、
願くは我をして争闘を避けしめ、
爾、我の為に戦ひ給へ』と。

我は自身偽善者なるやも知らず、

又斯く祈りし人の反て義人なるやも知らず、
然れども我の祈禱は戦士の祈禱なり、
願くは戦ふの勇気を我に与へよと。

我は爾が我が為めに途を開き
我が前より強勁の敵を排ひ給へと願はず。
我は只、ア、神よ、夜となく昼となく
戦ふの勇気を我に給へと祈る。

敵人我に逼る時に我をして惧れ慄くなく
又怯者の敗を取らざらしめよ。
我は只願ふ、我が剣の鈍らざるがため
戦ふの勇気を我に給へと。


THE
TOKYO DOKURITSU ZASSHI
(THE TOKYO INDEPENDENT.)
A Semi-Monthly Review—Some English Articles.
Chief Editor, KANZO UCHIMURA. Proprietor, TEIZABURO YAMAGATA.
No. 1.] TOKYO, JUNE 10, 1898. [Price 5 sen.
東京獨立雜誌
明治三十一年 第壹號 六月十日
毎月二回發行
定價金五錢
主筆 内村鑑三
持主 山縣悌三郎

『東京独立雑誌』創刊号（1898年6月）
今井館教友会所蔵資料

我をして常に我が背を敵に示さゞらしめ
我が鎧を磨きて常に堅甲に我が身を固めしめよ、
我は願ふ、神よ、我れ正義の打撃を加ふる為に
戦ふの勇気を我に給へと。

而して日暮れて、戦闘終る時に
死の寝室に我を導き給ひて、
勝敗孰れに決するも只我に給ふに
戦後永久の休息を以てせよ。

（『東京独立雑誌』一一号、一八九八（明治三一）年一〇月二五日、第六巻、一七一―一七三頁）

○本訳詩は、『東京独立雑誌』一一号「記者之領分」に、「決心」他とともに掲載された「秋夜雑感」の次に掲載された。『東京独立雑誌』（一八九八（明治三一）年六月―一九〇〇（明治三三）年七月、一―七二号）は、主筆・内村鑑三、持主山県悌三郎（一八九九年一月から内村鑑三が主筆兼持主）であった。「秋夜雑感」は、以下のように終わっている。「ビスマークの独逸と、伊藤侯、樺山伯、高島子の日本、国威の発揚と自民の畏縮、軍人の栄華と文学者の饑餓、日本国は世界の表面に大にして日本人は心の中に益々小なり」（第六巻、一七一頁）。その後、縦の罫が引かれ本訳詩が掲載されている。作者は、アメリカの詩人Paul Laurence Dunbar（一八七二―一九〇六年）。

〔土塀の上に生ふ花よ〕（テニソン）

土塀の上に生ふ花よ
我は汝を手に摘み取れり。

微き花よ、根こそぎに
我は汝を我手に持てり。
根も枝も葉も皆な諸共に
我若し汝を解し得ば、
我は解せん、神をも、人も。

（「〔外国語の研究〕」『東京独立雑誌』一九―二八号、一八九九（明治三二）年一月一五日―四月一五日、第六巻、三四八―三四九頁）

○「〔外国語の研究〕」は、『東京独立雑誌』に八回にわたって連載され、『外国語の研究』（東京独立雑誌社、一八九九年）として出版された、「外国語研究の利益」から「西班牙語の研究」まで、全九章からなる外国語に関する研究である。本詩は、「外国語研究の方法」の「六、毎日少なくも愛篇の一句を諳んぜよ」の後に、「若し春陽の来復と共に天然の壮美に打たれん乎、テニソンの左の一句は詩的、吾人に無尽の富を供するものならん」に続けて引用されている。原詩は、以下の通りである。「Flower in the crannied wall,/I pluck you out of the cranny,/Hold you here in my hand,/Little flower, root and all,/And if I could understand/What you are, root and all, and all in all,/I should know what God and man is.」。作者は、イギリスヴィクトリア時代を代表する詩人 Alfred Lord Tennyson（一八〇九―一八九二年）。

水仙花（ヨルヅヨス）

谷と小山の上に高く懸る
浮雲の如くに独り遙（ママ）ひし時
意（おも）はずも余は花の一群を見たり
黄金色の水仙花に遭（あ）へり

湖水の辺りに樹木の下に
風に吹かれて踊りつゝある
天の川原に燦（きらめ）く星の
熒々（けいけい）として相聯なる如く
彼等は湾の緑に沿ふて
果てしなく水の端に伸びぬ
余は一目に一千を算へぬ
頭（かむ）振りつゝ、踊れる花を、

小波も亦彼等と共に踊れり
然し彼等は波に劣らざりき
斯くも楽しき朋友（とも）と在りて
詩人は楽しからざるを得ず、
余は眺めたり、凝視（みつ）めたり、然し
余の得し富を知らざりき

以後幾回となく詩思に沈み
独り榻（せいつぎ）に横はりし時
彼等は余の心に映りて
単独の時の慰藉とはなりぬ
其時余の心は歓喜を以て溢れ
水仙花と共に踊りぬ

（『東京独立雑誌』三七―三九号、一八九九（明治三二）年七月一五、二五日、八月五日、第七巻、一九二―一九四頁）

○『東京独立雑誌』の「講壇」に三回連載された「如何にして夏を過さん

乎」に引用されたワーズワースの詩である。著者は、このなかで「地理学」「地質学」「星学」「礦物学」「植物学」「動物学」「昆虫学」などの研究を紹介し、「純粋の天然詩人」としてイギリスの「ヲルヅヲス」とアメリカの「トロー」を挙げている。ワーズワースの詩を楽しむには、その小品が適していると述べ、「Daffodils（水仙花）」を引用している。天然のなかの「水仙花」は、詩人には信仰の溢れる「歓喜」を映している。著者は、「ウォルヅヲスの詩に就て」（『聖書之研究』一七六号、一九一五（大正四）年三月一〇日）のなかで、「天然詩人」ワーズワースの「天然」について、ダーウィン、ヘッケルと較べて、以下のように述べている。

「謙遜である、従順である、歓喜である、満足である、希望である、永生であると」（第二一巻、二四五頁）。作者は、William Wordsworth（〔意を留めよ〕）、〔罪に枯死する我等と雖も〕）、参照）。

物の前後（ホレーシヤス、ボナー）

真なる事は先にして美なる事は後なり
　美なる事が先にして真なる事が後なるに非ず
先づ有の儘の森と岩と沢とありて
　然る後に香はしき美はしき園はあるなり。

善なる事は先にして美なる事は後なり
　美なる事は先にして善なる事は後なるに非ず
先づ荒き野に固き種を下して
　然る後に花は開き枝は茂るなり。

喜ばしき事は先にして悲しき事は後なるに非ず
　悲しきことは先にして喜ばしき事は後に来るなり
一度びは涙に咽びて（そは泣かざる者とては世になければ）
　然る後に憂を忘れて踊り喜ぶなり。

光は先にして暗は後に来るべきものにあらず
　先づ暗黒を経過して然る後に光明は臨むなり
先づ黒雲天を掩ふて然る後に霓顕はる
　先づ一度び墓に降りて然る後に天に昇るなり。

（『東京独立雑誌』四〇号、一八九九（明治三二）年八月一五日、第七巻、二四一―二四二頁）

○一八九九（明治三二）年には、本訳詩が掲載された『東京独立雑誌』（二七―五三号）に、「カーライルの婦人観」「英和時事問答」をはじめ、数多くの時事、信仰に関する文章を執筆している。五三号の「記者之領分」には、「詩人の事業」と題した、以下のような短文を発表している。

「詩人幽居して詩を作る、時人彼を評して曰ふ、「彼れ無為の人世に用なきの事をなす」と、然るに時至りて彼の思想の事実となりて顕はるるや、剣戟是が為めに動き、山岳是が為に震ひ、社会は其根柢より改造せられて民に蘇生の感あり、時人亦彼を評して曰ふ、「偉大なる哉詩人、彼の作は実に革命の声なりし」と」（第七巻、一四一頁）。作者は、スコットランドの長老派の牧師で讃美歌の作者として知られるHoratius Bonar（一八〇八―一八八九年）。真は先にして美は後、森、岩、沢があって「美はしき園」が、涙あって歓喜が、墓に下って天に昇る――「物の前後」（The Divine Order）は、神による聖なる順序であり、それは著者の信仰でもある。

誠信なる主

“Not seldom, clad in radiant vest.”（詩人ヲルヅヲス作）

一

錦繡に纏はれて昇りし朝日は
　却て其日の雨を釀し
晴れ渡りし夕の空は
　続く日和の兆候にあらず。

二

最と滑かなる海も時には
　之に頼るの小舟を欺き
若し上天の星を頼まば
　彼等も亦不実なることあり。

三

枝広々と伸べし立木も
　電光蒼穹を劈く時は
其木影に身を寄せし者を
　天火の難より護る能はず。

四

然れど爾は誠信なり、肉に宿りし主よ
　謙遜りて人の為に死せし者よ
爾の微笑に譎詐なし、爾の約束は
　世は変るとも変ることなし。

五

我は宝座の前に平伏し
　単に爾の平康を乞へり
而かして平康のみにあらで
　上向く確信は与へられぬ。

（『聖書之研究』二七号、一九〇二（明治三五）年一一月一〇日、第一〇巻、三四一―三四三頁）

○本訳詩は、『聖書之研究』二七号の「清想」欄に掲載され、『信仰日記――附歌こゝろ』（岩波書店、一九一九年）に原詩「The Faithful Lord」とともに再録された。山本泰次郎『内村鑑三――信仰・生涯・友情』（東海大学出版会、一九六六年）によると、著者はアメリカの信仰の友人D・C・ベル宛一九〇一（明治三四）年一一月八日付書簡に、次のように記している。「主のいましたもうことの何と真にして、主の約束の何と確かなる事よ。ワーズワースの「朝日は輝く衣きて、欺き昇ることあれど」なる句をもって始まる詩をご承知ですか。これは私の特愛の詩です」（四三五頁）。ワーズワースのこの部分は、著者は「錦繡に纏はれて昇りし朝日は」と詩的に訳している。作者は、William Wordsworth（前掲詩、参照）。

短命（ベン、ジョンソン）

木の嵩を増すが如く
伸びて必ず好き人ならず
檀は三百年を経て
枯れて仆れて丸太たるのみ

其日限りの百合の花は
　五月の園にはるか麗はし
たとへ其夜仆ふれても死すも
光輝の草と花とにありき
美は精細の器に現はれ
生は短期の命に全し

（『聖書之研究』三七号、一九〇三（明治三六）年四月九日、第一一巻、二〇六―二〇七頁、『愛吟』、第四巻、三二九―三三〇頁）

○本訳詩は、『聖書之研究』三七号の「家庭」欄に掲載された、「人は誰も花を好む、花を好まない者は人にして人でない、花は天然の言辞である」（第一一巻、二〇四頁、以下同じ）から始まる「余の好む花」に引用され、『愛吟』に収録された。著者は、このなかで花は無言の言葉で、「沈黙の言語」であり、「余も花を愛する」と書いている。著者の好む花は、梅、桜、菫菜、薔薇、菊などではなく、一つは春遅くに咲く「をだまき（耧斗菜）」であるといい、「ベン、ジョンソンの歌ひし「短命」の歌は実に彼女に当箝るものではあるまいか」（同、二〇六頁）と述べ、本訳詩を引用している。「余の好む花」は、「春の部」（「秋の部」では「紫竜胆」、「紫竜胆に贈る（ブライアント）」、参照）として『歓喜と希望』に再録された。『愛吟』では、以下のような註が付されている。「楠正行の生涯、木村重成の生涯、詩人キルク、ホワイトの生涯、美術家ラフイエルの生涯、是皆短くして美なる生涯なりき、齢耳順に垂とし、位人臣を極め、尚も美勲偉功の人世に供するなく、錦繡に纏はれながら終に丸太となりて朽果つ、悲しむべく憐れむべき生涯ならずや」（第四巻、三三〇頁）。原題は、「A SHORT LIFE.」で、作者は、イギリスの詩人、劇作家の Ben Jonson（一五七二―一六三七年）（著者は Ben Johnson と表記）。

ラウンフウル公の夢（ラッセル、ローエル）

歓喜は来り、悲哀は去る、何故か我等は知らず、
　万事は今は喜悦なり、
　万事は今は向上なり、
今や誠実ならんとするは
草と空とが青からんよりも易し
　是れ人生の常道なり、
誰か雲の行路を知らんや、
霽れし空に其迹なし。
眼は其流せし涙を忘れ、
身は其痛みと悲しみとを忘る、
心は春の壮時に還り、
忿怒と仇恨の創痍は深く、
雪もて蔽はれし火山の如くに、
静けき過去の下に葬らる。

（『聖書之研究』四二号、一九〇三（明治三六）年七月二三日、第一一巻、三〇七頁）

○本訳詩は、『聖書之研究』四二号の「所感」に、「三年前の今日」と題して、以下のようにはじまる文章に収められている。「明治三十三年七月十二日、此日は是れ余に取りては終生忘るべからざる日である、此日旧東京独立雑誌は潰れた、此日余が友人は袖を連ねて余を独り遺し去つた、余は其時に余の心血を絞つて泣いた　然し余を去りし余の友人は余の心の苦痛を見て悦んだ」（第一一巻、三〇五頁）。三年前のこの日とは、それは七月五日に『東京独立雑誌』を廃刊とした後、東京独立雑誌社を解

散した七月一二日であった。それはまた、辛い日であると同時に、「恩恵の日」（同前）となった。その三カ月後、九月三〇日に著者が三〇年間にわたって信仰的生涯をかける誌上のエクレシア『聖書之研究』が創刊された。この文章の最後に、「明治三十六年七月十二日、角筈の古巣に於て誌す」（同、三〇六頁）として、詩の最後に「（ラッセル、ローエル作『ラウンフウル公の夢』の一節、意訳）」と付記され、三年前の七月一二日、著者の心情を表わす詩として収められている。著者は、ローエルについて、「米国詩人」（『福音新報』一〇九号、一八九七（明治三〇）年七月三〇日）で、次のように記している。「ローエルはロングフエローの後を継て、ハーバード大学に近世語学の講師たり　またスペイン及び英国に使節たりしことありき。余は道徳的詩歌中、未だローエルの詩の如く高尚雄大なる想あるを見ず」（第四巻、三八六―三八七頁）。原詩は、以下の通りである。「Joy comes, grief goes, we know not how;/Everything is happy now,/Everything is upward striving;/'T is as easy now for the heart to be true/As for grass to be green or skies to be blue,—/'T is the natural way of living:/Who knows whither the clouds have fled?/In the unscarred heaven they leave no wake/And the eyes forget the tears they have shed,/The heart forgets its sorrow and ache;/The soul partakes the season's youth,/and the sulphureous rifts of passion and woe/Lie deep'neath a silence pure and smooth,/Like burnt-out craters healed with snow/From "The Vision of Sir Launfal."」（第一一巻、三〇六―三〇七頁）。作者は、James Russell Lowell（「ラウンフホール公の夢」、参照）。著者は、『The Vision of Sir Launfal』を、「ラウンフホール公の夢」「ラウンフウル公の夢」と表記している。

夕暮の歌（オルヅオス）

我が肩上の羽翼の動くを感ず、然れども我れ尚ほ此処に止て遠く望めば、玲瓏たる階段の天にまで達して、之に到るの途を示すを見る。

（『聖書之研究』四五号、一九〇三（明治三六）年一〇月一五日、第一一巻、四五三頁）

○『聖書之研究』四五号の「問答」には、「来世は有耶無耶」という文章が掲載されている。それは「其一　基督信者の来世観」「其二　来世存在に関する聖書の示顕」「其三　人類の本能に顕はれたる未来観念」「其四　来世存在に関する偉人の証言」「其五　生涯の実験より生ずる来世の希望」から成り、「問」「答」で構成されている。著者にとって「来世」は、キリスト教の信仰の希望であり、それは「十字架」の死から「復活」「再臨」信仰へと続いている。本訳詩は、「其四　来世存在に関する偉人の証言」のなかで、「問、（前略）ドーゾ大詩人の来世観に就て少し御話し下さい」に対する「答」として、「先づ詩人オルヅオスから申上ませうならば、私は彼の詩集の中から何れを先きに引きてお話し申して宜しか甚だ惑ひます、有名な「霊魂不朽の詩」「我等は七人なり」等は人の多く賞讃する所の作であります、然し来世存在に関する彼の最後の証明とも称すべき者は彼の老年の作なる「夕暮の歌」（Evening Ode）であると思ひます、彼は夕日の西山に春くのを見まして彼の感慨を述べて申しました」（第一一巻、四五三頁、以下同じ）と書き、本訳詩を掲載している。詩の引用のあとには、「如何でありますか、今や老詩人は彼の羽翼を張つて天に昇らんとするばかりではありませんか」と記している。原詩は、以下の通りである。「Wings on my shoulder seem to play:/But, rooted here, I stand and gaze,/On those bright steps that heavenward raise/Their practicable way.」。作者は、William Wordsworth（前掲詩、参照）。

死に臨んで余の霊魂に告ぐ（ホヰットマン）

歓べよ、同船の侶伴よ、歓べよ、
（余は喜んで死に臨んで余の霊魂に斯く告げぬ）
我等の生命は終りぬ、我等の生命は始まりぬ、
永の、永の間の碇泊地を我等は去らんとす、
船は終に纜を断り、我心が飛立つなり、
彼女は岸を離れて速かに進むなり、
歓べよ、同船の侶伴よ、歓べよ。

（『聖書之研究』四五号、一九〇三（明治三六）年一〇月一五日、第一一巻、四五四頁）

○本訳詩は、「夕暮の歌」に次いで、「其四　来世存在に関する偉人の証言」のなかに、「詩人臨終の歌として最も勇壮なるものは米国の平民詩人ホヰットマンの「死に臨んで余の霊魂に告ぐ」るの歌であります」（第一一巻、四五三頁）と述べ、この詩が引用されている。著者は、「是れは死の声ではありません、栄転の祝賀の声であります」（同、四五四頁）と記している。原題は、「死の歌」（Death Song、『平民詩人』改版、七一頁）。原詩は、以下の通りである。「Joy! Shipmate—Joy!/(Pleas'd to my soul at death I cry;) /Our life is closed, our life begins;/The long, long anchorage we leave./The ship is clear at last—she leaps,/She swiftly courses from the shore;/Joy! Shipmate—Joy!」（同、四五三—四五四頁）。作者は、アメリカの国民的詩人 Walt Whitman（一八一九—一八九二年）である。本詩は、『平民詩人』改版（警醒社書店、一九二四年）の「ホヰットマンが死の歌」に「死の歌」と題して、畔上賢造訳が収められている。その註には、以下のように記されている。「僅かに七行——然れども如何ばかりの欣喜の此の中に籠れるぞや。これ詩人が死に際して己れの霊に告ぐるの語である」（畔上賢造、七二頁）。

二基の墓（ブライアント）

是れ惨酷なる信仰なり、之を信ずる莫れ、
死は善人に取つては安き境遇なり、
彼等は此処にあり、かの辜なき夫妻は此処を離れず、
＊　＊　＊　＊
静かに、忍んで、憤恚と怨恨なく、
年月、駒の如くに速く走る間に、
彼等は且つ祈り且つ俟つて此辺を去らず、
彼等の肉躰が地を離れて出で来るまで。

（『聖書之研究』四五号、一九〇三（明治三六）年一〇月一五日、第一一巻、四五五—四五六頁）

○本訳詩は、「死に臨んで余の霊魂に告ぐ」に次いで引用されている。「其四　来世存在に関する偉人の証言」のなかには、次のように記され掲載されている。「「死」は彼の特愛の詩題でありました、彼は時には死の威権に圧せられまして、死後の生命に就ては歌ひ得ませんでした、然しながら詩人たる彼は死の呑む所とはなりませんでした、彼も亦死に打勝つて墓を破るの信仰を持つて居りました、彼は「二基の墓」と題して或る無名の老夫婦の死後を弔ひし歌に於て、人生のはかなさを述べた後で死は万事を終ると云ふ世間普通の信仰を排斥して言ひました」（第一一巻、四五四—四五五頁）。原詩は、以下の通りである。「'Tis a cruel creed, believe it not:/Death to the good is a milder lot./They are here, they are here—that harmless pair,/＊＊＊＊/Patient, and peaceful, and pas-

sionless;/As seasons on seasons swiftly pass,/They watch and wait and linger around/Till the day when their bodies leave the ground.」（同、四五五頁）。原題は、「The Two Graves」。作者は、アメリカの「天然詩人」（同、四九三頁）William Cullen Bryant（一七九四―一八七八年）。

〔凡て変り易きものは〕（ゲーテ）

凡て変り易きものは、単に比喩に過ぎず、
達すべからざるものは此処に事実と成る、
口に言ふべからざるものは此処に行はる、
限なく女らしきものは我等を此処に引附く。

（『聖書之研究』四五号、一九〇三（明治三六）年一〇日一五日、第一一巻、四五六―四五七頁）

○著者は、「其五　生涯の実験より生ずる来世の希望」のなかで、次のように述べた後、本訳詩を引用している。「現世は我等の理想を行ふには、余りに不完全なる所であります、若し斯世が万事を終るものでありますならば、人として此処に生れ来りましたのは最大不幸であると思ひます」「故に詩人ゲーテは来世を望んで言ひました」（第一一巻、四五六頁）。作者は、Johann Wolfgang von Goethe（前掲詩、参照）。

紫竜胆に贈る（ブライアント）

汝、秋の露を以て輝く花よ、
空天の色を以て彩飾れて、
汝は皮膚にしみわたる寒き夜に、
静かなる日が次いで来る時に開く。
汝は菫菜花が小川と泉の辺に、
首を垂れる時に来らず、
又樓斗菜が紫衣を着て、
巣鳥の床に凭りかゝる時に開かず。

汝は待つこと遅くして独り来る、
林は枯れて鳥は飛び去り、
霜と短き秋の日とが、
冬の近きを告ぐる時に来る。

其時汝の優さしき静かなる眼は、
紫の袖を翳して空天を望む、
其蒼きこと、恰も蒼き空天が、
其天井より花を落とせしが如し。

余は望む余も汝の如くに、
死の期が余に近づく時に、
希望は余の心の中に咲いて
世を逝りつゝも天を望まんことを。

（『聖書之研究』四六号、一九〇三（明治三六）年一一月一九日、第一一巻、四九三―四九四頁）

○本訳詩は、「余の愛する秋の花」（『聖書之研究』四六号「家庭」）のなかに掲載されている。「余の愛する秋の花」は、春の花は女性的であるが、秋の花は男性的な「桔梗」「菊」「薊」などであるが、それらは平凡で、

また「舶来のコズモス」も愛する花ではない、と著者は語る。だが、「米国の天然詩人ブライアント」（第一一巻、四九三頁）の詩集を愛誦しているとき、秋の花「紫竜胆」を見つけたのである。著者は「紫竜胆に贈る」（To the Fringed Gentian）を再読、三唱し、暗誦する。以後、一年後には伊豆の伊東での伝道の帰路、「大輪の紫竜胆が鮮かなる野蓟と共に到る所に路傍に添うて咲いて居るのを見た」（同、四九五頁）のである。「紫竜胆！　彼が余の愛する秋の花である」（同前）。作者は、William Cullen Bryant（「二基の墓」、参照）。著者は、「米国詩人」（『福音新報』一〇九号、一八九七（明治三〇）年七月三〇日）のなかで、次のように述べている。「ブライアントは法律学に暁通し、新聞記者及びその所有主として一生を送れり。其最も著名なる詩はサノトプシス〔Thanatopsis〕にして、死を歌へる者なり」（第四巻、三八六頁、補記筆者）。

〔冷たき大理石の中に於て在らず〕（ウーラント）

冷たき大理石の中に於て在らず
苔むす死せる教堂に於て在らず
常に新鮮なる橿の小森の中に
独逸人の神は在し且つ動き給ふ。

（『聖書之研究』七八号、一九〇六（明治三九）年八月一〇日、第一四巻、二四三頁）

○本訳詩は、「独逸人の無教会歌」のなかに、「独逸国愛国詩人ウーラントの作の一節」（第一四巻、二四三頁）として収められている。無教会信仰の著者は、「新教会」（『新希望』七四号、一九〇六（明治三九）年四月一〇日）と題した文章に、次のように記している。「監督なし、牧師なし、伝道師なし、憲法なし、洗礼なし、聖餐式なし、按手札なし、楽器と教壇とを備へたる教会なし、神あり、キリストあり、聖霊あり、神と人とを愛する心あり、其教会堂は上に蒼穹を張り、下に青草を布きたる天然なり」（同、六六頁）。ドイツ人の神は、大理石の中や教会堂になく、樫の森の中にある。著者にとっても、教会堂の天井は蒼穹、床は青草、木々の間では鳥が歌う、そんな天然の教会である。原詩は、以下の通りである。「Nicht in kalten Marmorsteinen/Nicht in Tempeln dumpf und tot,/In den frischen Eichenhainen/Webt und rauscht der deutsche Gott.」（同、二四三頁）。原題「Freie Kunst」の一節である。作者は、ドイツの叙情詩人Ludwig Uhland（一七八七―一八六二年）。

〔其は五十年前なりし〕（ロングフェロー）

其は五十年前なりし
美はしき五月の月に於て
〔美〕はしきパイデヴォーの谷に於て
赤子は其揺籠の中に臥せり

老ひたる乳母の天然は
彼を彼女の膝に抱上げ
言へるやう『茲に一つの物語あり
汝の父は之を書き給へり』

『来れ、我と偕に遊べよ、
人の未だ践まざる地に到れよ、
而して其所に人の未だ読まざる
神の自筆を以てせる記録を読めよ』と。

『アガシ第五十回誕辰』の中の三節

（『聖書之研究』八〇号、一九〇六（明治三九）年一〇月一〇日、第一四巻、二九二―二九三頁）

○本訳詩は、「神学耶農学耶――実験的に科学と宗教との関係を論ず」のなかに引用されている。原詩名は、「The Fiftieth Birthday of Agassiz, May 28, 1857」で、「詩人ロングフェローは彼の理想的科学者ルイ・アガシに就て歌ふて言ふた」（第一四巻、二九二頁）と書き、この訳詩を収めている。詩のあとには、以下のように記されている。「科学者の精神は是れである、嬰児の精神である、天然の事実を有の儘に信ずることである、奇蹟なればとて驚かない、又疑はない、事実は事実として信じる、爾うして神に感謝する」（同、二九三頁）。Jean Louis Rudolphe Agassiz（一八〇七―一八七三年）は、スイス生まれの博物学者。作者は、アメリカの詩人Henry Wadworth Longfellow（一八〇七―一八八二年）。

〔嗚呼、何れの僧侶よりも〕（ホイットマン）

嗚呼、何れの僧侶よりも、我が霊魂よ、我等は篤く神を信ず、
然れど神の深事を以て我等は弄ばんとせず。

（『聖書之研究』八〇号、一九〇六（明治三九）年一〇月一〇日、第一四巻、二九六頁）

○「天然を友として我等は僧侶より膏を注がれんとは為ない、天然の子供なる我等は詩人ホイットマンの言を藉りて言ふ」（第一四巻、二九五頁）と書いたあと、本訳詩を引用している。原詩は、以下の通りである。「Ah, more than any priest, O soul, we too believe in God,/But with the mystery of God, we dare not dally.」（同前）。作者は、Walt Whitman（「死に臨んで余の霊魂に告ぐ」等、参照）。

同盟国（テニソン）

実に吾人に誠実なる同盟国あり、
然れど彼れ心に何を謀る乎、悪魔のみ能く之を知る。

（詩人テニソン作『戦争』の一節）

（『聖書之研究』八四号、一九〇七（明治四〇）年二月一〇日、第一四巻、四六〇頁）

○『聖書之研究』八四号の「雑録」に、「同盟反対の神言」（「以賽亜書三十一章一、二、三節」）「非同盟的政策」（「北米合衆国第三大統領トマス・ジェファーソンの就職演説の一節（千八百〇一年）」）とともに掲載された。原詩は、「"True that we have a faithful Ally,/But Only the Devil knows what he means!"」（第一四巻、四六〇頁）。作者は、Alfred Lord Tennyson（「「土塀の上に生ふ花よ」」等、参照）。

真人の祖国（ローエル）

真人の祖国は何処に在るや、
彼が偶然に生れ来りし国乎、
愛に焦る、彼の霊は
斯かる境界に限らるゝを拒むに非ずや、
嗚呼然り、彼の祖国は碧空の如くに
広くして且つ自由ならざるべからず。
そは単に自由の存する所乎、
そは神が神にして人が人成る所乎、

彼が人を愛するの情は
是よりも広き区域を要むるに非ずや、
嗚呼、然り、彼の祖国は碧空の如くに、
広くして且つ自由ならざるべからず。

其那辺たるを問はず、人が其心に
歓喜の冠を着、悲哀の足械を穿く所、
其那辺たるを問はず、人の霊が
真且つ美なる生涯を追求むる所、
其処に真人の大なる故郷は存す、
是れ彼の世界大の祖国なり。

一人の奴隷が泣き悲む所、
人が人を助け得る所、
神に感謝せよ、我兄弟よ、
地の其一点が我が有にして又汝の有なり、
其処に真人の大なる故郷は存す、
是れ彼の世界大の祖国なり。

（『聖書之研究』八九号、一九〇七（明治四〇）年七月一〇日、第一五巻、一三二―一三三頁）

○本訳詩は、「緑蔭独語」（『聖書之研究』八九号「談話」）のなかに収められている。この文章は、「余輩はキリストを信ずる者の一人である積りである、然し『教界』の一人ではない積りである、教界と云ふは俗界と云ふと多く異らない」（第一五巻、一二八頁）とはじまり、著者は第一に人、第二に武士、第三に基督者、情、義、愛の人、平民、平信徒となることを望むと書き、以下のように続けている。救い主にして愛の人キリストは、「単独の人」（同、一三一頁）であり、「故に基督者とは神より愛を受けて之を人に頒つ者である」（同、一三二頁）。次いで、「我が友は全世界に居る、茲に於てか余輩は詩人ローエルの『真人の祖国』の一篇を想ひ出さゞるを得ない」（同前）として本訳詩を引用し、この文章をこう結んでいる。「祖国は此櫟林の蔭にも在る、其下を逍徉する余輩の小かなる心の中にも在る」（同、一三四頁）。作者は、James Russell Lowell（前掲詩、参照）。「真人の祖国」（原題、The Fatherland）とは、神が神にして、人が人なる自由な故郷である。

天国を望む（アイザック・ワット）

我れ天の第宅に入るの
　我が特権を確めらるゝ時に
我はすべての恐怖に遑を告げ
　我が流るゝ涙を拭はん。

縦へ全地は我に逆ひて立ち
　石火の槍を我に投ぐるも
我はサタンの激怒を笑ひ
　我は恚れる世に向はん。

憂愁は洪水の如くに来れ
　苦悶は暴風の如くに荒れよ、
我はたゞ我家に着かんことを、
　我神、我国、我が諸凡に至らんことを。

其処に天の静かなる海に、

我は我が疲れし霊を浴せん、
而して配慮の漣波すらも
我が静かなる胸を超えじ。

（『聖書之研究』九二号、一九〇七（明治四〇）年一〇月一〇日、第一五巻、二四〇―二四一頁）

○本訳詩は、『聖書之研究』九二号の「雑録」に収められ、『歓喜と希望』『信仰日記』に再録された。原詩は、「Where I Read My Title Clear」。作者は、Isaac Watts（一六七四―一七四八年）で、「英国の会衆派牧師。讃美歌作詞家。合理主義的傾向を持ったカルヴィニズムに基づく彼の讃美歌は、作者の在世中も没後も多くの人々に愛唱された」（「解題」第一五巻、五二五頁）。「雑録」には、著者の「余の北海の乳母　札幌農學校」「課題　余は如何にして基督に來りし乎」とともに読者の実験録が掲載され、その後に本訳詩が置かれ、最後に「内村生」の署名で、以下のような結びをもつ「批評家に告ぐ」が載っている。「余輩は人を容れざるに非ず、骨のなさ、信仰のなき、勇氣のなき人を容れざるのみ、敢て告ぐ」（『聖書之研究』九二号、五二頁）。本訳詩の一連は、「永生の冀望」（『福音新報』七二号、一八九六（明治二六）年一一月一三日）に、以下のように訳されている。「若し天上の名簿の録に／たしかに我名を記するを読まば／我は懼怖に別を告げて／流るゝ涙を拭はん」（第三巻、二六六―二六七頁）。

〔小児あり、其手を拡げ〕（ワルト　ホヰットマン）

『小児あり、其手を拡げ、我に草一茎を齎して曰く草とは何ぞやと、
我れ如何にして小児に答へんや、我は之に就て彼が知るより以上を知らず。
我は想ふ、之れ我が天性の旗号なるべし、希望の緑の色にしあれば。
或ひは想ふ、之れ神の手巾なるべし、
香水滴らしたる紀念品にして故意と道に遣されし者なるべし、
其隅に持主の名は記されて我等は其、誰のものなる乎を知るを得べし。
或ひは想ふ、之れ「広き国にも狭き国にも、均しく萌芽し
黒人の中にも亦白人の中にも同じく発生す」てふ意味を通ずる
万国共通の象形文字なるべし。
我は更に思ふ、之れ墓場に生ふる長くして美しい頭の髪なるべし。
心して我は汝を手に取るべし、汝、波打たる頭の髪よ、
汝或ひは若き人等の胸より生へし者ならん、
我れ若し彼等と識りしならば、多分彼等を愛せしならん、
或ひは老ひたる人よりなる乎、或ひは母の懐より生まれて間もなく取り去られし赤子よりなる乎、
而して今又此所にありて汝は母の懐たり』

（『櫟林集　第壱輯』、聖書研究社、一九〇九（明治四二）年、第一六巻、一八二―一八三頁）

○本訳詩は、『櫟林集　第壱輯』の「詩人　ワルト　ホヰットマン WALT WHITMAN」のなかの「彼の天然観」に引用されている。『櫟林集　第壱輯』の「明治四十二年壱月十五日」と付された「櫟林集に題す」（序文）には、次のように記されている。「角筈の櫟林は遠からずして枯れむ、然れども櫟林に養はれし思想は煙滅に附すべからず、是れ此小集輯のある所以なり、敢て之を櫟林在住以来の友人に献ず」（第一六巻、一六八頁）。本論文は、「地と人」「今の米国人」「米国の希望」「ワルト　ホヰットマン」「彼の生涯」等で構成され、そのなかの「彼の天然観」で「有名なる一句」（同、一八二頁）として紹介されている。論文中の「ワルト　ホヰットマン」には、以下のように記述されている。「而

して此天職〔米国を救へよ、米国を以て全世界を救へよ〕を以て生れ来りし者がワルト・ホヰットマンである、純粋の米人、旧世界の痕跡をだも留めず、其骨の髄まで新世界の人たりしは此人である」（同、一七二頁、補記、筆者）。「彼の天然観」では、「彼は唯天然を愛した、非常に愛した、熱切に愛した、深刻に愛した、彼の天然観は寧ろ天然愛であつた」（同、一八二頁）と述べ、本訳詩が掲載されている。掲載詩「'What is Grass?' は 'The song of Myself.' の第六節から」（「解題」第一六巻、五四〇頁）。原詩は、以下の通りである。「A child said *What is grass?* fetching it to me with full hands;/How could I answer the child? I do not know what it is any more than he./I guess it must be the flag of my disposition, out of hopeful green stuff woven./Or I guess it is the handkerchief of the Lord,/A scented gift and remembrancer designedly dropt/Bearing the owner's name someway in the corners, that we may see and remark, and say *Whose?*/Or I guess it is a uniform hieroglyphic,/And it means, Sprouting alike in broad zones and narrow zones,/Growing among black folks as among white,//And now it seems to me the beautiful uncut hair of graves./Tenderly will I use you curling grass,/It may be you transpire from the breasts of young men,/It may be if I had known them I would have loved them,/It may be you are from old people, or from offspring taken soon out of their mothers' laps,/And here you are the mother's laps」（同、一九八―一九九頁）。本訳詩は、『平民詩人』（内村鑑三・畔上賢造合著、警醒社書店、一九一四年）に再録された（著者は「ワルト　ホヰットマン」、畔上は「アルフレッド　テニソン」「ローエルが早年の歌」「グリーンリフ　ホヰッチャ」「ウォルヅヲスが晩年の詩」「カレン　ブライアント」）。本訳詩の作者は、Walt Whitman（前掲詩、参照）。

『シロアムの細流』
"By Cool Siloam's Shady Rill."（ヒーバー）

涼しきシロアムの細流に沿ふて
　如何に美くしく百合花は咲くよ
露けきシヤロンの小山を払ふ
　微風は如何に香はしきかな

涼しきシロアムの細流に沿ふて
　百合花は終に衰へざるを得ず
シヤロンの小山の裾に生ふる
　薔薇花は終に凋まざるを得ず

生命と気息とを賜ふ神よ
　我は汝の恩恵に頼る
我れ栄ふ時も衰ふ時も
　汝の属として我を護れよ

（『聖書之研究』一二五号、一九一〇（明治四三）年一一月一〇日、第一八巻、六―七頁）

○本訳詩は、『聖書之研究』一二五号の巻頭に、「〔我が喜び他〕」とともに、「内村生訳」として掲載され、『信仰日記』の「附録歌こゝろ」に再録された。「シロアム」は、エルサレムの東南部にある池で、泉ではなく水道で導かれた貯水池で、一八八〇年に発見された（同誌の口絵に「シロアムの池」の写真が掲載）。本訳詩は、同誌二頁の下段に載っているが、上段の余白に「結実の秋」と題して、次のような二行が記されている。

「田は自から実りたり、聖語は実を結びたり、我れ実を望まざるに実りたり、驚くべきかな聖語！」（第一八巻、四頁）。作者は、イギリスの讃美歌作家 Reginald Heber（一七八三―一八二六年）。

光り輝く讃美の里〔フランセス・ヴァン・アルスタイン〕

つみかさなれる雲間を過ぎて
キリスト信徒の心の空に
彼方の光は潮の如く
喜ばしくも心を充たす
多数群がる清き友の
絶えず奏る響の音は
はや我等の耳に触れぬ
　川の彼方の岸辺に立ちて
　我等は会ふてまた離れじ
　四時変らぬ涼しき夏の
　光り輝く讃美の里に。
旅路の終くるまでの
なほ暫時の疲れ足
夕影暗くなるまでの
なほ暫時の憂き仕事
暮るれば床に息ひねて
眠れば夜は直あけて
光り輝く讃美の里に
我等は起きてまた眠らじ
　川の彼方の岸辺に立ちて
　我等は遇ふてまた離れじ
四時かはらぬすゞしき夏の
光り輝く讃美の里に。

（『聖書之研究』一三八号、一九一二（明治四五）年一月一五日、第一九巻、一二―一三頁、『愛吟』、第四巻、三四〇―三四二頁）

○『聖書之研究』一三八号に掲載の「我等の希望」の最後に、「（数回死を宣告されし病女の救護を計りつゝある間に草す）」という一文が付記され、詩の題名が記されずに掲載された（第一九巻、一三頁）。『愛吟』に収められた詩には、「光り輝く賛美の里」（第四巻、三四〇―三四二頁）の題名（ここでは「賛」を「讃」にして題名とした）と、次のような註が付されていた。「キリスト信徒の未来観念並に之に伴ふ復活の信仰に就ては智者と才子と『新神学者』と青年批評家とを以て満ち充ちたる日本今日の読者の深く余輩を憐み笑ふ処なるべし、余輩の迷や深し、アゝ余輩の迷を憐れめ」（第四巻、三四二頁）。『愛吟』では、作者名はないが、全集の解題によると、作者はアメリカの讃美歌詩人フランセス・ヴァン・アルスタイン（Frances Jane Van Alstyne=Fanny Crosby、一八二〇―一九一五年）で、原題は「THE BRIGHT FOREVER」。『聖書之研究』に付記された「病女」とは、著者の愛娘でこの年の一月一二日に、数え年一九歳で「光り輝く讃美の里」へと旅立ったルツのことである。ルツは、三年ほど前から病気がちで、これまで「数回」死を宣告されていた。『聖書之研究』一三八号に、著者は北上川畔の墓地に葬られた高橋ツサ子の二七歳の死を悼んで「高橋ツサ子」という文章を載せ、「霊の娘を葬り帰て肉の娘の看護を続けた、此世はまことに涙の谷である、神なくキリストなくしては居るに堪えない所である、然れども、嗚呼、然れども、嗚呼福ひなる哉我等!!!」（第一九巻、二五頁）と結んでいる。ツサ子の死の一カ月半後、ルツは高熱、衰弱で病名不明のまま死去した。臨終の三時間前、生れて初めての聖餐式で、細い手で「主の血」を飲みほすと、彼

女の顔には「歓喜の光顕はれ」、「感謝、感謝」（「祝すべき哉疾病」、第一九巻、二九―三〇頁）と繰り返し、最後に「モー往きます」（「最後の一言」、同、三〇頁）と告げて息絶えた。著者の再臨信仰は、この愛するルツとの再会への希望とともにある。内村家は、鑑三、妻しづ、長男祐之、そして再臨の「大いなる日」には、再びルツとともに「四人」となるのである。著者は、死にゆくルツを前にした「我等の希望」に、こう書いた。「我等の希望は死して復たび甦り、聖められたる此地に於てキリストと共に義の生涯を楽まん事である（中略）故に希望とは此地が元の楽園に化し、聖徒が其中に聖き義しき生涯を送らんことである、而して基督信者の希望とは此希望である」（同、七頁）。一九一三（大正二）年に建てられたルツの墓碑には、「再た會ふ日まで」と刻まれた（「建碑」、参照）。

人生の詩（ロングフェロー）

我に告ぐる勿れ悲しき調子を以て、
　人生は単に空しき夢なりと、
そは霊魂は寝りて死せず
　万物眼に見ゆるが如くにあらざればなり。

人生は真実なり人生は真面目なり
　而して墓は其終局にあらざるなり
汝は塵なるが故に塵に帰るべしとは
　霊魂に就て言はれしにあらざるなり。

（『聖書之研究』一四〇号、一九一二（明治四五）年三月一〇日、第一九巻、五〇―五一頁）

○本訳詩は、『聖書之研究』一四〇号の「〔俗人の宗教観他〕」に、「死者のために泣く勿れ／之れがために嗟く勿れ／擄はれて往く者のために甚く嗟くべし／そは彼は再び帰りて其故園を見ざるべければなり」（「エレミヤ書」第二二章一〇節、第一九巻、四九頁）を取り上げた「悲歎」等とともに掲載されている。本号は、一九一二（明治四五）年一月一二日、愛娘ルツの若き死の直後、その悲嘆のなかで発行された。本訳詩は、「信仰は個人的関係」と題された文章に続いて引用されている。著者は、このなかで「基督教はキリストである」「イエスのために人に嫌はれ、世に憎まるゝを以て反て歓喜となす者である」（同、五〇頁）と書き、アメリカの詩人 Henry Wadworth Longfellow（一八〇七―一八八二年）の詩を掲載している（「〔其は五十年前なりし〕」「ヱンディミオン」、参照）。原題は、「A Psalm of Life」（一、二連の翻訳）。本訳詩は、『信仰日記』への再録にあたり、一連の三、四行目を以下のように変更している。「寝れる霊魂は死せるなり／万物眼に見ゆるが如くにあらざるなり」（「解題」、同、五一二頁）。人の「人生」は、「霊魂」においては「墓」に終らないのである。著者は、ルツの死の翌年、「人生」（『聖書之研究』一六〇号、一九一三（大正二）年一一月一〇日）と題した短文を、次のように結んでいる。「永生に終らざる人生は実に享くるの価値なきものである」（第二〇巻、一七二頁）。本訳詩の二連の最初の二行は、「人生は真なり、人生は真面目なり／墓は其終極にあらざるなり」の訳と原詩とともに、「十字架への道」第二九回（『聖書之研究』三一一号、一九二六（大正一五）年六月一〇日、第二九巻、二一二頁）にも収められている。

万物悉く可なり（ロバート・ブラウニング）

年は春なり、
日は朝なり、

朝は七時なり、
山側は露に輝き、
雲雀は空に舞ひ、
蝸牛は叢林に戯る、
神は天に在り、
此世の万物可なり、

（『聖書之研究』一四七号、一九一二（大正元）年一〇月一〇日、第一九巻、二五四頁）

○『聖書之研究』一四七号の「新約聖書の組成（暗誦すべき事）」の余白に、本訳詩を掲載している。「万物悉く可なり」は、著者の信仰的生涯でもある。同誌一〇三号「所感」には、同名の「万物悉く可なり」という、次のような文章がある。「星は音信を伝へて曰く万物悉く可なりと、地は洪声を放て曰く万物悉く可なりと　歴史は其教訓を伝へて曰く万物悉く可なりと、信仰は其実験を宣べて曰く万物悉く可なりと、神其造り給へるすべての物を視給ひけるに甚だ善かりきと、宇宙と人生の事物にして何れか善且つ可ならざらんや。創世記一章三十一節」（第一六巻、七五頁）。星、地、歴史、信仰、ブラウニングの春、朝、露、雲雀、蝸牛、これらはすべてが「万物悉く可なり」を伝えるとともに、著者の信仰宇宙である。世界は神とともにあり、再臨のキリストは臨りつつある。それは著者最期のメッセージへとつながっていくのである。一九三〇（昭和五）年、重篤のなかで、著者は今井館で行われる二日後の三月二六日の内村鑑三古稀祝賀感謝の会の参加者に向けて、長男・祐之に、以下のような言葉を託した。「「萬歳、感謝、滿足、希望、進歩、正義、凡ての善き事」と云ふ短い言葉を以て此時の心持を表した。尚附け加へて言つた。「聖旨にかなはゞ生延びて更に働く。然し如何なる時にも惡き事は吾々及び諸君の上に未來永久に決して來ない。宇宙萬物人生悉く可なり。言はんと欲する事盡きず。人類の幸福と日本國の隆盛と宇宙の完成を祈る」（内村祐之「父の臨終の記」、『聖書之研究』三五七・終刊号、一九三〇年四月二五日、五七頁）。本訳詩の原題は、「Pippa Passes」（一節）。作者は、イギリスのヴィクトリア朝詩壇の詩人で理想主義を表現したRobert Browning（一八一二―一八八九年）。

ブラウニング詩集に於ける基督の再来（ブラウニング）

欠如する者あり―何乎？
初夏に葉緑滴り、
蒼穹に日光漲る、
―汚点何処にかある？
天地は光明に満つれども空白なり、
聖像を迎ふる殿堂たるに過ぎず、
葉緑何かある花綵何かある？
花冠ありて之を戴く者あるなし、
然らば来り給へ**来るべき者**よ、
来りて此不完全を完成し給へ、
碧空を充実し緑野を完美し給へ、
此の花園に生気を吹入れ給へ、
然らば死せる万物は
生命を受けて起き愛を以て栄えん、
然り愛を以て栄えん。

（『聖書之研究』二一三号、一九一八（大正七）年四月一〇日、第二四巻、一一四―一一五頁）

○本訳詩は、著者が再臨信仰による再臨運動を始めた一九一八（大正七）

年、『聖書之研究』一一三号の巻頭に、「（訳者曰ふ、自由にして大胆なりし詩人は余輩の此自由にして大胆なる意訳を許すであらう）」と付記して、原詩とともに掲載され、『英和独語集』（岩波書店、一九二二年）に再録された。「訳文は『基督再臨問題講演集』の「天然的現象として見たる基督の再臨」の末尾余白にも再録。ブラウニングの詩は、一八八三年に刊行された詩集JOCOSERIAに収められ、やはり'Jocoseria'と題されたもの」（「解題」、第二四巻、六三七頁）。「然らば来り給へ**来るべき者**よ」、それは著者の信仰的待望にして、旧新約聖書の奥義である。原詩は、以下の通りである。「THE LORD'S RETURN IN BROWNING./Wanting is—what?/Summer redundant,/Blueness abundant,/—Where is the blot?/Beamy the world, yet a blank all the same,/—Framework which waits for a picture to frame:/What of the leafage, what of the flower?/Roses embowering with naught they embower!/Come then,complete incompletion, O Comer,/Pant thro' the blueness, perfect the summer!/Breathe but one breath/Rose-beauty above,/And all that was death/Grows life, grows love,/Grows love!」（第二四巻、一一三—一一四頁）。作者は、Robert Browning（「万物悉く可なり」、参照）。

詩人カウパーの再臨歌（カウパー）

然らば臨り給へ、而して爾の戴き給ふ多くの冠冕の上に更に一個を加へ給へ、全地の王たるの冠冕を戴き給へ、爾のみ此冠冕を戴くの資格を有し給ふ、是れ固より爾に属する者、天地の成りし前より古き契約に由りて爾に属する者なり、爾は其後爾の血を以て再び之を己に贖ひ給へり、其価値以上の代価を払ひ給へり、爾の聖徒は王として爾を迎へまつる、爾の尊号は無窮の愛の泉に浸されたる鉄筆を以て彼等の心に深く刻まる、然り爾の聖徒は王として爾を迎へまつる、而して爾の臨り給ふこと遅きが故に爾の敵は勇気を得て誇る、然れども若し彼等にして我等の永く待望みし爾の再臨の光に接せん乎、彼等は爾の稜威を恐れて、或ひは小山の懐に潜み、或ひは巌の洞に逃れて、其屈める身を隠さん。

（『聖書之研究』二一九号、一九一八（大正七）年一〇月一〇日、第二四巻、三三六頁）

○本訳詩は、『聖書之研究』二一九号に、「内村鑑三訳」として、次のような付記とともに掲載された。「英国詩人カウパーは贖罪と再臨の信仰を歌ひて有名である、左に彼の有名なるCome then, and, added to Thy many crownsの一節を抄訳する」（第二四巻、三三六頁）。作者は、イギリスの詩人William Cowper（一七三一—一八〇〇年）。讃美歌集『Olney Hymns（一七七九年、John Newtonとの共編）がある。「ヨハネの黙示録」は、「御霊」や「新婦」の「『来りたまへ』」の声のあと、黙示録の証言者は、以下のように記している。「『然り、われ速かに到らん』（第二二章二〇節）」。二〇節は、こう続いている。「アァメン、主イエスよ、来りたまへ」。「マラナ・タ（われらの主よ、きたりませ）」（「コリント人への第一の手紙」第一六章二二節）と「然り、われ速かに到らん」——この待望と約束に、著者の再臨信仰の希望の源がある。

〔我は汝は我を離れて〕（キッチャー）

我は汝は我を離れて在りとは信ずる能はず
危き場合に援けん為に天使は我側に在るに非ず耶

（『聖書之研究』三三五—三三六号、一九二八（昭和三）年六月一〇日、七月一〇日、第三一巻一八四頁）

○本訳詩は、「来世問題の研究」の「其五　活動の来世」に、「詩人キッチ

ヤーの『雪籠り』に彼の去りにし妻を想ふ一句がある」として最後の部分に引用され、次のような一行で「其五」は結ばれている。「天に在りて相互を助け、亦地に在る者をも助くる事が出来る。それが真の死後生命である」（第三一巻、一八四頁）。作者は、John Greenleaf Whittier（「〔我もはや懼れず〕」等、参照）。

〔路傍に花咲く〕（ウォルヅオス）

路傍に花咲く最も卑き花も、
万感湧いて尽ざる深遠の思想を促す

（「日記」一九二〇（大正九）年七月七日、第三三巻、二六六頁）

○著者の日記は、一九一八（大正七）年八月二六日から一九三〇（昭和五）年三月二二日まで、全集に収められている。日記は、『聖書之研究』二一九号（一九一八（大正七）年一〇月一〇日）から終刊号三五七号（一九三〇（昭和五）年四月二五日）まで、「日々の生涯」（二一九号―二六五号、二七四号―三五七号）、「一日一生」（二六六号―二七三号）として同誌に掲載された。日記は、三月二八日の死の七日前三月二二日で終っているが、その前日の二一日には、一行こう記されている。「引続き希望の内に在る」（第三五巻、五六一頁）。本訳詩が引用された一九二〇（大正九）七月七日の日記には、「雑誌校正を終わつた」（第三三巻、二六六頁）と書き、「今からが本当の夏休暇である、ウォルヅオスを思い出した、狭い、冷たい疑念深い斯世の人を離れて直に天然と天然の神に接する快楽を思ふた」（同前）といい、本訳詩を原詩とともに記している。原詩は、以下の通りである。「"The meanest flower that blows can give/Thoughts that do often lie too deep for tears."」。作者は、William Wordsworth（前掲詩、参照）。

〔大いなる神よ〕（ウォルヅヲス）

大いなる神よ、余は所謂基督者たらんよりは
寧ろ廃れし信仰に養はれし異教徒たらん

（「日記」一九二〇（大正九）年七月九日、第三三巻、二六七頁）

○日記には、F・W・H・マイヤース著『詩人ウォルヅヲス』を読み、「之は余が一八八五年五月米国ペンシルヴニヤ洲エルキンに於て白痴院看護夫を務め居りし時に購ふたる一冊であつて甚だ懐かしき者である」（第三三巻、二六七頁）と書き、本訳詩を原詩とともに引用し、こう結んでいる。「実に青年時代に於てウォルヅヲスと親しむの利益は終生尽きざる者である」（同、二六八頁）。原詩は、以下の通りである。「Great God! I'd rather be/A pagan suckled in a creed outworn」（同、二六七頁）。作者は、William Wordsworth（前掲詩、参照）。

〔天然の堅き〕（ウォルヅオス）

天然の堅き基礎の上に
永久に変らざる思想は築かる。

（「日記」一九二〇（大正九）年一一月二六日、第三三巻、三一八―三一九頁）

○日記には、星之友会で毎回三〇分程度「聖書の天文学」について講じることになり、同日は「創世記」第一章一節、一四―一九節について話したと書き、次のように記している。「「元始に神天と地とを創造り給へり」とありて聖書は天文学と地理学とを以て始つて居る、而して黙示録

は新しき天と新しき地との出現を以て結んで居るのを見れば、聖書は天文地理を以て始終して居る事が解る」（第三三巻、三一八頁）。著書は、確固とした天文と地理の上に築かれることのない信仰は頼むに足りないといい、本訳詩を原詩とともに引用している。原詩は、以下の通りである。「To the solid ground of Nature/Trusts the mind that builds for aye.」（同前）。作者は、William Wordsworth（前掲詩、参照）。同じ原詩による翻訳は、「理想的伝道師」（『基督教新聞』四五一―四五五号、一八九二（明治二五）年三月一八日―四月一五日）に、以下のように引用されている。「永久ニ築カントスルノ人ハ／万有ノ堅固ナル土台に頼ル」（第一巻、二六八頁）。

〔地球上に我が属すべき〕（ワルヅワス）

地球上我が属すべき唯一の団体あるあり、
高潔なる生者と高潔なる死者とより成る。

（「日記」一九二〇（大正九）年一二月二四日、第三三巻、三二九頁）

○一二月二三日、今井館で五八名が会したクリスマス晩餐会が開かれた。「教会のクリスマスとは異なり聖劇も音楽礼拝もない、余はワルヅワスの左の一句を引いて一同に対ひ高潔と勇気の必要とに就て勧むる所があつた」。作者は、William Wordsworth（前掲詩、参照）。

〔突立つ山の曝せる胸に〕（ミルトン）

突立つ山の曝せる胸に
悶える雲は屢々靠る

（「日記」一九二一（大正一〇）年九月一二日、第三三巻、四二六頁）

○一九二一（大正一〇）年七月六日―九月一五日、沓掛（一〇日より星野温泉）に滞在した。夏期休業中の日々で、九月一一日の日記には、以下のように書かれている。「基督者に取りては休養と称して単に仕事を休み天然に接する丈ではない、神に接し其聖霊の注入に与る事、それが真正の、積極的の休養である」（第三三巻、四二五頁）。翌一二日は雨、唯一の友は「浅間の雄峯」（同、四二六頁）で、著者は「詩人ミルトンの『アルレグロー』に於ける左の一句を諳んじながら屢々其勇姿を仰ぐは多大の感興である」（同前）と、原詩とともに本訳詩を記している。原詩は、以下の通りである。「Mountains on whose barren breast,/The labouring clouds do often rest.」（同、四二六頁）。作者は、John Milton（「〔噫聖霊よ、爾は諸ての宮殿に勝り〕」、参照）。

〔真実にして〕（アイザック・ワット）

真実にして変らざる神は、
誓と約束と血とを以て、
我が希望の土台を置き給ふ

（「日記」一九二三（大正一二）年二月一三日、第三四巻、一四五頁）

○一九二三（大正一二）年二月一二日の日記には、「朝ボーガッキー著『金言の庫』に「我れ此死すべき生命を去る時に、罪は永久に廃むべし」との言を読みて思はせられた、死は実は人生に最も善き事ではない乎と。罪は死を以て止むならば、死は歓迎すべきである」（第三四巻、一四五頁、

以下同じ）と記されている。その翌日の日記には、「今日も亦朝の日課としてボーガツキーに左の一句を読んで我眼は感謝の涙に潤（うるう）んだ」と書き、本訳詩が原詩とともに引用されている。原詩は、ドイツの讃美歌作家ボーガツキー『金言の庫』（英訳、A Golden Treasury for the Children of God, 1859）のなかに収められた詩（Hope in the Covenant）の一節で、作者はIsaac Wattsの（「天国を望む」、参照）で、原詩は、以下の通りである。「A faithful and unchanging God/Lays the foundation of my hope/In oaths, and promises, and blood.」。『金言の庫』は、著者によって『寶の櫃』（『一日一生』角川文庫版、第三版、一九五二年、『金言集』、第三四巻、一八二頁）などと訳されている。

〔汝は暴風吹き荒れし〕（ホヰッチャー）

汝は暴風吹き荒れし或る週間の後に
楽しき安息日が麗（うるは）しき日として現はれ
雲と影とが太陽の光を受けて
祈禱の天幕の覆（おほひ）として輝くを見ざりしや

（「日記」一九二三（大正一二）年六月一四日、第三四巻、一八八―一八九頁）

○日記には、「朝ホヰッチャー詩集にVoices（ボイセス）の一篇を読んだ。其内の左の一節が特に余の注意を惹いた」（第三四巻、一八八頁）といい、本訳詩が原詩とともに引用されている。詩に続けて、著者は次のように記している。「之に対して余は心の内に「然り、然り、見たり」と云ひて答へた」（同、一八九頁）。原詩は、以下の通りである。「Hast thou not, on some week of storm,/Seen the sweet Sabbath breaking fair,/And cloud and shadow, sunlit, form/The curtains of its tent of prayer?」（同、一八八頁）。作者は、John Greenleaf Whittier（前掲詩、参照）。

三『愛吟』（抜粋）・解題

『愛吟』　今井館教友会所蔵資料

愛吟

詩は英雄の朝の夢なり（アルフォンソー、ラマーティン）
詩の正当なる反対は散文に非ずして科学なり（コレリッヂ）
そは大なる思想が
ア、我が兄弟よ大いなる思想が詩人の天職なり（ワルト、ホイットマン）

（『愛吟』、警醒社書店、一八九七（明治三〇）年、第四巻、三一六頁）

○本訳詩は、「愛吟」と題して冒頭に置かれている。作者は、フランスのロマン派の詩人 Alphonse Marie Louis de Prat de Lamartine（一七九〇―一八六九年）、イギリスの詩人Samuel Taylor Coleridge（一七七二―一八三四年）、アメリカの詩人 Walt Whitman（一八一九―一八九二年）。ここに著者の詩・詩人観の一端を見ることができる。

詩人の胸中（ロバート、ラブマン）

彼の胸中に囀づる鳥あり
宝玉の思想と黄金の語言と
山と牧場と家畜の群とは
　皆彼の胸中にあり

喜と悲と　闇と明と
日向と日陰と昼と夜と
悪を憎む心と義を愛する念と
不朽の事業を遂げんとする
永久不抜の志望と
癒すべからざる飢渇とは
　皆彼の胸中にあり

（『愛吟』、第四巻、三一六―三一七頁）

○本訳詩の原題は、「THE POET'S SOUL.」で、著者は「詩人の胸中」と訳している。そこには「囀づる鳥」「宝玉の思想と黄金の語言」「山と牧場と家畜の群」があり、「喜と悲と 闇と明」「日向と日陰と昼と夜……」などの信仰宇宙（＝SOUL）がある。作者は、アメリカの詩人Robert Loveman（一八六四―一九一三年）。

カンゾーナ（小歌）（サボナローラ）

今や賢と良とは翼を収め
　無智は戯れ、衆愚は叫ぶ
奢侈は淫歌を唱へて耻ず
　哲理は怪訝を説て誇る
　　作偽権柄を恣にし
　　陋猥勝利に栄ふ
我之を見て冀望裏に沈む
　惟知るメシヤの来て世を治る時は
　強圧悉く息んで正義の悦ばん事を

ア、我の霊よ、汝の未だ覓めざる
　紫衣の栄を汝の念頭より絶てよ
綺羅縉紳の交を避け
　権門勢家の寵を避け
　　阿世の学を斥け
　　卑見の人を敵とし
汝の心奥に聖想の守衛たれ
　ア、我の霊よ、汝天涯に高く翔る時
何者も汝の無垢の翼を穢すべからず

（『愛吟』、第四巻、三一七―三一八頁）

○本訳詩には、以下のような註が付されている。「伊国愛国者サボナローラ廿歳の時の作なりと伝ふ、蓋し彼未だフエレラに於ける祖父の家にありし頃、時の貴族幷に紳商社会の淫風乱俗を目撃せし時の感を述べし者なるべし、後、彼終に意を決してボログナの寺院に退隠せんとして家を出でんとする前夜、彼の腰笛に合して悲曲を奏し、彼の慈母をして哀悼措く能はざるに至らしめしといへるは或は此小歌を奏せしことなるやも知れず、ア、一四世紀の伊太利、ア、今日の日本」（第四巻、三一八頁）。原題は、「THE CANZONA.」。冒頭には、次のように記されている。「Composed by *Savonarola* in 1472 at his twentieth age. Two verses translated by R. R. Madden.」（同、三六八頁）。作者は、フェレーラ生まれのドミニコ修道士で神権政治を行い、最後はフィレンツェで公開処刑されたGirolamo Savonarola（一四五二―一四九八年）。著者は、『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』（大内三郎訳）に、「四百年のむかし、サヴォナローラはフローレンスでこのような聖なる謝肉祭を始め、修道僧たちは歌い踊ったのだ」（四九頁）と書き、以下のような詩句を記している。「あつき愛ともゆる心をもて／キリストの聖き狂気をかきいだく／かくもうましき喜び、／かくも清くはげしき喜びかつてなし／叫べよ、われとともに、わが叫ぶごと／狂気よ、狂気よ、聖き狂気よ」（同前）。

無限大（テニソン）

一

暗き此世に幾多の庵は、

失せにし人の迹を悲む、
遠き宇宙に幾多の星は
消にし民の墓もて廻転る、

二

此世の常の歴史なる、
絶ゆる時なき政治論、
億々万の日の面前に、
群り騒ぐ蟻の音、

三

詐偽は此所にも彼所にも、
智者の悲む不信実、
一人の詐偽を掩はんため、
幾千万の詐偽の声、

四

大経綸や大勲功、
陸海軍の大勝利、
正義の為に死し人、
名なき戦争に失せし人、

五

生血に煮らるゝ、無辜の民、
義人を屠る「正義論」、
国の破滅を意はざる、
自由を衒ふ大束縛、

六

栄華の極の宗教家、
疑惑に迷ふ哲学者、
奸智に長くる妖僧は、
幾多の信徒を引き寄する、

七

娯楽の果の廃人、
昼は光に身を縮め、
夜は汚辱の魔に駆られ、
罪の宴遊に意気昂し、

八

酒と嬌婦に耽ける富、
阿諛と賄賂に頼る権、
貧より辛き不義の財、
骨まで潔き義者の貧、

九

慕ひし人に連れ添ひて、
思残れる事はなく、
妹脊の契いと深く、
愛づる孫子に家栄え、

十

名利を競ふ国と国、
小事に鬩ぐ村と村、
死をもて守る義士の節
火花の如く消ゆる約、

十一

瞬く間の逸楽に、
肉と霊とを蕩尽す人、
愛に私慾を打消して
十字に身をば釘けし彼

十二

春と夏と秋と冬と、
　果つることなき世の輪廻、
国の盛衰、汐の変、
　合せて何の価ある、

十三

凡ての哲理、詩歌、科学、
　人の心の種々の状、
卑しき物も高き物も、
　穢き物も清き物も、

十四

渾が墓に終るとならば、
　人の世に在る何故乎、
無限に吸はれ死に呑まれ、
　意味なき過去と消ん為に乎、

十五

軒端に呻吟る蚊の群乎、
　箱巣に怒る蜜蜂乎、
ア、言を休めよ、我は彼を愛せり、
　死者は死なずして生けり、

（『愛吟』、第四巻、三一九―三二三頁）

○本訳詩には、以下のような註が付されている。「末節幷に第十一節に於て「彼」と言て「人」或は「者」と言はざるは勿論詩人の崇拝物を指して言へばなり、是れ彼がIn Memoriamに於て「強き神の子、不朽の愛」と謳ひしナザレの人を言ひしなり」（同、三二三頁）。原題は、作者が八〇歳のときに出版された「VASTNESS.」。作者は、Alfred Lord Tennyson（「〔土塀の上に生ふ花よ〕」等、参照）。『In Memoriam』（一八五〇年）には、「科学思想と当時の崩れゆく信仰が現われている」（『岩波小事典西洋文学第二版』）。

堅き城は我等の神なり（ルーテル）

堅き城は我等の神なり、
彼は拠るべき塞堡なり、
我等に臨みし凡ての悪より、
彼は美事に我等を救はん、
　夫の古よりの悪しき者は、
　今は猛威を悉くして立てり、
　政権を以て装ひ、
　邪曲の計を施らす、
世に彼に当る者なし。

若し我等の力に頼らば
我等は直に失はれむ、
然れど一人の聖き者の
我等の為に戦ふあり、
　彼何人と尋ぬる乎、
　イエスキリスト其人なり、
　サバオスの神に在して、
　彼の他に神あるなし、
　彼我等と共に戦ふ。

たとへ悪魔は世界に充ちて、
我等を呑まんと企つるも、

我等は少しも心に留めじ、
彼は我等に勝つ能はず、
　此地に権を握る者は、
　如何に苛立騒ぐとも、
　我等に害を加ふるを得じ、
　彼の運命は已に定まれり、
　一言以て彼を殺すべし、

神の勅命は已に降れり、
是を毀つの権威あるなし、
彼は我等の味方なり、
力と霊とを我等に給ふ、
　我等の生命を奪ふも可し、
　我等の名誉を毀つも可し
　財も妻も子も与へん、
　然れど彼等は何も得じ、
　神の聖国は竟に仆れず、

（『愛吟』、第四巻、三二四―三二七頁）

○本訳詩には、連の間に、以下のような註が付されている。「「夫の古よりの悪しき者」Der alte böse Feind、悪魔なり、政権に頼り、邪計を施らし、志士を強圧す、古今東西変ることなし」（第四巻、三二四頁）。「「サバオスの神」（Der Herre Zebaoth）、「万軍の主」の意、キリスト崇拝、「新神学者」の嘲弄物、貧叟博士の哲学的（?）戯談の好題目、然れどマルチン、ルーテルの宗教」（同、三二五頁）。「「此地に権を握る者」、Der Fürste dieser Welt、魔王なり、改革者の一言に急所を刺されて憤悲するの族」（同、三二六頁）。「「彼等」（Sie haben's kein Gewinn）、魔族を云ふ、義人を殺して勝てりと信ずる類」（同、三二七頁）。本訳詩は、ドイツ語の原詩「EINE FESTE BURG IST UNSER GOTT.」とともに、Thomas Carlyle による英訳も載っている。作者は、ドイツの宗教改革者 Martin Luther（一四八三―一五四六年）。

ロイド、ガリソン（ローヱル）

隘き部屋に友なく名なく、
　活字を拾ふ貧しき青年、
場所暗くして装飾なし、
　然れど自由は此所に釀せり。

賛助の来る目的なく、
　双手に世界の任を負ふ、
彼は植字の術を知れり、
　勇気と印刷機械とあり。

彼の如きは燃る髄、
　統系造る中の真、
週囲の冷躰彼に化し、
　燃る焔の熱に湧く、

ア、真理よ、ア、自由よ、汝は昔も今も尚ほ
　馬槽の牀にはごくまる、（路可伝二章七節）
夜の関の木砕く手は、
　賤の伏屋に人と成る。

渓河を　源　近く過ぎる時、
　其行末を推量り難し、
貢を数多の小川に受けて
　潮の如くに海に臨む。

ア、小なる端緒よ、至誠に拠り、
　不撓に築きて汝は大にして強し、

＊　＊　＊　＊

汝は不義に勝ち楽土を拓き、
　王冠を得て之を戴て耻ぢず。

（『愛吟』、第四巻、三二七―三二九頁）

○本訳詩には、以下のような註が付されている。「ウイリヤム、ロイド、ガリソン、は黒奴廃止運動卒先者の一人なり、千八百二十六年、即ち彼の二十二歳の頃より頻りに時の政権金権に逆らひ、独力を持て痛く黒奴使役制度を攻撃せり、彼の発行にかゝりし、「リベレートル」（放免）なる雑誌は南方諸州の忌み嫌ふ処となり、ジョルジヤ洲の如きは五千弗の賞を賭けて法律上此雑誌の禁圧を企つるに至れり、然れども勇敢独歩のガリソンなにか臆すべき、彼は発行を続けて益々広く之を散布し、終に千八百六十年の国民的大運動を見るに至れり、雑誌を発行するならば如此き企計と精神とを以てすべし、貴顕の補助金を頼み、俗論の賛助を待つの雑誌記者は大に此米人に学ぶ処ありて可なり」（同、三二九頁）。原題は、「WILLIAM LLOYD GARRISON.」。William Lloyd Garrison（一八〇五―一八七九年）は、アメリカの奴隷制度廃止運動家で、アメリカ反奴隷制度協会の創設者の一人である。作者は、James Russell Lowell（前掲詩、参照）。

急がずに、休まずに（ゲーテ）

「急がずに、休まずに」、
　是ぞ汝の胸飾
心の底の奥に留め、
浪風荒く吹き捲くも、
花咲く小径たどるにも、
　世を去るまでの旗章。

急がず、心して、
心の駒の手綱取れ、
静に思ひ、能く計り、
決めて全力もて進め、
急がずに、歳を経て、
思慮なき行為に悔みすな。

休まずに、よく励め、
過ぎ行く年の足早し、
何かに朽ざる善き仕事、
浮世の旅の紀念物、
遺して我の身は果つも、
　世々に長生ふその栄誉。

急がずに、休まずに、
静に天の命を待て、
義務は汝の指南軍、

何はともあれ正を践(ふ)め、
急がずに、休まずに、
闘(たかい)終へて後の冕(かんむり)。

（『愛吟』、第四巻、三三〇―三三二頁）

○本訳詩のあとに、徳川家康の以下の言葉を置いている。「惰(おこた)らず行かば千里の外も見ん、／牛の歩(あゆみ)のよし遅くとも」（第四巻、三三二頁）。作者は、Johann Wolfgang von Goethe（前掲詩、参照）。本詩は、英文の翻訳「HASTE NOT! RSEST NOT!」が収められている。

今日（トマス、カーライル）

茲(ここ)に白日又来りけり
消費せざらん事を勉めよ
此日永遠より来り
夜と共に永遠に去る。
人未だ曾(かつ)て此日を見ず、
逝(ゆき)て再び之を見る者なし、
茲に白天又来りけり、
消費せざらん事を勉めよ。

（『愛吟』、第四巻、三三三―三三三頁）

○著者は、「何故に大文学は出ざる乎」（『国民之友』二五六号（一八九五（明治二八）年七月一三日）に、「カーライル曰へるあり「雄編大作は常に憂鬱の気を帯ぶと」（第三巻、一八一頁）述べ、ユーゴ、イプセン、レッシング、カーライルの名をあげている。カーライルについては、「カーライルを学ぶ利と害」（『月曜講演』、警醒社書店、一八九八年、所収）、「カーライルの言」（『東京独立雑誌』二五号、一八九九（明治三二）年）、「カーライルの葬式」（『聖書之研究』一一〇号、一九〇九（明治四二）年六月一〇日）、「カーライルの婦人観」（『東京独立雑誌』二八―二九号、一八九九（明治三二）年四月一五、二五日）などの著述がある。また、『夏期演説　後世への最大遺物』（便利堂書店、一八九七年）では、カーライルが二〇年かけて完成した大著『フランス革命史』の原稿焼失による書き直しに言及した。原題は、「TO-DAY.」で、作者はスコットランド生まれのイギリスの思想家・歴史家であるThomas Carlyle（一七九五―一八八一年）。本訳詩のあとに、佐久間象山の以下の言葉を置いている。「日晷一移千載無再来之今、形神既離万古無再生之我、学芸事業豈可悠々」（第四巻、三五三頁）。

夕暮（フリードリッヒ、レッケルト）

天の雲に浸(ひた)されて
地は静穏(せいおん)に帰(き)せり、
晩鐘(いりあひ)の音(ね)に伴(ともな)はれて
自然は眠に就けり。

（『愛吟』、第四巻、三三三―三三四頁）

○本訳詩には、日本語の題名「夕暮」に対応するドイツ語の原題は付されていない。作者は、ドイツの詩人、東洋学者のFriedrich Rückert（一七八八―一八六六年）。天の雲、晩鐘の音のなかで、自然も、大地も、万物悉く可なりの夕暮の静けさにつつまれている。

エンディミオン（ロングフェロー）

登る月に星かくれ
金の如きそのひかり
彼所此所に影撒きて
青き野原の上に輝る

斯くも静けき宵の間に
小森の陰に独寝て
夢にも遭わぬ婀娜神の
接吻に触れしエンディミオン

デイヤナの接吻は人の愛
求めぬ時の贈物
言はず語らず、知らぬ間に
深き情の一凝視

ア、憂に沈むものよ
ア、患難と恐怖の下に
疲れし頭を低るものよ
汝も愛せらるゝなり

如何に運命拙なきも
如何に此世は淋しきも
知らぬ情の友ありて
此身の憂に応ふらん

（『愛吟』、第四巻、三三四―三三五頁）

○本訳詩には、以下のような註が付されている。「希臘神話に曰ふ、牧者エンディミオン、主神ジュピターに乞ふに紅顔を保ちながら終生を睡眠の中に過さん事を以てす、ジュピター之を容し、彼をしてラトモス山頂に登り、独り眠に就かしむ、女神デイヤナ之を見て夜々降り来て彼を接吻す、デイヤナは月神なり」（第四巻、三三五頁）、「嗚呼此淋しき世の中、此無情なる社界、今や清士友を得るに難し、然れども世は未だ全く魔族のものに非ず、同情者は存するなり、慰めよ」（同、三三六頁）。原題は、「ENDYMION.」で、作者は Henry Wadsworth Longfellow（前掲詩、参照）。

汝の恐怖を風に任かせよ（ゲヤハート）

汝の恐怖を風に任かせよ
望んで狼狽くなかれ
神は汝の悲鳴を聞けり
神は汝の頭を擡げん

暗き雨夜の波路の中に
神は汝の道を開かん
彼の時を俟てよ然らば
夜は喜楽の昼と終らん
彼の支配は宇宙に亙り
万物皆彼に従ふ
彼れ為して恵ならざるはなし
彼れ導きて光ならざるはなし

汝は未だ彼を解せず
然れど天と地とは告ぐ
神は天上に主権を握り
能く万物を治め給ふと

（『愛吟』、第四巻、三三八―三三九頁）

○本訳詩には、以下のような註が付されている。「パウル、ゲヤハートは独逸国伯林朝廷に事へ、其宮中の説教師として長く職を奉ぜし人なり、然るに終に讒に遇ひ都外に逐放せらるゝに至れり、彼れ冤を訴ふるに所なく、亦歩を向くるの目的地なし、一夜僻陬の旅館に宿し、夫人の愁歎其極に達す、ゲヤハート彼女を慰むるに術なく、此の詩を作て彼女に示す、而して慰諭の言未だ終らざるに二人の紳士の刺を通して彼を見んと欲する者あるに会す、出て彼等に接すればサクソニー国の撰侯より特に彼を迎へん為に送りし使者なりき、曰ふ侯彼の不遇を聞て迎へてサクソニー朝廷の説教師となさんとすと、彼れ直に走て夫人に告げ、真神の教導の驚くべきを示す」（第四巻、三三九頁）。原題は、「GIVE TO THE WINDS THY FEARS」で、作者はドイツのルター派神学者・讃美歌詩人 Paul Gerhardt（一六〇七―一六七六年）。

吼よ夜の風（ヘンリー、キルク、ホワイト）

吼よ夜の風、汝の力を合せよ
　神の大命なしに
汝は山の松の樹に
　雀のねぐらを乱す能わず

（『愛吟』、第四巻、三四〇頁）

○本訳詩には、以下のような註が付されている。「余は未だ多く此青年詩人（彼は二十一歳を一期として逝けり）の作を読まず、然れど簡短なる彼の伝記と此一小篇とは彼をして余の永久の友人たらしめたり、是れ馬太伝第十章二十九節に於ける／二羽の雀は一銭にて售に非ずや然るに爾等の父の許なくば其一羽も地に隕ること有じ／との基督の言を歌ひし者なり、彼れホワイト少時より懐疑の風に襲はれ、信仰上彼の立脚の地を失はんとせし時此述懐あり大に安寧を得たりと云ふ、哲理的に神を疑ひつゝ心霊的に彼に頼るの状を綴りしものとしては余は他に未だ此の如きを識らず」（第四巻、三四〇頁）。原題は付されていない。作者は、イギリスの詩人 Henry Kirk White（一七八五―一八〇六年）。

美はしきジオン

天上の美はしきジオン
我の愛する美はしき城
真珠の如き美はしき門
神の在す美はしき宮
クラニオンに失せし者が　（路可伝三十三章二十三）
我が為に其門を開かん
　ジオンよ、美はしきジオンよ
　神の城なる美はしきジオンよ

光り輝く美はしき天国
白きを纏ふ美はしき天使
絶間なき美はしき歌
響き渡る美はしき琴

我も賛美の群にまじり
そこに救主の聖名をたゝえん
　ジオンよ、美はしきジオンよ
　神の城なる美はしきジオンよ

王キリストの美はしき帝座
天使の歌ふ美はしき歌、
漂流止んで美はしき休、
平和の充る美はしき家。
我が眼はそこにイエスを見ん
我は救主の家に急がん
　ジオンよ、美はしきジオンよ
　神の城なる美はしきジオンよ

（『愛吟』、第四巻、三四二―三四四頁）

○本訳詩には、作者名はなく、「無名氏」とも記されずに、註も付されていない。「Shion, Zion」は、「はじめはエルサレム南東部の丘をさした。エブスびとの要害であったのを、ダビデが占領して「ダビデの町」と名づけた。そして契約の箱がここに移され、祭壇がきずかれて以来、この丘はヤハウェの聖なる山と呼ばれるようになった」「エルサレムの町全体の呼び名としても、しばしば用いられる」「同じようにして〈シオンの娘〉とはエルサレムの市民のことである」（『聖書事典』、三二版、日本基督教団出版局、一九九一年、四七五頁）。原題は、「BEAUTIFUL ZION」。著者は、「アブラハムの信仰――希伯来書第十一章の研究」（『聖書之研究』一五九―一六一号、一九一三（大正二）年一〇月一〇日―一二月一〇日）の第一一章一四節「此く言ふは家郷を尋ぬる事を表はす也」の注解のなかで、「ホーム（家郷）」を見出した喜びとして、第三連「王キリストの美はしき宝座」から「神の城なる美はしきジオンよ」を「『愛吟』より」として引用している（第二〇巻、一三〇―一三一頁）。

世々の岩なる神よ（詩篇九十編に依る）（エドワード、エイチ、ビカステス）

世々の岩なる神よ
　爾はとこしなへに
　　我の安き隠家なりき
天地の始より
　今も尚ほ同じ
　　世は終るとも
　　変わらざる君よ

我の命は小山の面に
　映りて消ゆる影の如し
或は牧場の朝の露に
　　咲きて直ぐ散る花の如し
寝る間の夢、旅人の
　一夜語りの話種
うつろひ易き花衣の
　失せて迹なき栄なり

寝ることなき我神
　虧ることなき光
我歳月の尽る前に
　我の命数を悟らしめよ

爾の矜恤を垂れ
　爾の慈愛を降し
爾の常に恵み給ひにし
此心をして淋しからざらしめよ

（『愛吟』、第四巻、三四四―三四六頁）

○本訳詩の原詩は、「O GOD, THE ROCK OF AGES.」で、最後に「Rev. Edward H. Bickersteth.」と記されている。作者は、Edward Henry Bickersteth（一八二五―一九〇六年）。イングランド国教会の司教で、讃美歌を編集した詩人。本訳詩の原文には、「（詩篇九十編に依る）」（詩篇九〇篇は、「神の人モーセの祈禱」）はなく、訳詩に著者が付記したものである。

涙（ブラウニング夫人）

神に謝せよ、神を祝せよ、
汝泣くより以上の苦痛を感ぜざる者よ、
泣くは善し、是れ軽き苦痛なり、
アダム楽園を遂はれし以来
是より軽き苦痛あるなし。
涙？　涙何物ぞ？
母の守歌聞きながら嬰児は籃の中に泣く、
祝儀の鐘の響く時涙に咽ぶ花嫁子、
天の美想の降る時詩人の頰に垂る雫、
神に謝せよ、汝たゞ泣く者よ、
若し涙に暗みて汝の墓を覓めつゝ
荒野に独り遑ふ時
天上を仰ぎ見よ、湛へる涙は河となりて、
擡げし汝の面を下り、
天に輝く日と星とは、
清き汝の眼に映らん、

（『愛吟』、第四巻、三四八―三四九頁）

○本訳詩の作者は、「万物悉く可なり」の作者Robert Browningの夫人で、イギリスの詩人Elizabeth Barrett Browning（一八〇六―一八六一年）。原題は、「TEARS.」。

更に高き信仰（ジエームス、バッカム）

嗚呼神よ、悲惨の道は
　余が爾に到るの経路なりき
而して今も尚ほ暗黒の裏に在て
　余は目を閉て惟爾に従ふ
幽陰日光単に爾の聖旨に任す
悲喜哀楽唯爾の命に従はん
　爾の大図に則りて
　余の生涯は聖ならざるを得ず

（『愛吟』、第四巻、三五一―三五二頁）

○本訳詩の原題は「THE HIGHER FAITH.」、作者はJames Buckham。

春の日は琥珀の光を放ち（ブライアント）

春の日は琥珀の光を放ち
　若芽発く木と真草を輝す
春にも優る笑を以て
　萌る青葉を迎へし者は
　　今は彼女の墓にあり
　　彼女の墓の底にあり

嬋妍なる白き花は
　森の小径に添ふて咲く
花にも優る手を以て
　そを摘み取りし手弱女は
　　今は彼女の墓にあり
　　彼女の墓の底にあり

茂れる森に朝早く
　小鳥群り謡ふ時
鳥にも優る声を以て
　我にその音を伝へ来し
　　彼女は今は墓にあり
　　彼女の墓の底にあり

はやき頃のその音に
　我が眼に浮ぶ血の涙
張り裂くばかり我が胸に
花咲く毎に思出る
　彼女は今は墓にあり
　　彼女の墓の底にあり

（『愛吟』、第四巻、三五二―三五三頁）

○本訳詩の原題は、「"THE MAY SUN SHEDS AN AMBER LIHGT."」で、作者はWilliam Cullen Bryant。ブライアントについては、著者は「米国詩人」（『福音新報』一〇九号、一八九七年七月三〇日）のなかで、重要な詩人として取り上げている（前掲詩、参照）。また、『月曜講演』（警醒社書店、一八九八年）の第三章「米国詩人」では、次のように記している。「ブライアント米国の平原を歌へる事あり。此はデンバーよりミスシツピイまで急行瀛車にて二昼夜を費さゞる可らざる平原にして、野犬、蛇、梟の共に棲めるを見るの外、更に目を歓ばし、耳を楽しましむる風光なし、ウオルヅウオルスを携へ来りて此風景に対せしめば、其の無風流なるに厭きて一日も留まる事を喜ばざるべしと思はる。然るにブライアントは此の一目千里、雲煙渺茫たる平原を歌ふて曰く、『漠々涯なき天空に適はしき床なり』と。三十六峰に月の懸かれるを喜ぶ風流詩人の夢にだも見る能はざる奇想に非ずや」（第五巻、三六一―三六二頁）。著者のこの部分については、亀井俊介『アメリカ文学史講義』（南雲堂、一九九七年）第一巻の「3アメリカ詩の発展」でふれている（一四七頁）。

志望（マリヤン、エバンス婦「ジョージ、エリオット」）

我も夫の純潔の域に達し
憂に沈む者の力の盃となり
熱き情を伝へ、清き愛を授け
悪意を交へざる微笑を咲かせ

至る所に温良の香を放ち
放て益々心に芳からんことを
斯くて世に喜の音を奏する
天上の楽に我も和せん事を

（『愛吟』、第四巻、三五四頁）

○本訳詩の原題は「A WISH.」で、作者はGeorge Elliot。本訳詩は、「雨中閑話」（『新希望』六五号、一九〇五（明治三八）年七月一〇日、第一三巻、二一五―二一六頁）にも再録されている。

汝の友（「インヂヤナポリス、ジヤアーナル」の載する処）

汝の友は覓めずして汝に来るべし、
世に彼の愛を購ふの価あるなし、
汝は一見して彼の汝の友たるを識るを得べし、
汝は直に心を開放して彼と共に語るを得べし、
健気に彼を迎へよ、善く彼を愛せよ、
篤く彼を信ぜよ、永久に彼に任せよ、
真正の友は只一回汝の生路に来る。

（『愛吟』、第四巻、三五四―三五五頁）

○本訳詩の原題は、「THY FRIEND.」。冒頭に、「From *Indianapolis Journal.*」と記されている。

偉大なる人（アデレイド、プロクトル夫人）

愛の為に至誠の心を以て
惜まず与ふる人は大なり
然れど愛の為に、臆せず物を受くる人は
　更に大なる人と称へん
我は自由に大過を赦す
　気高き人の前に平伏す
然れど赦されて、能く其責に堪ふる人は
　更に気高き人と称へん

（『愛吟』、第四巻、三五五―三五六頁）

○本訳詩には、以下のような註が付されている。「天の与ふるを取らざる者は却て其咎を受く」。本訳詩の原題は、「GREAT.」で、作者はAdelaide A. Proctor。

我の要むるもの

円満無謬の哲理に非ず
森厳偉大の教義に非ず
山なすばかりの富に非ず
誘ふ笑の力に非ず
亦鋭利の筆に非ず
　人なり

（『愛吟』、第四巻、三五六頁）

○本訳詩の原題は、「WANTED.」で、作者名は記されていない。

善き術

此世は実に憂き世なり
　人の好意に合ふ難し
巧に鼓弓弾く人は
　笛吹く人の邪魔をなす

我の度々思ふには
　如何に此世は喜きぞかし
若しも我知る人毎に
　我の心を受くるならば

然れど此事叶はねば
　世を経る我の善き術は
人の言ふ事気に留めで
　義務のまゝをなすにあり

（『愛吟』、第四巻、三六四―三六五頁）

○本訳詩の原題は、「THE BEST WAY.」で、訳詩には「よむ人しらず」と記されている。

四　短歌・解題

【短歌】

春の日に栄の花の衣きて
　心うれしく帰る故郷
（「妻の柩を送りて詠める」『基督教新聞』四〇五号、一八九一（明治二四）年五月一日、第一巻、一九五頁）

○著者は、三年間におよぶ流竄のような渡米後、アマスト大学で贖罪の回心を体験したあと、「二つのJ」（JesusとJapan）に生きること、日本を新キリスト教国にする夢を抱いて帰国するが、その前途に立ち塞がったのが一八九一（明治二四）年一月九日、第一高等中学校嘱託教員として、教育勅語奉読式での「奉拝」の問題で、それは教員、学生、社会、ジャーナリズムから非難を受ける「不敬事件」へと発展した。その心痛、疲労のなかで、妻かずも夫同様に病気となり、三カ月後の四月一九日死去するに至る。結婚生活は、わずか一年九カ月であった。死の五日前に洗礼を受けた妻に、著者はこの歌を送ったのである（「如何なれば艱難にをる者に光を賜ひ」、解題、参照）。

三芳野の花は昔に変はらねど
　いと朽ち果てし大和魂
（「三芳野の…」『世界之日本』一八号、一八九七（明治三〇）年八月一日、第五巻、八頁）

○「胆汁余滴」と題して、「平和好きの民」から「吉野参詣」まで、六つの見出しをつけて時勢に対する批評を述べ、そのなかの隣室から聞こえた「安眠妨害の理を弁へず」夜半まで語る「金儲け問題」に耳をそばだて、「是を聞きし余の愛国心は全く冷却したれば、余は一首の歌を宿坊に止め置き、翌朝早々山を下れり」と記し、本短歌で全体の文章を結んでいる。

来て見んと我を待ちしか梅の花
　弥生の枝に香をば留めて
（「来て見ん…」『東京独立雑誌』二七号、一八九九（明治三二）年四月五日、第七巻、一二頁）

○本短歌は、「近県歩行」のなかに収められている。この文章は、「偶には郊外の空気を呼吸するも思想養成の為めの利益ならんと思ひ、彼岸の中日と申すに社員一名と共に近県歩行に出かけぬ」（第七巻、九頁）と、川崎、横浜と歩く。能見山、八景、杉田の梅林、妙法寺内の良木を見て、「余りに嘻しかりければ、左の悪歌一首を賦しぬ」（同、一二頁）。

いたづらに過ごす月日は多けれど
　花見て暮らす時ぞすくなき

（「いたづらに…」『東京独立雑誌』四〇―四二号、一八九九（明治三三）年八月一五日、二五日、九月五日、第七巻、二二四頁）

三年経し心の傷は癒えやらで
　花咲く毎に痛みつるかな

（「三年経し…」、同前、第七巻、二二四頁）

○「過去の夏」と題して、「上州の夏」「北海道の夏」「米国の夏」からなる「実験録」に、故郷「上州の夏」の冒頭に、「人生五十、多くは是れ悲惨歎痛の経歴談、渺茫たる砂漠に点々の青所を認むるのみ」（第七巻、二二四頁）という文章とともに、この二首が記されている。

なき人の煙となりし夕より
　いとなつかしき塩竈の浦

（「なき人の…」『宗教座談』、東京独立雑誌社、一九〇〇（明治三三）年、第八巻、一七二頁）

○『宗教座談』は、著者による講話である。冒頭、「口啓き」が置かれ、著者は以下のように述べている。「私は教師でも牧師でも神学者でも何んでもありません、私は唯の普通の信者であります、（中略）私は私の信仰有の儘を御話し致そうと思ふのであります」（第八巻、一一七頁）。本書は、第一回「教会の事」から「天国の事」まで一〇回で構成されている。その第七回「復活の事」のなかに、復活を信じない人と信じる人の死について、本短歌が対比されて引用されている。本短歌は、「是は復活を信じない人の其夫を荼毘に附した後の感でありました」（同、一七二頁）と記し、次に「妻の柩を送りて詠める」の短歌を置き、「是は即ち復活を信ずる者が其妻を春の日に城北の青山に葬りし時に彼女の心も斯くありしならんと独り唱へし詞であります、復活を信ずると信ぜざるとに依て人々の生涯は非常に違つて来ます」（同、一七二―一七三頁）。

寒風に蕾綻びかぬるとき
　花も見頃の花にぞありける

（「花を見て感あり」『聖書之研究』六三号、一九〇五（明治三八）年四月二〇日、第一三巻、一三四頁）

○本短歌は、日露戦争中に、『聖書之研究』が『新希望』に改題する最後の六三号の冒頭にある「所感」に、「不自由な身」「聖書と科学の調和」などの短文のあとに置かれた「『聖書之研究』の名と別る」の次に記されている。「『聖書之研究』の名と別る」には、五年間の『聖書之研究』を経て、新誌名に改めるにあたって、「余は汝の名を愛するも汝の光輝の下に永く安静を貪るを好まず、余は今より更らに暗中に入りて暗中の物を探り来らんと欲す」（第一三巻、一三四頁）と書き、以下のように結んでいる。「余は今汝の名を去るべし、然れども余は終生汝の実を離れざるべし、『新希望』は汝の変名なり、即ち汝の粋を歌ふ者なり、誰か汝の実を去りて其身安からん、聖書の研究は余が余の墓に下る時まで続けらるべし、余は再び俗文学に帰らざるべし、余は今汝と別かるゝに及んで神の聖前に此事を汝に誓ふ」（同前）。そのあと「花を見て感あり」と題名を付し、『新希望』への思いを込めて、本短歌が詠まれている。『新希望』は、七五号から題名を『聖書之研究』に復するのである。

雪の間を病の床に打臥して
　覚むれば嬉し愛の春雨

（「病後の歓喜」『新希望』七三号、一九〇六（明治三九）年三月一〇日、第一四巻、五五頁）

○「病後の歓喜」の題名のあと、「明治三十九年冬病に罹り、其癒ゆるや我が信仰に一大進歩のありしを覚りければ喜んで詠める」と記し、本短歌が掲載され、『信仰日記』に再録されている。著者は、「無為の五週間」（『新希望』、同号）に、「余は病のために五週間の長日月を無為の間に過ごせり」（第一四巻、五〇頁）と書いたように、一カ月以上病気となり、友人医師、教友から多くの愛を受け取り、こう文章を結んでいる。「無為の五週間はまた黙示の五週間なりき、余は病癒えて後に目に天国を見しの感を懐けり」（同前）。この短歌も、同誌の載った詩「春は来りつゝある」とともに、病気回復後の「愛の春雨」を感じる喜びを詠んでいる。

思ひやる姥捨山の秋の月
　千曲の岸の実いかにと

（〔思ひやる…〕『聖書之研究』八一号、一九〇六（明治三九）年一一月一〇日、第一四巻、三五六頁）

紅葉せる妙義の山の秋の暮
　鳥鳴く下の祈禱忘るな

（〔紅葉せる…〕、同前、第一四巻、三五八―三五九頁）

○秋が半ば過ぎた頃、角筈を出て秋の伝道へと行く。一〇月一二日宇都宮、一三日岩代国本宮町、一四日磐井の清水、一六日信州へ、一七日小諸懐古園、「友人何某」（小山英助）から頼まれ、旧作「〔思ひやる…〕」を揮毫し、一九日には磯部に至り、そこで同行した「越後なる余の教友」（木村孝三郎）と別れ、東京に帰り、「〔紅葉せる…〕」を書き送る。

我家の庭の白百合花散りてより
　一層淋し秋の夕暮

（「今年の秋」『聖書之研究』一四八号、一九一二（大正元）年一一月一〇日、第一九巻、二七三頁）

○本短歌は、ルツの死去したその年の秋に、「艦隊として見たる新約聖書（札幌講演の一節）」のあとに、「今年の秋」と題して掲載されている。著者は、一〇月一一日から二〇日まで札幌伝道を行い、札幌独立基督教会などで講演を行った。「庭の白百合花」は、娘ルツのことでもある。

我心はりまが灘や茅渟の海
　めぐみに光る淡路しま山

（〔我心はりまが灘や…〕『聖書之研究』一四九号、一九一二（大正元）年一二月一〇日、第一九巻、三一五頁）

○本短歌の前には、「津山よりの帰途明石なる人丸神社の丘上より海を隔て、淡路島を眺めて詠める」と記されている。一九一二（大正元）年一一月一五日から一七日、津山で聖書講演会を開催し、帰途、明石、京都、静岡に寄った。

杖を曳き垂る穂の圃の畔道に
　天国を偲ぶ秋の夕暮

（「秋日曳杖」『聖書之研究』一五九号、一九一三（大正二）年一〇月一〇日、第二〇巻、一五二頁）

○本短歌「秋日曳杖」は、「盛岡　賤が女」の「秋夜讀書」と題された「心あへる友とかたらふ百時も比ふべきかは聖書よむとき」と対になるように掲載された。二つの短歌は、「猶太の農業（下）」（研究生編）のあとに収められている（四九頁）。「柏木生」の署名による「市外生活」（『聖書之研究』一六〇号、一九一三（大正二）年一一月一〇日）という、以

下のように始まる短文がある。「余は東京に居る、市外に居る、市内に居らない、余の家に接して畑がある、一町以内に幽らき森がある、森を超ゆれば稲田の谷がある、丘がある、小川がある、富士は西に筑波は東に高く見へる」（第二〇巻、一七四頁）。森を超えた稲田の谷の実りの風景は、「天国を偲ぶ秋の夕暮」なのである。

其一
霜枯に錦繡は消えて男体山
常葉に添ふて積る初雪

其二
仰ぎ見る裏見が滝の川下に
天より落る白雪の滝

（「晩秋日光山中の探勝」『聖書之研究』一六〇号、一九一三（大正二）年一一月一〇日、第二〇巻、一七六頁）

○本短歌「晩秋日光山中の探勝」「其一、二」は、最後の頁に、「曳杖生」の署名で掲載された。合わせて、一〇月二八日献堂式の行われた今井館附属柏木聖書講堂での「聖書講演公開」の一二月分の演目「馬太傳第一、第二章の研究」の予告が載っている。著者は、晩秋の日光山中の「常葉に添ふて積る初雪」に、裏見の瀧の川下に落ちる「白雪の滝」の風景に、「天国」を想う。

彩れる榎、椋、楢、楓、
かぎりなき野を覆ふ蒼穹

（「関東平原の小春」『聖書之研究』一六一号、一九一三（大正二）年一二月一〇日、第二〇巻、一九二頁）

○「アブラハムの信仰（下）」のあとに、「関東平原の小春」と題して、「十一月十三日講堂の工事竣り、十一月分の雑誌出で、天気麗らかにして心静かなりければ詠める」と付記され、本短歌が掲載されている。「蒼穹」のもと、野にある「彩れる榎、椋、楢、楓」、これらは天然の無教会の教会である。

天地も揺ぐラッパの一声に
更生へるらむ春の曙

（テサロニケ前書四章十六節）

（「春の曙」『聖書之研究』一七七号、一九一五（大正四）年四月一〇日、第二一巻、二四八頁）

○本短歌は、冒頭の「信仰の時」という、以下のような文章のあと、「春の曙」と題して掲載された。「神は愛である、然し**彼**は今は愛で無いやうに見える、然し我等は**彼**は愛であると信ずる、而してキリストの顕はれ給はん時に**彼**が愛であることが明白になるのである、今は信仰の時である、待望の時である、忍耐の時である、愛ならざるが如くに見ゆる神を愛なりと信じて、其信念の実現を待望む時である、**主イエスよ速く臨り給へ**（黙示録廿二の廿）」（第二一巻、二四七頁）。短歌には、「（テサロニケ前書四章十六節）」と付記されているように、「それ主は、号令と御使の長の声と神のラッパと共に、みづから天より降り給はん。」（『文語訳新約聖書』）と、「信仰の時」の「ヨハネの黙示録」第二二章二〇節の「『然り、われ速やかに至らん』アァメン、主イエスよ、来りたまへ」を受けている。著者は、再臨の希望へと向かっていたのである。

箒川岸を彩る紅葉より
はるかに勝る聖書なるかな

（〔箒川岸を…〕『聖書之研究』一九六号、一九一六（大正五）年一一月一〇日、第二三巻、二八頁）

○本短歌は、「曳杖生」の署名で掲載された「今年の秋」（同号）の結びに収められている。「今年の秋」は、九年前の「秋酣なり」（前掲詩、参照）について顧みて、当時はルツもいた一家四人の生活を想い、「我心を歓ばすに清き少女の讃美歌があつた、年々歳々花は同じけれども年々歳々人は同じくない」（第二三巻、二七頁、以下同じ）。だが、今年の秋も恵みの秋で、「天国の光の愈々明かに我眼に映るを覚ゆ」「聖書一冊が尽きざる生命の泉である」、「今日まで臨りし幾多の秋の中で今年の秋は殊に楽しき秋である」（同、二八頁）と書き、この短歌を記している。

うちむらを困らせにけり野付牛
　えんが軽くて早速く足走り

（「北海道訪問日記」『聖書之研究』二一七―二一八号、一九一八（大正七）年八月一〇日、九月一〇日、第二四巻、三〇五頁）

蝦夷ケ島悪魔の子輩の手を脱れ
　神の栄に光る日を待つ

（同前、第二四巻、三〇六頁）

石狩や十勝の森林の跡絶えて
　残りし友の心貴し

（同前、第二四巻、三〇六頁）

○本短歌三首は、「北海道訪問日記」のなかに、日録とともに記されている。著者は、再臨運動のなか、六月二六日から七月二三日まで、北海道伝道を実施した。六月三〇日、札幌独立基督教会で「基督再臨の聖書的根拠」の講演を行い、以後、同教会で四回の講演を行う。七月八日は旭川、一二日は網走、一三日、一四日は野付牛、二〇日、二一日は函館で講演を行った。この間、著者は旧知の石狩川、教友との祈禱、天然のなかの逍遥などを行った。北見では、「〔遠軽に来い〕」、「〔往ない〕」、其問題を以て終日困しめられた、大切な演説は妨げられた、余は一首の歌を遺して匆々北見を去るに決した」（第二四巻、三〇五頁）と記し、「〔うちむらの…〕」とユーモアのある歌を詠んでいる。一八日、軍艦用巨砲所が建設されて、悪魔が誇る繁盛のなかにある室蘭に到り、「〔蝦夷ケ島…〕」を詠む。二〇日、明治一〇年札幌農学校へ入った秋から四一年、「薬師山の麓より北面して遥かに思想を北海全道に馳せて一首の歌を禁じ得なかつた」（同、三〇六頁）と書き、「〔石狩や…〕」の短歌を日録に残している。

人の子の智慧も才能もなにかせん
　神を棄れば死ぬばかりなり。

（「背教者としての有島武郎氏」『万朝報』一九二三（大正一二）年七月一九日―二一日、第二七巻、五三一頁）

○著者がキリスト教を伝えた一人に、有島武郎（一八七八―一九二三年）がいる。彼は札幌農学校に入学し、キリスト教の感化を受け、札幌独立基督教会にも入退会するが、最後は女性記者とともに、一九二三（大正一二）年六月九日、四五歳で自ら死を選んだ。著者は、「背教者としての有島武郎氏」を、以下のように書きはじめている。「私は有島君に基督教を伝へた者の一人である。彼は一時は誠実熱心なる基督信者であつた。私は彼の顔に天国の希望が輝いて居た時を知つて居る。（中略）有島君はたしかに一度は、信仰のエデンの園に神と共に歩んだ人であつた」（第二七巻、五二六頁）。以下、次のようにつづけている。明治四一年、札幌で会ったときには、彼は別人となり、ペシミストとしてすでに

信仰者ではなく、小説も楽園を失ったアダムの楽園回復の努力の試みであることは疑うことができない、と。第三回目には、次のように記した。「有島君に大なる苦悶があつた。此苦悶があつたらばこそ彼は自殺したのである。そして此苦悶は一婦人の愛を得んと欲する苦悶ではなかつた　此は哲学者の称するコスミツクソロー（宇宙の苦悶）であつた。有島君の棄教の結果として、彼の心中深き所に大なる空虚が出来た。彼は此空虚を充すべく苦心した」（同、五二九―五三〇頁）。「コスミツクソロー」（宇宙の苦悶）は、作家有島武郎の苦悩の根源であった。本短歌で、「背教者としての有島武郎氏」を結んでいる。

身を浚ふ誘惑の浪は荒くとも
　頼む誓約の磐は動がじ。

（「誘惑に勝つの途」『聖書之研究』二八四号、一九二四（大正一三）年三月一〇日、第二八巻、一九三頁）

○本短歌は、「誘惑に勝つの途」の最後に掲載されている。「（去年八月廿六日軽井沢に於て）」と付記された「誘惑に勝つの途」は、ヤコブ書第一章一三、一四節の引用のあと、次のように始まっている。「人は何人も誘惑に遇ひます、そして之に勝つと負けるとに由て彼の運命は定まります」（第二八巻、一八八頁）。以後、誘惑は、霊に対する肉、義に対する美、道徳に対する快楽、未来に対する現在、高き者に対する低き者の要求であり、「私共は世に勝ち給ひし者を主として仰ぎますが故に安心であります」（同、一九三頁）と述べ、この短歌で文章を結んでいる。

我国は天山以東揚子江
　秋津島根を濤洗ふまで。

（「支那と日本」『聖書之研究』二八五号、一九二四（大正一三）年四月一〇日、第二八巻、一九九頁）

○本短歌は、『聖書之研究』二八五号の冒頭に置かれた「CHINA AND JAPAN. 支那と日本」のなかに収められている。「地理学的に観て支那と日本とは一国を形成する。後者は太平洋に見張する前者の前哨である。二者の関係は幹が枝に対する関係である。…」と記し、この短歌で文章を結んでいる。

百年の半ばを共に過し来て
　うれし涙に咽ぶけふかな。

（「百年の…」『聖書之研究』三一八号、一九二七（昭和二）年一月一〇日、第三〇巻、二〇八頁）

○本短歌は、「岩崎行親君と私」の最後に記されている。この文章については、一九二六（大正一五）年一一月一八日付日記に、以下のように述べられている。「同窓同級の友なる麑島第七高等学校前校長岩崎行親君が来る二十三日古稀の齢に達するので祝賀の会が催さるゝ由に就き、自分も麑島まで往いて之に列席せんと思ひしが、健康と仕事とが之を許さず、依て今日演説の原稿を草して同君の許に送つた」（第三五巻、一一九頁）。「岩崎行親君」とは、一八七六（明治九）年、大学予備門の「最高級」でアメリカ人スコット（Marion McCarrell Scott、一八四三―一九二二年）からともに教育を受け、札幌農学校でも青年時代の四年を過ごした。以後、五〇年、「死して死なざるものは正義に由て生きた生涯であります」（第三〇巻、二〇七頁）と述べ、この一首で「演説」を結んでいる。

現世の闇を破りて照出る
　義の太陽を仰ぐ今日かな

（〔現世の…〕『聖書之研究』三五四号、一九三〇（昭和五）年一月一〇日、第三二巻、二九四頁）

○一九三〇（昭和五）年三月二八日の死の三カ月前、「ヨハネの黙示録」第二一章一、五節の「我れ新らしき天と地を見たり……」（第三二巻、二八九頁）を冒頭に掲げ、「アーメン主イエスよ**来り**給へ」（同、二九三頁）などと述べた「新年の希望」の最後に記された一首である。

【短歌・日記】

来り観よ那須野ケ原の夏の月
深青玉の海に浮ぶ神鏡

（〔来り観よ…〕「日記」一九一九（大正八）年八月五日、第三三巻、一四二頁）

○昨夜来の暴風、朝八時に夫婦で那須へ向かう。宇都宮で下車、三時黒磯、四時過ぎ那須に着く。空気清涼で、東京とは別世界、夜は空が晴れ、濃藍色の蒼穹に半月が懸り、星々は碧玉に金剛石をちりばめたように見える。「神の宇宙は元来斯の如き者である」（第三三巻、一四二頁、以下日記の日付、全集収録巻、頁数が同一の場合には、巻数、頁数を略）。

喜びも悲しみもみな恵かな、ふみ来し道の跡見返れば。

（〔喜びも悲しみも…〕「日記」一九二〇（大正九）年一月一日、第三三巻、一九五頁）

我が前に置かれし栄え望みつゝ、ふみ来し道を見返りもせず。

（〔我が前に…〕、同前、第三三巻、一九五頁）

○日記には、「気持好きは主の再臨を信ずる聖書学者達の人生観である」「余の信仰は内省でもなければ悔改でもない、唯感謝と希望である」と記している。本短歌二首は、「或る旧き友人よりの年賀はがきに「直なるも曲るも己の心かな、ふみ来し道の跡見返れば」との一首を書加へられたれば、余は返歌として左の二首を彼に書送つた」。

聖書もていくたびか経し利根の橋
溢るめぐみ　ながれ尽きざれ

（〔聖書もて…〕「日記」一九二〇（大正九）年三月一九日、第三三巻、二二四頁）

○三月一八日、午後宇都宮に着き、市の旭館で演説会「改造と解放」を開き、翌日一〇時発の汽車で岐路につく。本短歌は、利根川を渡ったときの所感である。

我はたゞ寝覚の床に看護りする
人を神へと渡す桟。

（〔我はたゞ…〕「日記」一九二〇（大正九）年九月七日、第三三巻、二九〇頁）

木曾山の檜の柱基堅く
立ちし心霊の神の殿かな。

（〔木曾山の…〕、同前、第三三巻、二九〇頁）

○木曾上松の「松島縫治郎君」から「余等過日の彼地訪問」の礼状に、「恩師と遊びし霧の桟や寝覚の床よ夢心地する」「木曾山の檜の緑栄ふごと君が真心の永久に光栄あれ」の二首が書き添えられていた。「余は之を読んで歓喜の涙を禁じ得なかつた、依て左の返歌を送つて感謝の辞に

代えた」。

湯河原や賽の河原の赤ん坊
　寝るより外に為る事はなし
（〔湯河原や…〕「日記」一九二〇（大正九）年一一月一六日、第三三巻、三一六頁）

○一一月一五日、朝九時に家を出て、相州湯河原に湯治に行く。柑橘類の林が茂り、黄金色の果実が枝にむらがる。翌日、一〇年の疲労がでたように、終日を床で休み、東京の友人に本短歌を書き送る。

上り下り多き六十路の坂越えて
　初めて成りぬ幼な心に
（〔上り下り多き…〕「日記」一九二一（大正一〇）年一月一日、第三三巻、第三三三頁）

○今年で満六〇歳、還暦を迎える。「然し乍らキリストに在りて余は今日新たに生まれたのである、彼の十字架を仰いで余は日に日に新たに生まれつゝある」。

今頃は父の御園に讃美歌
　地上の万事善しと知りつゝ
（〔今頃は…〕「日記」一九二一（大正一〇）年一月五日、第三三巻、三三五頁）

○「在摂津蘆屋住友社員法学士黒崎幸吉夫人寿美子永眠の報に接して甚く悲んだ」。永眠の電報を手に、一首を書いて黒崎幸吉に送った。「然し永久に失ふたのではない、只暫時の別れである、今度は「先生」と言はれて彼女に迎へらるゝのである」。

泊るべき湊はたしか今日もまた
　世の海原の沖に主を待つ
（〔泊るべき…〕「日記」一九二一（大正一〇）年五月七日、第三三巻、三八〇頁）

○「而して日本の如き不信国に在りては信仰を維持する事が一大事業である」と書き、愛する古歌「泊るべき湊はいづこ今日もまた青海原の沖に漂ふ」のあと、字句を改めて本短歌を記している。

戦は一先づ止んで骨休め
　伊香保の山に鶯を聞く。
（〔戦は一先づ止んで…〕「日記」一九二一（大正一〇）年六月一五日、第三三巻、三九三頁）

故郷の山と川とに抱かれて
　眠りは安し母のふところ。
（〔故郷の山と川…〕、同前、第三三巻、三九四頁）

○六月一四日朝八時、雨のなか柏木を出て、高崎から伊香保へと来る。「上州は余の祖先の墳墓の地である。其山川は余の幼時を孚みし者である、榛名山の中腹に宿りて余の母に懐れて眠むるが如き気持がする」（第三三巻、三九三頁）。翌日、この二首を友人に絵はがきで送る。

火に怒る山も今年は和らぎて
　寝りは安し千ケ滝の里。

（〔火に怒る山も…〕「日記」一九二一（大正一〇）年七月六日、第三三巻、四〇一頁）

○浅間山麓、落葉松の繁る、休養地として信州沓掛千ヶ滝の地に来る。「此地に来りて第二の故郷に帰り来りしが如くに感ずる、左の一首の駄句を作りて東京の友人に送つた」。

霧凝りて露と滴る松ケ枝の
　下に彳む神の祈禱子

（〔霧凝りて…〕「日記」一九二一（大正一〇）年七月八日、第三三巻、四〇二頁）

○落葉松の下の祈禱を楽しみ、A・J・ゴルドンの聖書神言論に勇気づけられ、「聖書は神の言なりと云ふ方が神の言は聖書の内に在りと云ふよりも遥に深い見方である」と記している。

人は去り山は静に水清く
　聖書我手に独り天国

（〔人は去り…〕「日記」一九二一（大正一〇）年八月三一日、第三三巻、四二一頁）

○この年の一月一六日、ロマ書の講義を始める。七月六日から九月一五日までは、沓掛に滞在し、八月三一日、ジョン・ブラウン著『羅馬書註解』を読む。近くの清水の辺には、秋の雑草が咲き乱れている。

吹く風を勿来の関と祈るかな
　道践みはづす人多き世に

（〔吹く風を…〕「日記」一九二二（大正一一）年四月六日、第三四巻、三五頁）

○冒頭に、「花は桜、人は武士、而して桜は山桜に武者は古武士に限る、山桜に古武士が対する所に日本国のエッセンス（精）がある」と書き、源義家の「吹く風を勿来の関と思へども道も狭に散る山桜かな」の「名歌」を引いている。この日、朝五時に柏木を出て、沿線桜が満開のなか勿来の関に向かった。この「名歌」に対して、「我が花は人である、然り彼の信仰である」、「余も亦義家に倣ふて一首なき能はずである」と、本短歌を記している。

千曲川岸に湧出る岩清水
　世々に流れてにごり潔めよ

（〔千曲川岸に…〕「日記」一九二二（大正一一）年九月二日、第三四巻、八六頁）

○八月二一日から九月一四日まで、沓掛星野温泉に滞在する。八月二六日、二七日には、『聖書之研究』の読者会で講演する。九月二日、千曲川の激流に沿った奇巌絶壁の間に建てられた小諸町郊外にある、一二〇〇年前の布引山釈尊寺に遊ぶ。二〇年前の信州伝道を想う。「自分が曾て千曲川の沿岸に蒔きし福音の種も亦、今人は多くは之を棄てしと雖も、神の恩恵に由り何等かの形を以て千百年の後にまで存つて実を結ぶであらう」。

温かき足と冷たき頭にて
　聖書説かなん来る年にも。

（〔温かき足と…〕「日記」一九二二（大正一一）年一〇月二八日、

第三四巻、一〇六頁）

○日曜日ごとに聖書講演を聞く若き婦人から手編みの靴下が贈られる。本短歌で感謝の意を表した。翌日から聖書研究会で、「キリスト伝研究」を始める（一九二四年六月二二日まで）。

我子をば遠きコンゴの河辺に
　住むニグローの内に求めん。

（「我子をば…」「日記」一九二二（大正一一）年一〇月三〇日、第三四巻、一〇六頁）

○『米国地理学雑誌』一〇月号が届き、その「阿弗利加号」のタンガニカ湖上英独海戦記などを終日耽読する。「コンゴ河上流の沿岸に住む黒人の一基督者と成りし者に関する記事を読みては強く我意を惹かれざるを得なかった」。

メキシコやポポカテピテル、ソコヌスコ
　旗風高く揚がる十字架

（「メキシコや…」「日記」一九二二（大正一一）年一一月三日、第三四巻、一〇八頁）

○一一月三日、英国より帰朝した「好本督君」の訪問があり、「余の信仰の友の内より斯かる平信徒伝道者の起りし事を天父に感謝せざるを得ない」と書く。また、近日メキシコ国エスキントラに出立する「清水夫人サヘ子」とその三人の友人を招いて送別の夕飯をともにする。

我が友にやどる生命の結ぶ果の
　香はたかし沼沢の里。

（「我が友に…」「日記」一九二二（大正一一）年一一月一四日、第三四巻、一一二頁）

○ミルトンを読む日々のなか、山形県北村山郡東郷村沼沢生香園主「奥山吉治君」より、例年通りの林檎一箱が届く。「一首を賦して君の変らざる友誼に酬ゐた」。

ヘルモンの山を映して水鏡
　み教へ清しガリラヤの湖

（「ヘルモンの山を…」「日記」一九二二（大正一一）年一二月二〇日、三四巻、一二四頁）

○二五年間クリスマスを祝ってくれた友人が訪ねて来て、クリスマスプレゼントとともに、今年の「祝詞」を以下のように述べた。「願ふこの冬休に先生が御好みの御本か又は日本のガリラヤ湖畔の御逍遥費に当て給はらばと……」。この一首を贈って感謝を表したのである。

日に日にとかはる財の砂の山
　昨日の嶺は今日の瀬となる。

（「日に日にとかはる…」「日記」一九二三（大正一二）年六月二日、第三四巻、一八四頁）

○下野銀行の破綻を聞き、「一首を作りて彼地の教友に送つた」（第三四巻、一八三―一八四頁）。教友は、銀行業者であった。

西のうみ教の友の音づれに

我が霊魂は飛立ちにけり。

（〔西のうみ…〕「日記」一九二三（大正一二）年六月二日、第三四巻、一八四頁）

○宮崎県の読者より、世界伝道協賛会への寄附金に、以下のような二首が添えられていた。「見上ぐれば心にかゝる雲もなしたゞ眼にたゝふ熱き涙を。見下ぐれば心に満つる黒雲に迷ひに迷ふ憐れなる吾れ」。それに対して、一首送ったのである。

文明の音と光に騒ぐ世に
忍ケ岡の昔なつかし。

（〔文明の音と…〕「日記」一九二三（大正一二）年六月一二日、第三四巻、一八八頁）

○「耶利米亜記第二十九章十節以下の言を示されて慰安を得た」（第三四巻、一八七頁）と書き、夕方上野の杜と不忍の池に遊び、古き昔を偲んだが、四囲の電燈の眩さに嫌気を催すのである。

人の子の智慧も能力も何かあらん
神に叛けば死ぬばかりなり。

（〔人の子の…〕「日記」一九二三（大正一二）年七月八日、第三四巻、一九八頁）

○一カ月前の六月九日の有島武郎の自殺について、以下のように書いている。「氏は旧札幌農学校の卒業生にして、一時は札幌独立教会の熱心なる信者であつた。然るに中途にして信仰を棄、現代の日本に沢山にある背教文士の一人と成つた。自分に対して終りまで尊敬を持つて居て呉れたらしく、自分も亦終りまで氏の正直を愛し、背教後と雖も人としての尊敬を払ひつゝ来つた」（第三四巻、一九七―一九八頁）。また、今井館の聖会のときの讃美歌にふれ、「嗚呼もし有島君が我等と共に此讃美歌を歌ひ得しならば、君はあんな死方を為さなかつたであらうに！」（同前）。「背教者としての有島武郎氏」（『万朝報』一九二三年七月一九日―二一日）には、「人の子の智慧も才能もなにかせん神を棄れば死ぬばかりなり」（第二七巻、五三一頁）の短歌を掲載した（解題、参照）。

故国は悪魔の息に腐れたり
築け其地に神の聖国を。

（〔故国は悪魔の…〕「日記」一九二三（大正一二）年七月一二日、第三四巻、二〇〇頁）

○「久振りにてバビロン（東京市）に行いた。堪へられぬ程厭な所である。こんな所より自殺者が続々と出るは決して無理でない」と書き、それに対し、メキシコのエスペランザ農場（「エスペランザ」、参照）からの婦人の音信を紹介し、「一首を賦して彼女を励ましてやつた」。

三笠山人の心は狂ふとも
松風清くほとゝぎす鳴く。

（〔三笠山人の心は…〕「日記」一九二三（大正一二）年七月一四日、第三四巻、二〇一頁）

○軽井沢の友人から、早く来て、清き風や青き草で疲れた身体を癒すようにとの手紙が届き、「依て一首を送つて預め彼の地を清めて置いた」。

義務終へて独り心も軽井沢

鹿島の森に鶯をきく。

（義務終へて…）「日記」一九二三（大正一二）年七月二八日、第三四巻、二〇五頁）

○七月二〇日、午後軽井沢に来る。樅木の下の日陰で、カケスとウグイスの声を聞きつつ使徒行伝を研究する。パウロへの同情、「樅の青葉を通して碧空を眺めながら一首詠じた」。

縦し種は秋津島根に絶ゆるとも
戈壁ヒマラヤの裾に実らむ。

（縦し種は…）「日記」一九二四（大正一三）年二月一四日、第三四巻、二七八頁）

○世界地図を眺めながら、日本伝道は日本のためではなく、アジア大陸、世界のために行うことに気づく。「唯福音の種さへ播いて置けば、それが世界の何処かで実るのである」。

荒れ果つる武蔵の原に声揚げて
亜細亜の陸に聖教を説く。

（荒れ果つる…）「日記」一九二四（大正一三）年二月一六日、第三四巻、二七九頁）

○「今日も引続き亜細亜伝道に就いて考へた」と書かれ、感想をこの短歌に詠んでいる。

木曾山の同じ齢の老檜
共に守らむ神の聖殿を

（木曾山の同じ…）「日記」一九二四（大正一三）年二月二八日、第三四巻、二八四頁）

○「信仰は神に始まり神に依り神に終る。栄光はすべて神に帰すべきである」（第三四巻、二八三頁）と書いたあと、木曾の教友一団が改築する聖書講堂の門柱にと、檜丸太三本を汽車に積み込んだとの知らせが届く。教友の一人である「松島縫治郎君」は、「門柱樹齢約六十年」と題して、「木曾山の六十路を越えてもだしつゝ今日神の家の門守と立つ」という短歌を寄せ、本短歌はその返歌である。

暑さこそ厳しかれども心地好し
近代人の居らぬ東京

（暑さこそ…）「日記」一九二四（大正一三）年八月五日、第三四巻、三三五頁）

○「暑中の東京に善きものが随分ある」と書き、軽井沢に避暑に行く友人に送った一首である。

待望む恩恵の雨に潤ひて
万の人と祝ふ嬉しさ

（待望む…）「日記」一九二四（大正一三）年八月六日、第三四巻、三三六頁）

○慈雨。「降る雨を眺めつゝ歌心の我心に頻りに動くを覚ゆ」。

日に日にと廃れ行く世の状を見て
沈む心を興すみことば。

（〔日に日にと廃れ行く……〕「日記」一九二四（大正一三）年九月三〇日、第三四巻、三五六頁）

○京都建仁寺の若い女性僧侶の失恋による放火事件が報じられた。「有島事件に劣らざる風教上の大問題である。思へば内も外も真暗闇である。「新聞紙と聖書」と題して電車中で一首が成つた」のである。

行詰る騒がしき世に我心
いとも静けき歳の暮かな。
（〔行詰る…〕「日記」一九二四（大正一三）年一二月三一日、第三四巻、三九〇頁）

○大晦日、若い文学士の訪問を受け、ソクラテスとプラトンの比較を論じたあと、鸚鵡の世話、紙屑の焼却、石油ストーブの掃除、外国と国内へ一通ずつ手紙を書くなど、「実に静かなる歳の暮であつた」。

有難し縦し天地は消るとも
神の真理は動かざるとは。
（〔有難し…〕「日記」一九二五（大正一四）年五月一九日、第三四巻、四四一頁）

○午前はエレミヤ書、午後はT・K・アボットのカント伝を読む。「人の霊魂の宇宙の大よりも大なるを唱ふるカントの言を読んで、人として生まれし責任の如何に大なる乎を思はしめられた」。

近代人居らぬ皐月の軽井沢
忘れな草に森の鶯
（〔近代人居らぬ…〕「日記」一九二五（大正一四）年六月一〇日、第三四巻、四四八頁）

○六月九日から一一日まで、沓掛へ行く。一〇日は、宿の主人と軽井沢に遊ぶ。都会人の姿を見かけず、天然は高原を占領し、忘れな草が咲き誇る。

来て見れば昔しながらの花巻や
嘗き苺に友の真心
（〔来て見れば…〕「日記」一九二五（大正一四）年六月二七日、第三四巻、四五五頁）

○明治四四年以来の花巻訪問。朝四時、青森、七時間の汽車旅で陸中花巻着、教友の大歓迎を受ける。旧城内の斎藤宗次郎の苺畑で感謝祈禱会を開く。「終つて畑より直に摘取りし赤い、甘い、大粒の苺の豊かなる饗応に与つた」。

此夏はカント　ヘーゲル　使徒ヤコブ
福音はなれ道徳の道
（〔此夏は…〕「日記」一九二五（大正一四）年七月二四日、第三四巻、四六五頁）

○信州沓掛。七月一〇日『聖書之研究』三〇〇号の発行を終え、「三百号済んで浅間の骨休み」と口をついてでる。「今年の鎖夏のプログラムとして左の如くに定めた」として、この短歌を記している。

夏過ぎてカント　ヘーゲル何かあらん

頼るは旧き十字架の道

（「夏過ぎて…」「日記」一九二五（大正一四）年九月一〇日、第三四巻、四八一頁）

○九月一日、『ガリラヤの道』（警醒社書店）を刊行し、秋の仕事に取りかかる。本短歌は、「秋のプログラム」である。

神の座の平和の星は地に下りて
柏の里に花と咲きけり。

（「神の座の…」「日記」一九二五（大正一四）年一二月一二日、第三四巻、五一五頁）

○空の星を覗き、天文熱が蘇り、天文書を復読する。「然し興味の中心は家の赤ん坊〔孫〕に於てある。星と彼女とを咏み合せて左の如き者が出来た」（補記、筆者）。

カスピヤン　アラル　オクザス　シルダリヤ
砂の都の跡ぞ恋しき。

（「カスピヤン…」「日記」一九二六（大正一五）年三月三日、第三五巻、二五頁）

○三月五日、英文雑誌『The Japan Christian Intelligencer』（～一九二八年二月）を創刊する。三日、ロシア（ソビエト連邦）から帰国した「金井清君」が訪問し、ロシア革命後のロシアの実状と南露旅行談を聞く。「労農露国は人類の歴史に於ける未曾有の冒険的大試験である。多分遠からずして大失敗として終るであらう。然し一度は行つて見る価値のある試験である。共産党の誠意に対しては尊敬を払はざるを得ない」。

愛子を尻尾のはしと罵りて
責めねばならぬ親の苦しさ。

（「愛子を…」「日記」一九二六（大正一五）年六月一七日、第三五巻、六三頁）

○「東北を日本の尻尾」と罵りたりとて、東北の友人より小言が来た」。それに対する弁解である。

我家にをさなき者の生てより
天下の幼児は悉く我が孫として見ゆ。

（「我家に…」「日記」一九二六（大正一五）年九月二二日、第三五巻、九八頁）

○孫正子の第一回の誕生日、少額の金を保育者のない孤児のために鎌倉保育園に送る。「孫を愛するの愛は此国を善く為さんとするの努力に終らねばならぬ。是等の愛すべき幼児の為に善き国を遺して逝かねばならぬ」。

植さりし田面に秋の風吹きて
みどりは深し内の松ケ枝

（「植さりし…」「日記」一九二六（大正一五）年一〇月一六日、第三五巻、一〇八頁）

○ホリネス教会監督中田重治が訪れ、彼が作った、植村正久、田村直臣、松村介石、内村鑑三の「基督教界の四村」を読み込んだ、以下のような「大和歌一首」を紹介する。「植替は過ぎて田は刈りおさめられ松はみど

りに内は有福」（第三五巻、一〇七頁）。それに対する返歌である。

その霊は神の御国に安しとは
　知れども尽きぬ我涙かな
　（〔その霊は…〕「日記」一九二七（昭和二）年一月一二日、第三五巻、一四一―一四二頁）

○一月一二日は「ルツ子デー」で、彼女がこの世を去って「満十五年」。夫婦で、雑司ヶ谷の「再た会ふ日まで」の碑を訪れ、墓前で祈る。

梅が香に憂へは失せて身は軽く
　利根川渡る春の夕暮
　（〔梅が香に…〕「日記」一九二七（昭和二）年三月二一日、第三五巻、一六六頁）

○農商務省高等官に伴われて、友人一団と茨城県友部にある日本高等国民学校を訪れ、校長加藤完治の案内で視察したあと、常磐公園で梅花を観賞する。帰りに、「夕暮に利根川の鉄橋を渡りたれば一首を作つた」。

火と水と西の文化に荒れはてし
　園の昔の跡ぞ恋しき
　（〔火と水と…〕「日記」一九二七（昭和二）年四月七日、第三五巻、一七三頁）

○滋賀重昂（一八六三―一九二七年）の死を知り、悲しむとともに、家族の者に伴われて上野向島へと行く。上野の桜の花は見頃で、向島は荒れ果てていた。百花園を訪れると、洪水、震災、煤煙に禍いされている。「一首を園の主人に書置いて帰つた」。

香はしき我が故郷の音信に
　堅き心の融けし今日かな。
　（〔香はしき…〕「日記」一九二七（昭和二）年四月二六日、第三五巻、一八〇頁）

○北海道の信仰の姉妹が訪問し、心の暖かさに堅き心も融け、また北海道には熱き信仰の兄弟姉妹が少なからずいると聞かされて、以下のように記している。「信仰的に見たる北海道は日本の尻尾であるとの自分の悪口は茲に取り消さゞるを得ない」（第三五巻、一七九頁）。

我が家の天の使は舞ひ去りて
　祖父々々御飯と呼ぶ声はなし
　（〔我が家の…〕「日記」一九二七（昭和二）年八月二七日、第三五巻、二二五頁）

○七月二〇日から八月三一日まで、葉山に滞在する。朝食前に葉山別荘地を歩くが、大別荘を与えられるよりも、神の人イザヤの預言を解する方が遥かに幸福であると、案内をしてくれた「山桝船長」に語る。孫娘は、母と祖母に連れられて柏木に帰る。「老人一人海浜の借家に残され、復び元の哲学者に成つた」。

あれるなよ竜飛、白神、中の潮
　我がいとし孫海渡るなり。
　（「正子の北海道行を送る」「日記」一九二七（昭和二）年九月六日、第三五巻、二二九頁）

○息子祐之一家が札幌に向けて出発する。「小なる正子と別れるのが非常に厭であつた」「老夫婦は勿論のこと、女中家僕に至るまで此小なる霊魂の愛に牽かれた」。孫の「「正子の北海道行を送る」と題して左の一首が迸つた」のである。

空は澄み平野は遠し家安し
　思ふことなき北海の秋

（〔空は澄み…〕「日記」一九二七（昭和二）年一〇月一〇日、第三五巻、二四一頁）

孫去りて家は淋しくなりにけり
　いざ奮起せん東海の秋

（〔孫去りて…〕、同前、第三五巻、二四一頁）

○札幌の「嫁」から「思ふ事なき北海の秋」の句が届き、上の句を頼まれる、「依て目下の石狩平野に於ける彼女の楽しき新家庭を思ひやり、左の如くに作り直して返してやつた」。それに「孫去りて…」の一首を加えた。「こんな事で札幌柏木間の通信が賑つて居る」。

荷は重し我に代りて負ひ給ふ
　主ありと知れば我は恐れず。

（〔荷は重し…〕「日記」一九二七（昭和二）年一〇月一三日、第三五巻、二四二頁）

○淋しい秋の小雨の日。孫は北海道、甥は学校の遠足、姪は親戚へと泊まりに行き、「老夫婦二人」で、多くは語ることがない。「三谷民子女子明日女子学院校長として就任するとの事なれば彼女を励まし自分をも慰めんために左の一首を書き送つた」。

上は空、下は際なき太平洋
　カナダの原野指して我れ往く。

（〔上は空…〕「日記」一九二八（昭和三）年二月二七日、第三五巻、二九一頁）

オリオンの帯に引かるゝシリヤスを
　目標に渡る暗黒の淵。

（〔オリオンの…〕、同前、第三五巻、二九一頁）

アラスカやアリユート島を吹捲くる
　風に船舷打たせつゝ進む。

（〔アラスカや…〕、同前、第三五巻、二九一頁）

○若き信者の船員より、北太平洋上から、以下のような音信が届く。非常に寒く、風は激しく、波は山のごとくに高い。しかし、「私の魂は深く救主に錨を下して動きません、感謝の歌は常に上ります」。夜の空は壮大で美しく、オリオン星座は慰めを、シリウスとキャペラは希望を与えてくれます、と。「広い広い神の国に行く前に広い世界がある、有難い事である。三首が浮んだ」のである。

いとし孫摘み取る春の初花は
　昔しながらの我が友と知れ。

（「札幌の春を想ふて」「日記」一九二八（昭和三）年三月二五日、第三五巻、三〇一頁）

○午前、午後の講演に、合わせて三〇〇人以上集まる。春が訪れ、「札幌の春を想ふて」と題した一首を札幌の家族に送った。

忘るなよ黄金花咲くアメリカに
　無き故郷の大和心を
（〔忘るなよ…〕「日記」一九二八（昭和三）年五月二八日、第三五巻、三二四頁）

○「米国通信」に、宗教的趨勢について、以下のような記事があった。長老派九二九九教会中三二六九の教会で一人の悔改者がなく、バプテスト八七六五の教会の三四七四、メソジストの一六五八一の四六五一の教会も、一人の悔改者もなかった、と。「是れがもし二三十年続けば、米国に於て新教主義の教会は全滅である」「今日も米国某地に開かれし或る宗教大会に日本代表者として出席せる某婦人に左の一首を書き送つた」。

世の幸福に恩恵読みこむアメリカの
　をしへに我は厭き果にけり
（〔世の幸福に…〕「日記」一九二八（昭和三）年六月一八日、第三五巻、三三二頁）

○六月一七日の日記の最後に、「日本の危険は神の言の欠乏に在る。外国人宣教師に倚らざる基督教の宣伝は我国目下の最大要求である」（第三五巻、三三三頁）と書いた。朝、「床より躍り出づるや左の一首が口より迸つた」。就寝前には、カントの「倫理の基礎」を数頁読む。

日に日にと亡び行く世の状を見る
　心の痛み堪え難きかな
（〔日に日にと亡び行く…〕「日記」一九二八（昭和三）年六月二七日、第三五巻、三三五頁）

○世間の俗事に追われ、「無意義」な一日となる。「何人も生きんと欲して悶ゆ。「此世ながらの地獄」ではない、此世が実に地獄である」。子孫に「借金」を償わせる、それが「不信国」の運命である。

北の海野山いろどる桂花
　幹は天まで根は巌まで
（「桂子を迎ふ」「日記」一九二八（昭和三）年七月一三日、第三五巻、三四〇頁）

○札幌の息子夫婦から、「第二の孫女」が産まれた電報が来る。女子であれば「桂子」と名づけることに決めていたため、「桂子を迎ふ」と題した一首を「産褥の母」に書き贈った。北海道の名木である「かつら」は、幹は長く太く、花は「温雅」で、山野を彩り、「能く我家の理想を表はすものである」。

石狩の河を渡りて知りにけり
　蝦夷は開けて殺されにけり
（〔石狩の河を…〕「日記」一九二八（昭和三）年九月三日、第三五巻、三五九―三六〇頁）

○七月二五日、札幌に向かって出発し、二七日から九月二五日まで札幌伝道。この日、「旧友石狩河」を訪れた。昔の雄大な大河は泥の流れと変り、樹木は切り払われて「荒寥の状態」となり、「神が人類の良友として造り給ひし河流は人の罪悪に因り其讐敵に化した」。神を畏れず、天然を愛することのない開拓を想い、憤慨に満ちて家に帰った。

温き愛の褥に老いの身を
夜昼となく包む嬉しさ。
（〔温き愛の褥に…〕「日記」一九二八（昭和三）年一〇月二六日、第三五巻、三七八頁）

○九州のある「老姉妹」から真綿入りの布団一枚が届く。昨年から二枚目である。夜昼ともに用い、その「彼女の愛心に報ふべき何物をも持たざれば、左の一首を送りて我が心よりの感謝を表した」「世に名誉は色々あるが、貧しき友に斯く恵まるゝ名誉は又特別である」。

喜びを共にする人なき国に
独り歓ぶ福音の勝。
（〔喜びを共に…〕「日記」一九二八（昭和三）年一〇月一二日、第三五巻、三八四頁）

一日に酒と羅馬を葬りし
我が隣国の壮なる哉。
（〔一日に…〕、同前、第三五巻、三八四頁）

縦し身には不平数々ありとするも
世界は挙げて我が主義の国。
（〔縦し身には…〕、同前、第三五巻、三八四頁）

○一一月六日、アメリカの大統領選挙で共和党で、クエーカー教徒のハーバート・フーバーが大差で勝利した。「米国に於ける今回の共和党の大勝利が我が大なる喜び又慰めであつた」「彼等が投票箱に対する時に真剣真面目の民となる」。日記に、この三首を記した。

限りなき真理楽しむ老いの身の
生くる興味の絶ゆる暇なし
（〔限りなき…〕「日記」一九二八（昭和三）年一一月一七日、第三五巻、三八六頁）

○H・S・Cの『プラトー、カント比較』を数十頁読む。「如何なる大饗宴も之には優さるまいと思うた」。興味津々尽きざるを覚え、一首を詠んだ。

第五十回独り迎ふるクリスマス
楽しくもあり悲しくもあり。
（〔第五十回独り…〕「日記」一九二八（昭和三）年一二月二五日、第三五巻、四〇〇頁）

元日や先づ正ちやんと叫ぶ声
今年も去年と変ることなし
（〔元日や…〕、同前、第三五巻、四〇〇頁）

○「我が信仰生涯に於ける第五十回クリスマスである。（中略）人生、之を顧みれば詰らない事極まりなし。然れども前を望めば希望満々、栄光の主は我を待ち給ふ」。前号（『聖書之研究』三四一号）の「日々の生涯」における「二十五日」の「〔第五十回独り…〕」の短歌は、誤植のために訂正して掲載した。それに「今年の元旦」と題する一首を加えている。

我家の紋所なる藤の花
咲いて我が身の幸を知らする。
（〔我家の…〕「日記」一九二九（昭和四）年四月二八日、第三五巻、四四五―四四六頁）

○一月二日、逗子に静養のために滞在中、心臓の肥大を指摘された。四月八日、日本赤十字社病院で診察を受けて、心臓に大きな異常があるために療養生活に入る。講演も休む。「数年の間庭に植附けし藤が今年初めて花を持ち、九房咲いた。一首が浮んだ」。

山高し水清らかにして風涼し
　然れど及ばず孫の笑顔に。

（〔山高し…〕「日記」一九二九（昭和四）年七月二五日、第三五巻、四七七頁）

○「北海道に孫を見んと欲して能はず」、三年ぶりに信州浅間の沓掛に来る。「然しそんな弱音を吐いてはならない。我が生涯の最後の事業に取掛らねばならない」。

天地を劈くばかり鳴る神の
　あとは空井にかゝる明月

（〔天地を劈く…〕「日記」一九二九（昭和四）年八月二三日、第三五巻、四八八頁）

○七月二五日から九月一六日まで、信州浅間山の南麓の沓掛に滞在する。沓掛から遠からぬ上州富岡の信仰の友で、漢学者の住谷天来に、「高崎城を過ぎて」と題する「無声無韻の詩一首」（「光陰如矢七十年　世変時移今昔感　不棄上州武士魂　独拠聖書守福音」、第三五巻、四八八頁）を送ると、「本当の詩」が届く。「縦令一人たりとも武士魂を解し得る教会の牧師の我国に存在するを感謝する。序に「上州気質」と題する駄句を一首載す」。

浅間山麓の風は清けれど
　虻と蟻とに螫さる苦しさ。

（〔浅間山麓の…〕「日記」一九二九（昭和四）年八月二六日、第三五巻、四八九頁）

○浅間山麓は、すでに秋景色になる。外から見た天然は美しいが、その裏の昆虫界の生存競争は惨憺たるものがある。「蜘蛛、蟻、虻、蜂、蛾、蝶、蜻蛉、其他種々様々の虫類が互に相欺き、相殺し、相食むの状は実に地獄其物である」。人間世界も同様で、文明文化の表面を剝げば、悪、妬み、奪い、殺すなど、昆虫と多く変らない。日記を書きつつ、浅間蟻が足を刺す。「一首あり」。

パムパスの草より出て草に入る
　十字架星や我が生命なる。

（〔パムパスの…〕「日記」一九二九（昭和四）年一〇月二六日、第三五巻、五一一頁）

○南米アルゼンチン在住の読者「井出三郎君」より、以下のような書簡が届き、終日心が広がり、南米原野の住民となったように感じる。「先生に深き真理を教へらるゝ事二十年、小生の天への梯子は慥かに此Pamppaの平原に骨を埋める事であります」「自分共は静に祈と信仰で此旅路を過ぎ行く斗りである事が判明りまして感謝であります」。「一首浮んだ」。

雪国に孫見ることは叶はずも
　他国の児に貢ぐ嬉しさ

（〔雪国に…〕「日記」一九二九（昭和四）年一二月二七日、第三五

巻、五三三頁）

○床に就き休む。少し読書欲が起こり、カノン・リドンの『キリスト神性論』第二章を読むと、そこには博い知識と深い信仰がある。「札幌へ往きて孫を見る能はざる悲しみに対し、ドクトル・シユワイツエルの阿弗利加病院に送りし寄附金の礼状に接し、一首を禁じ得なかつた」。

限りなき生命賜はる我なれば
古稀も八十路も神のをさなご。

（〔限りなき…〕「日記」一九三〇（昭和五）年一月一日、第三五巻、五三七頁）

○元旦に札幌の息子夫婦に「第三の孫女」が産まれる。東京では、昨年一二月二二日には、塚本虎二が聖書研究会から独立し、畔上賢造の『日本聖書雑誌』が生れる。読者の年賀の辞「古稀の春迎へ給ひて若がへりも、の喜び重ねますらむ」に答えて、「自分も老人になつた者である」と書き、この一首を記している。

荒ぶ世の高浪たけく寄せ来るも
砕けて越えじ法度の巌を。

（〔荒ぶ世の…〕「日記」一九三〇（昭和五）年一月五日、第三五巻、五三八頁）

○今年の第一聖日、静養のなかで、石原兵永による礼拝説教が行われた。「石原に畔上の文才なく、塚本の博識はない、然し彼に強い福音的実験がある。そして其実験が彼をして前二者以上に有効なる自分の援助者たらしむるであらう」。「座古愛子女史」の年賀状に、「そゝりたつ磯の巌や動き無きやまと島根の姿なりけり」が記されて、それに対してヨブ記第三八章一〇、一一節から、「左の一首を駄句つて彼女に返した」。

内村は博く愛して博く知る
柾目正しき桂木の家

（〔内村は…〕「日記」一九三〇（昭和五）年一月七日、第三五巻、五三九頁）

○札幌の息子夫婦の三女に博子と命名したとの知らせがあった。「之を聞いて床中の老先生大いに元気づき、例の通り一首を駄句つた」。孫の第一女正子、二女桂子、三女博子を詠み込んでいる。

古稀など、情けなきこと言ひ給な
限りなき生命賜ふ身なれば

（〔古稀など、…〕「日記」一九三〇（昭和五）年一月一一日、第三五巻、五四一頁）

○古稀を祝する年賀状に、好意を謝しつつも、「七十は古来稀れなりと云ふは余り有難くない」と、「駄句一首彼等に酬いて言ふ」。「肉は古稀でも八十路でも、心は希望の神に在りて恒に青年である」。

後志や渡島津軽と急ぐなる
見舞の足の美はしきかな。

（〔後志や…〕「日記」一九三〇（昭和五）年一月二〇日、第三五巻、五四三頁）

○極めて少しではあるが、病は快方に向かう。「何か此上に一撃を加へら

るればそれで此世の万事終るのである」。多数の人が祈っているので、もう一度難関を切り抜けるであろう。札幌から愛する者が見舞いに来ると聞いて、この一首を詠む。

夜をこめて看護する友、身を以つて
　代らんとする僕、有難し。

（〔夜をこめて……〕「日記」一九三〇（昭和五）年一月二一日、第三五巻、五四三頁）

古稀の春病の床に打臥して
　更に大なる夢を見にけり。

（〔古稀の春…〕、同前、第三五巻、五四四頁）

○昨夜、「藤本重太郎君」不眠の看護を、「僕音吉」は隣室で祈っていてくれた。それは第一首「〔夜をこめて…〕」に詠まれた。「札幌よりの壮者来訪の途に在ると聞き万事一変した」。第二首「〔古稀の春…〕」には、その大きな喜びがある。

夜毎に襲来りし悪魔奴も
　壮者故に逃去りにけり。

（〔夜毎に…〕「日記」一九三〇（昭和五）年一月二二日、第三五巻、五四四頁）

○「早朝内村医博札幌より達す」。昨夜、澄尿が一〇〇〇グラムでて「一安心」である。

柏木に動揺ありと聞きしかど
　先生病みて愈々安泰。

（〔柏木に動揺あり…〕「日記」一九三〇（昭和五）年二月八日、第三五巻、五四八頁）

柏木にありしと聞きし動揺は
　ペンテコステのそれにてありけり。

（〔柏木にありし…〕、同前、第三五巻、五四八頁）

○近頃になく気分のよい日。柏木の平安の宿るところで、不安や動揺はほとんどないが、時々この世の「不安の子」が入り、「不安不安」と囁き、「本当の不安」を起すのである。「聖霊の在す所に真個の平安が在るのである。柏木はこの二三年何んとなく不安の所と化した。今や復び元の平安に帰りつゝある。有難い事である」。

到るべき都は遠し今日もまた
　忍ぶが岡に独り漂ふ

（〔到るべき…〕「日記」一九三〇（昭和五）年三月一八日、第三五巻、五六〇頁）

○病中にも歓喜がある。「何を学ばざる日はありとも、忍耐の美徳を学び得ざる日とてはない。病の床に在りて、此機会の充分に与へらるゝは、感謝すべきことである」。その三日後の日記には、「晴　引続き希望の内に在る」と記されている。二六日には、今井館で内村鑑三古稀感謝祝賀会が開かれる。その二日前、参加者への最期のメッセージを、息子祐之に託したのである（詩「〔秋は秋として善し〕」、解題、参照）。この短歌は、三月二八日の死の一〇日前に詠まれた最後の一首である。

五　解説

内村鑑三の信仰詩・訳詩・短歌と信仰宇宙（コスモス）——神の言（ことば）の交響楽

1　信仰詩

内村鑑三の信仰詩・訳詩・短歌には、神の言（ことば）や天然のきらめきを映す、霊的言語の片々が響き合い、相互に奏でる交響楽の世界がある。それは内村鑑三の聖書講解や注解、福音的著述とも共鳴する、キリスト教の信仰宇宙（コスモス）を形成しつつ、相互に影響し合い、移ろい変化している。それは宇宙、万物、人生、悉（ことごと）く可なり、あるいは、歓喜と希望の木霊（こだま）する世界でもある。

内村鑑三の死の四年前、一九二六（大正一五）年一一月三〇日の日記には、題名もなく、詩の形式もとらない「〔秋は秋として善し〕」（『聖書之研究』三一八号、一九二七（昭和二）年一月一〇日）という、次のような「詩」がある。

秋は秋として善し、冬は冬として善し。春は春として善し、夏は夏として善し。貧は貧として善し、富は富として善し。老は老として善し、若（にやく）は若として善し。神に依り頼みて如何（いか）なる時期も如何なる境遇も善からざるはなし。多分死は生丈（だけ）け善く、或（あるい）は生以上に善くあらん。(1)

秋は秋として、冬は冬、春は春、夏は夏として、この天然宇宙はすべて「善し」、また、この世にある人生は、貧は貧として、富は富、老は老、若は若としてすべて「善し」、まさに悉く可なりの世界である。それはイギリスの詩人ロバート・ブラウニングの訳詩「万物悉く可なり」（解題、参照）にもあらわれている。畢竟、死は生と同じだけ、あるいは生以上に「善く」、神に依り頼む、あらゆる人生の時期も境遇も、すべて「善からざるはなし」。

内村は、詩「楽しき生涯（韻なき紀律なき一片の真情）」（一八九六（明治二九）年）では、こう謳う。「我の詔（へうこう）ふべき人なし／我の組すべき党派なし／我の戴くべき僧侶なし／我の維持すべき爵位なし（中略）／感謝して日光を迎へ／感謝して麁膳（そぜん）に対し／感謝して天職を執り／感謝して眠に就く／生を得る何ぞ楽しき／讃歌絶ゆる間なし」（解題、参照）。これが内村鑑三の信仰詩の魂の宇宙なのである。

『聖書之研究』一六〇号（一九一三（大正二）年一一月一〇日）には、「人生」と題した、以下のような短い文章がある。「人生は楽しくある、甚（はなは）だ楽しくある、然り、然れども人生は短（みじ）かくある、甚だ短かくある、而（しか）して短かき此人生は死を以て終る、而して其中に死（し）に類したる、而して死よりも更らに苦しき多くの苦痛がある。／斯（か）くも短（みじ）かき且つ苦るしき人生の後に楽しくして窮（かぎ）りなく生命（いのち）が獲られないならば楽しき人生は決して楽しきものではない、永生に終らざる人生は実に享（う）くるの価値（ねうち）なきものである。(2)」。

人生は楽しく、だが人生は短く、死に類する、それ以上の多くの苦がある。その短く、悲嘆に満ちた人生に、永遠の生命が得られないとするならば、永生に終らない人生は、「享くるの価値なきものである」。旧約で喩えられた風の吹き去る籾殻のような人生とは、コーヘレスのいうように、「みな空であって風を捕えるようである」（「伝道の書」第一章一四節）のだろうか。「人は一生、暗やみと、悲しみと、多くの悩みと、病と、憤りの中にある」（同、第五章一七節）のか。

だが、人生には慰めがある。春夏秋冬にたくした「寒中の木の芽」（一八九六（明治二九）年）という詩がある。春の枝には花が、夏の枝には葉が、そして花が散り、実が失せたあとに芽が顕われる。「三、嗚呼憂に沈むものよ／嗚呼不幸をかこつものよ／嗚呼冀望の失せしものよ／春陽の期近し／四、春の枝に花あり／夏の枝に葉あり／秋の枝に果あり／冬の枝に慰あり」（解題、参照）。また、内村は、山上の垂訓の「祝福の辞」（第五章三、四節）を、次のように訳している。「（一）**福なり**心の貧き者は、天国は即ち其人の有なれば也。／（二）福なり哀む者は、其人は安慰を得べければ也。……」[3]と。「慰め」＝「安慰」は、福音から、愛から生まれている。

内村鑑三の生涯を概観するとき、明治という日本近代の歴史の転換点と困難のなかで、最初の若き結婚の破綻、流竄のような渡米、帰国後の宣教師との軋轢、教会への不信、不敬事件、二度目の結婚による妻の死、一九歳の愛娘ルツの死……、時代は日清・日露、世界大戦争と呼ばれた第一次世界大戦へ、昭和初期の動揺する社会へと、「苦しき多くの苦痛」とともにあったのである（略年譜、参照）。

もし、この人生が、その一回性の生が、それだけで終わるならば、「楽しき人生」とは果敢ない夢物語にすぎないであろう。だが、人の「後世への最大遺物」[4]としての固有の人生は、「来世」へ、「永生」へとつづくのである。「宗教の本領は来世である」（「来世獲得の必要」[5]）。旧約の「創世記」の楽園喪失（パラダイス・ロスト）は、そのまま新約とイエスの誕生と贖罪の十字架による楽園回復（パラダイス・リゲインド）への途であり、それは「ヨハネの黙示録」の楽園完成への希望、イエスの再臨の約束と信者の待望へ、永遠の現在を臨りつつあるイエスへとつながっていく[6]。

イギリスの詩人ワーズワースの「We are Seven」から影響を受けた「我等は四人である」（一九一二（明治四五）年）は、ルツの死の悲しみと再臨という「大いなる日」の待望を、再臨信仰をあらわしている。「然し我等は何時までも斯くあるのではない、／我等は後に又前の如く四人に成るのである、／神の菰の鳴り響く時、／寝れる者が皆な起き上る時、／主が再たび此地に臨り給ふ時、／新らしきエルサレムが天より降る時、／我等は再たび四人に成るのである」（解題、参照）。

また、再会を待望するルツの建碑には、「再た会ふ日まで」と刻まれている。内村は、詩「建碑」（一九一四（大正三）年）に、その想いをたくした。「武蔵野の真中、／女郎花の咲く所、／雑司ヶ谷の森に、／我がルツ子は眠る。（中略）残るは父母と弟、／静かに眠る地下の彼女、／祈る天上の祝福、／望む再会の歓喜」（解題、参照）。

死は再会への入口にして、「新らしきエルサレムが天より降る時」＝再臨（セカンド・カミング）は、未来社会の希望となる。

『聖書之研究』創刊号（一九〇〇年九月三〇日）の「宣言」に、主筆内村鑑三は、次のように記している。

聖書に曰く生命の水の河あり、其水澄く徹りて水晶の如し、神と羔の宝坐より出づ、河の左右に生命の樹あり、其樹の葉は万国の民を医すべしと、（黙示録廿三章一、二節）、余輩は天上天下此福音を除いて国民を医す者の他にあるを知らず、此誌豈今日に於て出でざるべけんや。[7]

神と羔の御座を水源とした、水晶のように透き通る生命の水の河――その左右の両岸には、元始の楽園エデンのように生命の樹が風に揺れ、その

繁る葉はすべての人を癒し、都の大路の真ん中を流れている。その生命の河は、この無教会の教会である天然宇宙を、社会を、人を、傷ついた魂を、木々を、路傍の草花のいのちを潤し、涸れることがない。それはまた、内村鑑三の信仰詩を静かに底流しているのである。

内村鑑三は、日本近代の戦争の影が蔽う社会に対しては、膨張国家へと向かう政治への批判詩「〔正義は口にあり〕」（一八九六（明治二九）年）や、日清戦争後、非戦論へとつながる「寡婦の除夜」（一八九六（明治二九）年）などで、苦しむ民と、悲しむ寡婦とともにいる。「正義は口にあり、／攻略は腹にあり、／義は名の為に求め、／名は利の為に貴ぶ。／身は党則に縛られて自由を唱へ、／心は利慾に駆られて愛国を叫ぶ、／衆愚の声に震へ、／寡婦の涙に動かず」（解題、参照）。「月清し、星白し、／霜深し、夜寒し、／家貧し、友尠し、／歳尽て人帰らず」（「寡婦の除夜」、解題、参照）。

生涯、二つの「J」（Jesus と Japan）に生きた内村鑑三には、いつもイエスがいた。「イエスを思ふて」（一九一二（明治四五・大正元）年）は、次のような詩である（解題、参照）。「イエスを思ふて我は」、その貧しきを悲しまず、富めるを羨まず、感謝溢れるのみ……「イエスを思ふて我は／身の患難も苦しからず／其の幸福も慕はしからず／イエスを思ふて我に／唯平康と満足とのみ有り。／イエスを思ふて我は／事の失敗に失望せず／其の成功に雀躍せず／イエスを思ふて我は／永久の勝利者たるなり」。イエスを信仰において思う人、それは「永久の勝利者たるなり」。

内村鑑三の信仰詩二一篇は、以下のようにまとめることができる。万物悉く可なりの世界を表現した「楽しき生涯」「新詠」「天地の花なる薔薇」、慰めと愛の存在を告げる「寒中の木の芽」「春は来たりつゝある」「春の到来」「秋酣なり」「二月中旬」「秋の夕べ」「〔秋は秋として善し〕」、社会への義憤となる「〔正義は口にあり〕」「寡婦の除夜」、神とイエスを讃える「陸中花巻の十二月廿日」「イエスを思ふて」「今年のクリスマス」、再臨信仰をあらわす「我等は四人である」「『某日某時』」「建碑」、天職を詠んだ「桶職」、希望を謳う「海」「エスペランザ」等、と。

それらは神の言の交響楽として、旧約一〇〇〇年の歴史へ、預言者たちへ、イエスとその時代の人々とユダヤの地へ、時と所を超えて響き合うとともに、神とともにある希望、福音を伝えているのである。[8]

2　訳詩

七〇篇近い英米独語などからの内村鑑三の訳詩は、文学の翻訳詩から、文語調の言語を磨いた「信仰訳詩」へ、信仰宇宙の表現へとその姿を変えている。札幌農学校時代から親しんだワーズワースの訳詩に、次のような「夕暮の歌」（Evening Ode）がある。

我が肩上の羽翼の動くを感ず、然れども我れ尚ほ此処に止て遠く望めば、
玲瓏たる階段の天にまで達して、之に到るの途を示すを見る。[9]

『聖書之研究』四五号（一九〇三（明治三六）年一〇月一五日）の「問答」のなかの「来世は有耶無耶」という文章で、来世に関するワーズワースの証明は晩年の「夕暮の歌」であるといい、原詩「Wings on my shoulder seem to play:/But, rooted here, I stand and gaze,/On those bright steps that heavenward raise/Their practicable way.」（第一一巻、四五三頁）を取り上げ、「天」に上る道が見えるかのように霊的な信仰訳をしている（解題、参照）。

内村にとって「詩人」とは、次のような人である。「詩人はポエテースなり、ポエテースは為人なり、事を為す人、是れ詩人たるなり、詩は風景を眺めて成らず、文を練て成らず、神を信じ、己に克ち、世に勝て成るなり、小説家を賤めよ、然れども詩人を賤むる勿れ、そは彼は夢る者に非ず

して、闘て勝つ者なればなり」（「詩人」、第一五巻、四五三頁）。その一人は、内村が渡米中に「エレミヤ書」を読んで感動し、以後もっとも愛した預言者、天然詩人にして祖国を想う「人類の友」「涙の預言者」と呼んだエレミヤである。[10] エレミヤは、南ユダ王国最後の預言者で、神を信じ、自分に克ち、世に勝った「為人」=「詩人」であった。

内村鑑三には、アメリカの詩人について講じた文章としては、「米国詩人」（『福音新報』一〇九号、一八九七（明治三〇）年七月三〇日、第四巻、所収）、一八九八（明治三一）年一月一〇日から五回にわたって、彼が愛読した文学についての講演録『月曜講演』（警醒社書店、一八九八年）所収の第三章「米国詩人」（一月三一日講演）、ホイットマンについて論じた「詩人ワルト　ホヰットマン　WALT WHITMAN」（『櫟林集　第壱輯』、聖書研究社、一九〇九年）、『平民詩人』（畔上賢造合著、警醒社書店、一九一四年、増補改版、一九二四年、再録）などがある。

「米国詩人」は、記者に内村が答える形で構成されている。米国詩人については、こういう。「米国詩人は英国詩人よりも遙かに偉大なりと」（第四巻、三八五頁）。その理由を、英国詩人は山紫水明に隠遁する趣きがあるが、米国詩人は社会と事業に活きていると述べている。

その詩人の例を、ハーバード大学で近世語学・美文学の教授のロングフェロー（一八〇七―一八八二年）、法体系に通暁した新聞記者のブライアント（一七九四―一八七八年）、クエーカー教徒の家庭で育ち、奴隷制廃止論者として活躍したホイッティア（一八〇七―一八九二年）、外交官としてスペイン、イギリスに赴いたローウエル（一八一九―一八九一年）、労働者として生きた平民詩人ホイットマン（一八一九―一八九二年）などを挙げている。

「米国詩人」は、以下のように結ばれている。日本国民は、いまだに米国詩人の真価を知らずに、風流、悲観的厭世家が生活を貴ばない傾向にあるといい、「米国詩人の如く人生に近き、普通の生活に稗益ある詩歌を紹介して、健全なる詩風の行はれん事を希望する切なり」（同、三八七頁）。日本近代において、英文学、英国詩人への関心が向くなかで、内村鑑三は日本での米国詩人の真価を求めていたのである。それはキリスト教とともにある社会、生活のなかの信仰詩でもあろう。

翻訳詩集『愛吟』に収録される詩も多いが、内村が訳したアメリカ詩人の主な詩は、以下の通りである（『愛吟』（抜粋）所収詩を除いて本書に収録順、詳細は解題、参照）。ローウエルは、「ラウンフホール公の夢」「真人の祖国」、ホイッティア「〔我もはや懼れず〕」「充たされし希望」「〔我は汝は我を離れて〕」「〔汝は暴風吹き荒れし〕」、エラ・フィルコックス「航海中」、エマソン「〔我は世界の持主なり〕」、バウル・ダンパー「戦士の祈禱」、ホイットマン「死に臨んで余の霊魂に告ぐ」「〔嗚呼、何れの僧侶よりも〕」「〔小児あり、其手を拡げ〕」、ブライアント「二基の墓」「紫竜胆に贈る」、フランセス・ヴァン・アルスタイン「光り輝く讃美の里」、ロングフェロー「〔其は五十年前なりし〕」「人生の詩」などである。

『月曜講演』第三章「米国詩人」では、英国詩人と米国詩人をその政治思想、天然風土などから比較するとともに、「英国は詩を以て詩人の為に用ひたれども、米国は一歩を進め詩を以て人民の為に用ひ、政治の為に用ひたりき」（第五巻、三六四頁）といい、イギリスではシェイクスピア、ミルトンを国民詩人と呼び、日本では「未だ一人の国民詩人の出でしを聞かず」（同前）と述べている。彼は米国詩人と英国詩人を対照しつつも、世界の大詩人を挙げるとともに、英国詩について、以下のように語っている。

――イスパニアにはカルデロン、セルバンテス、フランスにはモリエール、ラシーヌ、ドイツにはゲーテ、ハイネ、イタリアにはダンテと、それぞれ詩界の「豪傑」がいる。だが、「燦然として銀河の天に懸かれる如く、夥多の大詩人群り起て、其文学史上に大光芒を発てるに至ては、未だ英国に如くものあるを見ず」（同、三六〇頁、以下同じ）、「世界の中未だ英人ほど道徳的に宇宙を歌へる者あるを見ず」「英国は宛がら詩神が特別の恩恵を

垂れたるもの、如く然り」と。

イギリス詩人の主な詩は、以下の通りである。ヘンリー・バートンは、「〔羽翼あらば何処に飛ばんわが魂よ〕」、ミルトンは、「〔噫聖霊よ、爾は諸ての宮殿に勝り〕」「〔突立つ山の曝せる胸に…〕」、ワーズワースは「〔意を留めよ〕」「〔罪に枯死する我等と雖も〕」「水仙花」「誠信なる主　"Not seldom, clad in radiant vest."」「夕暮の歌」「〔路傍に花咲く〕」「〔大いなる神よ〕」「〔天然の堅き〕」などもっとも多く、ベン・ジョンソンは「短命」、讃美歌作詞家のアイザック・ワット「天国を望む」「〔真実にして〕」と同じくヒーバー「『シロアムの細流』"By Cool Siloam's Shady Rill."」、ブラウニング「万物悉く可なり」「ブラウニング詩集に於ける基督の再来」、カウパー「詩人カウパーの再臨歌　Come then, and, added to Thy many crowns」、テニソン「〔土塀の上に生ふ花よ〕」「同盟国」などである。

ドイツ詩人の詩は、ゲーテ「〔月日と星の巧造に〕」（『ファースト』）「〔冬已に老ひて力尽き〕」「〔凡て変り易きものは〕」、ウーラント「〔冷たき大理石の中に於て在らず〕」等であり、スコットランドの詩はホレーシャス・ボナー「物の前後」などが訳され、作者名がないものも「〔如何なれば艱難にをる者に光を賜ひ〕」「『或る詩』（無名氏）」「〔然らば我は何なるか〕」などがある。

英国詩人ロバート・ブラウニングの「万物悉く可なり」は、内村鑑三の信仰宇宙をもっともよくあらわしている。

年は春なり、
日は朝なり、
朝は七時なり、
山側は露に輝き、
雲雀は空に舞ひ、
蝸牛は叢林に戯る、
神は天に在り、
此世の万物可なり、[11]

この天然宇宙のすべては、「万物悉く可なり」を伝えるとともに、内村鑑三の信仰宇宙でもある。「ブラウニング詩集に於ける基督の再来」という、次のような訳詩がある。「欠如する者あり―何乎？（中略）然らば来り給へ**来るべき者**よ、／来りて此不完全を完成し給へ、／碧空を充実し緑野を完美し給へ、／此の花園に生気を吹入れ給へ、……」（解題、参照）。

世界の不完全を完成する者、それは「**来るべき者**」である。この世界は神とともにあり、再臨のキリストは臨りつつある。

3　『愛吟』（抜粋）

『愛吟』は、一八九七（明治三〇）年七月二五日、警醒社書店から発行された「内村鑑三纂譯」書で、一九四六（昭和二一）年同盟出版社から「内村鑑三譯」、一九五二（昭和二七）年、「歓喜と希望」が含まれた『歓喜と希望・愛吟』として、角川文庫として発行されている（ここには原詩は収められてはいない）。角川文庫版には、一九一五（大正四）年の改版のときに書かれた、以下のような献辞が付されている。「余を愛して眠りし人／余の缺點を見のがして余を今なほ愛してくれる人／余と信仰を共にしてかはらざる人／余と共にキリストとともに苦しまんと欲する人」。

また、警醒社書店版『愛吟』の巻末には、欧文欄（英語題名 Al-GIN（Favorite Singing.）が付されている。「明治三十年三月　東京青山寓居に於て」と記された「自序」には、次のように記されている。「詩は直訳を許さゞるのみならず、亦之を意訳に附するも甚だ難し、故に之を訳するに惟精神訳の一途あるのみ（中略）余の訳の往々原詩の精神だも尽す能はざるは余の深く耻る所なり、然れども全く訳せざらんに比すれば読者に取りて

多少の利益なりと信ず」（第四巻、三一三頁）。「精神訳」とは、『愛吟』以外の訳詩も同様に、内村鑑三のキリスト教「信仰訳詩」ともいえる。『愛吟』においても、その傾向は顕著である。

また、内村は「詩作」と題した短い文章に、次のように記している。

「詩は成る、作るべからず、美き思想は美き言辞と共に臨る、文を練るを要せず、高く思ひて潔く行へば足る、詩は勇者の事なり、文士の業にあらず、敢為以て何人も詩人たるを得るなり」（『聖書之研究』一一二号、一九〇九（明治四二）年九月一〇日、第一六巻、四三四頁）。

内村鑑三は、「読書余録」（『聖書之研究』一一三―一一四号、「雑録」、一九〇九（明治四二）年一〇月一〇日、一一月一〇日）の「詩歌、歴史、伝記」について述べたなかで、「詩歌熱は夙くより余を襲ふた」と始めて、以下のようにつづけている。「幼年時代には唐詩撰を暗誦し、古文真宝を朗吟した、後に英文を読み得るに至つて、ホヰツチヤ先づ余を虜にし、次いでヲルヅヲス、ローエル、ブライアント等順を追ふて余を生捕つた、ゲーテとシルレルとは学校で読んだ丈けであつて、其感化は今に尚ほ残つて居るが、其言辞は独逸語と共に忘れて了つた、ダンテは英訳を以て少しく読んだ、其地獄篇を読みし時に恐怖つて幾夜も寐られなかつた事を今でも忘れない、近頃に至てホヰツトマンを読始めた、而して彼は今余の特愛詩人である、……」（第一六巻、五〇七―五〇八頁）。『愛吟』には、ホイットマン（冒頭の言葉）、ローエル、ホイッティア、ブライアントなどの詩も収められている。

『愛吟』中の二七篇の訳詩のなかで、冒頭に置かれているのは、アメリカの詩人ロバート・ラブマンの「詩人の胸中」である。

彼の胸中に囀づる鳥あり
宝玉の思想と黄金の語言と
山と牧場と家畜の群とは
皆彼の胸中にあり
喜と悲と　闇と明と
日向と日陰と昼と夜と
悪を憎む心と義を愛する念と
不朽の事業を遂げんとする
永久不抜の志望と
癒すべからざる飢渇とは
皆彼の胸中にあり[12]

「詩人の胸中」とは、「THE POET'S SOUL」であり、詩人の魂である。それらが奏でる『愛吟』のなかにも、内村鑑三と詩人の信仰宇宙が響き合っている。

4　短歌

内村鑑三においては、日本の和歌とキリスト教が、天然と信仰として通じ合っている。彼が残した一〇〇首を超える短歌（書簡を除く）には、日本的心性とキリスト教精神が溶け合い、内村鑑三の人物像とともに、その信仰宇宙をかたちづくっているように見える。

亀井俊介『内村鑑三――明治精神の道標』（中央公論社、一九七七年）によると、若き日の渡米にさいして、英文聖書、ローリング・ブレース『ゲスタ・クリスチ』、『太平記』、『古今集遠鏡』がその行李のなかに入っていたという。それはまさに、「二つのJ」につながっているのであろう。

「去る明治十七年の秋、余は奇異なる目的を以て米国に赴けり、そは他なし、余は不幸にして早くより基督教を信じ、実行的慈善事業に顕はるゝ基督教の結果を其本国に於て見んことを欲したりしなり」（第三巻、五二

頁）とはじまる『流竄録』[13]の冒頭、「余の親父は余を横浜埠頭に送りて左の国詩一首を余に授けたり」といい、次のような短歌を記している。「聞きしのみまだ見ぬ国に神しあれば行よ我子よなに懼るべき」（同前）と。『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』によると、この餞の歌に見るように、父は教養があって「見事な詩歌」を詠んだのである。それは「異教」という曠野の地に立つ、彼の息子鑑三に大きな影響を与えたであろう。

内村には、「古歌と信仰」（『聖書之研究』一九号、一九〇一（明治三五）年三月二〇日）という文章がある。ここには、平安前期の歌人・紀貫之の「ことしより春しり初むる桜花散るといふことはならはざるなむ」（第一〇巻、九九頁）、よみ人しらずの「山高み人賞翫ぬ桜花甚くな詫びそ我れ見はやさむ」（同前）、「源のむねゆきの朝臣」の「常盤なる松の緑も春来れば　今一しほの色まさりけり」（同、一〇〇頁）の三首が引用され、それをキリスト教信仰において解釈している。「ことしより…」は、「終結まで汝等の信仰を維持せんことを」と、「山高み…」は「キリストは汝の信仰の花を賞で給ふ」（同、一〇一頁）、「常盤なる…」については、以下のように述べている。「千林百草春を歓ぶは一なりと雖も、松の之を迎ふるや、彼に溢るゝの感謝あり、松たれよ我が友、松となりて厳冬に耐えよ、而して春陽若し汝に臨むことあらば万物に優るの光輝を放つて天に在す汝の父の栄光を顕はせ」（同前）と。二つの「J」の一つである「日本」（Japan）の「心」は、古歌の「大和心」へ、それは「キリスト教信仰」（Jesus）へと通じている。

本集成の短歌には、二六首のさまざまな著述のなかに記され、あるいは独自の作品として発表された短歌と、日記のなかに記された短歌八六首を収めている。それらの数多くの短歌の底を流れているのは、天に裏づけられた「天然」と、信仰詩・訳詩と同様に、キリスト教の「信仰」である。それは短歌という文学形式をもつ信仰歌なのである。

春の日に栄の花の衣きて
　心うれしく帰る故郷[14]

天地も揺ぐラッパの一声に
　更生へるらむ春の曙

（テサロニケ前書四章十六節）[15]

彩れる榎、椋、楢、楓、
　かぎりなき野を覆ふ蒼穹[16]

「妻の柩を送りて詠める」と題された「春の日に…」は、不敬事件のあと心労の果てにたおれた妻を天へと送る歌であり、「天地も揺ぐ…」は再臨信仰の「大いなる日」を、「彩れる榎…」は、万物悉く可なりの世界を詠んだ、それぞれが信仰短歌である。

内村鑑三の日記は、全集には一九一八（大正七）年八月二六日から一九三〇（昭和五）年三月二二日までが収録されている。その日記は、『聖書之研究』二一九号（一九一八年一〇月一〇日）から二五六号（一九二二年八月一〇日）までは、「日々の生涯」の題名で、二六六号（一九二二年九月一〇日）から二七三号（一九二三年四月一〇日）までは「一日一生」と改題し、二七四号（一九二三年五月一〇日）からは「日々の生涯」に戻して、終刊号三五七号（一九三〇年四月二五日）まで掲載されている。

日記には、日々の生活、信者・読者との関係、旅行、静養の記録、孫など家族のこと等、「日々の生涯」「一日一生」が書きとめられ、そのなかに短歌が織り込まれている。ここからは内村鑑三の日常生活、その人となりも窺い知ることができる。

一九二〇年（大正九）年一一月一六日、湯河原に湯治に行くと、柑橘類の林、黄金の実が風景を彩るなか、終日休み、東京の友人に一首書き送る。

「湯河原や賽の河原の赤ん坊寝るより外に為る事はなし」（第三三巻、三一六頁）。ロマ書講義をはじめた一九二一（大正一〇）年の夏、二カ月信州の沓掛に滞在する。「人は去り山は静に水清く聖書我手に独り天国」（第三三巻、四二一頁）。友人のクリスマスプレゼントと祝詞への返歌。「ヘルモンの山を映して水鏡み教へ清しガリラヤの湖」（第三四巻、一二四頁）。一九二三年六月九日の有島武郎の自殺を知って悲しみとともに詠む。「人の子の智慧も能力も何かあらん神に叛けば死ぬばかりなり」（第三四巻、一九八頁）。一九二七年のある日常――。「我が家の天の使は舞ひ去りて祖父々々御飯と呼ぶ声はなし」（第三五巻、二二五頁）、など。

最後の短歌は、一九三〇（昭和五）年三月二八日の死の一〇日前、「何を学ばざる日はありとも、忍耐の美徳を学び得ざる日とてはない。病の床に在りて、此機会の充分に与へらるゝは、感謝すべきことである」という文章とともに、次のような一首が記されている。

到るべき都は遠し今日もまた
忍ぶが岡に独り漂ふ[17]

生涯一基督者・内村鑑三の到るべき都は、遠く、さらに近い……。

内村鑑三は、「死後の生命」（『聖書之研究』二二七号、一九一九（大正八）年六月一〇日）に、次のように記している。「死後の生命は信仰を以てする。冒険である」（第二五巻、二二頁）、「神の言なる聖書の教示に由らずして来世を語る事は出来ない」（同、二三頁）。その希望の中心に、再臨信仰がある。

『聖書之研究』の一六三号（一九一四（大正三）年二月一〇日）には、「〔LIFE AND LIGHT AND LOVE. 生命と光と愛〕」と題した、次のような文章がある。「神は生命である。彼は又光である。而して同時に生命であり又光であるが故に彼は愛である」（第二〇巻、二四八頁）と。

生命、光、愛――それは内村鑑三の信仰詩・訳詩・短歌の信仰宇宙である。

注

（1）『内村鑑三全集』第三五巻、一二四頁。
（2）『内村鑑三全集』第二〇巻、一七二頁。
（3）「〔キリスト伝研究（ガリラヤの道）〕」（『聖書之研究』二六九―二九一号、一九二二（大正一一）年一二月一〇日―一九二四（大正一三）年一〇月一〇日。『内村鑑三全集』第二七巻、三一六頁。
（4）詩「桶職」の解題、参照。
（5）コリント後書の四、五章についての講演の大要。『聖書之研究』一五八号、一九一三（大正二）年九月一〇日。『内村鑑三全集』第二〇巻、八九頁。
（6）小林孝吉『内村鑑三の聖書講解――神の言のコスモスと再臨信仰』（教文館、二〇二〇年）、同「内村鑑三の聖書講解と再臨信仰――臨りつつあるイエス」（『内村鑑三研究』第五五号、二〇二二年四月）、参照。
（7）『内村鑑三全集』第八巻、二八二頁。
（8）内村鑑三の信仰詩の世界を論じたものとして、詩人で一八世紀ドイツの思想家J・G・ハーマン（一七三〇―一七八八年）の研究者・川中子義勝氏の『詩学講義――「詩のなかの私」から「二人称の詩学」へ』（土曜美術社出版販売、二〇二一年）に収められた「十三、「呼びかけ」に応えて――詩人内村鑑三」（初出『ERA』第三次、一四、一五号、二〇二〇年四月、一〇月）という論考がある。ここでは、「被造物の声を聴く」「詩人内村鑑三」の二章で構成され、ハーマンの詩人観とともに、詩人内村鑑三のキリスト教思想、信仰と詩の霊的本質性（天然観）について論じられている。内村の詩は、「寡婦の除夜」、「秋酣なり」（所感の一文を散文、詩文として）、「桶職」などを取り上げている。内村鑑三にとっての「「詩＝詩人」の思想は、『櫟林輯』の編輯の特徴にも窺える」（三一四頁）として、ホイットマン論とともに、「札幌県鮑魚蕃殖取調復命

書拜(ならび)ニ潜水器使用規則申込上申」と「商売成功の秘訣」が収められたといい、「内村にとって詩は、自然科学をも視野に収めるものでなくてはならない」（同前）と書いている。また、「被造物の声を聴く」の最後に、川中子氏は次のように記している。「被造物の呻きに耳を傾けつつ、終末を待ち望んでゆく。そこに彼は詩人の使命を見た。「宇宙の完成を祈る」と結ばれた内村鑑三の辞世には、被造物（天然万物）に対する詩人の言葉のあり方が示唆されている。内村鑑三は世界に、その自然と歴史と社会にどのように向き合い、その声を聴いたのか」（三〇五頁、傍点引用者）と。神の言(ことば)の反響する、その「声」は、天然詩人内村鑑三のキリスト教信仰の黙示的な深い森に再臨信仰の響きとともに木霊(こだま)していないだろうか。川中子義勝氏の「十三、「呼びかけ」に応えて――詩人内村鑑三」は、天然詩人・内村鑑三の信仰的姿と、霊的声を闡明に描き出している。それは「聖書と天然と歴史――ハーマンと内村鑑三」（『法学新報』第一二八巻第七・八号）でも論じられ、その論文をこう結んでいる。「近代の自然・歴史の進歩思想の起点と終点において、内村鑑三とハーマン、二人の人物と思想は「信の類比」において形を等しくする」（一三一頁）と。

(9) 『聖書之研究』四五号、一九〇三（明治三六）年一〇月一五日、『内村鑑三全集』第一一巻、四五三頁。

(10) 「耶利米亜記感想（余の古き聖書より）」（『新希望』七四号、『聖書之研究』七五号、一九〇六（明治三九）年四月一〇日―五月一〇日）、『内村鑑三全集』第一四巻、一〇〇頁。『平民詩人』の「序に代ふ」（『不信国の欠乏――詩と詩人』『聖書之研究』一五〇号、一九一三（大正二）年一月一五日、第一九巻、三二五―三二七頁）のなかで、不信国に欠乏するもの、それは「高遠なる詩歌」「預言者」「詩人」の存在であると記し、旧約の預言者・詩人エレミヤについて、次のように述べている。「国に一人のエレミヤを有(も)つことは大軍隊を有つに勝るの勢力である」（第一九巻、三二六頁）。

(11) 『聖書之研究』一四七号、一九一二（大正元）年一〇月一〇日、第一九巻、二五四頁、解題、参照。

(12) 『内村鑑三全集』第四巻、三一六―三一七頁。

(13) 『国民之友』二三三―二五一号、一八九四（明治二七）年八月二三日―一八九五（明治二八）年四月二三日。

(14) 「妻の柩を送りて詠める」『基督教新聞』四〇五号、一八九一（明治二四）年五月一日、『内村鑑三全集』第一巻、一九五頁、解題、参照。

(15) 「春の曙」『聖書之研究』一七七号、一九一五（大正四）年四月一〇日、『内村鑑三全集』第二一巻、二四八頁、解題、参照。

(16) 「関東平原の小春」『聖書之研究』一六一号、一九一三（大正二）年一二月一〇日、『内村鑑三全集』第二〇巻、一九二頁、解題、参照。

(17) 「日記」一九三〇（昭和五）年三月一八日、『内村鑑三全集』第三五巻、五六〇頁、解題、参照。

六　文学観

内村鑑三の文学観――世界精神と純福音の発露

1　「何故に大文学は出ざる乎」

内村鑑三には、日清戦争を時代背景とした「何故に大文学は出ざる乎」（『国民之友』二五六号、一八九五（明治二八）年七月一三日）と、「如何にして大文学を得ん乎」（同、第二六五―二六六号、同、一〇月一二、一九日）という二つの文学論がある。そこには宗教思想家・内村鑑三の文学観を見ることができる。

二年前、内村は最初の宗教書『基督信徒の慰』『求安録』を世に問い、以後、「後世への最大遺物」の講演、「日清戦争の義（訳文）」の公表、『How I Became a Christian』の刊行とつづき、ジャーナリストとしての側面を見せつつ、はじめての文学論「何故に大文学は出ざる乎」を、徳富蘇峰を主筆とする総合雑誌『国民之友』に発表するのである。

「時勢」となる明治二〇年代は、天皇制による近代国家の確立をめざし、対外危機の強調、愛国心の高揚などを計りつつ、キリスト教系学校の創設を含む欧米化を進め、大日本帝国憲法、教育勅語の発布、近代の国家戦争である日清戦争へと至っている。それは近代日本の大きな歴史の激動期でもあった。

内村は、『伝道之精神』（警醒社書店、一八九四年）の「如何にして宗教界今日の乱麻に処せん乎」には、冒頭部分に「余輩は常に思へり身を処するに難なる十九世期今日の我等日本人の如きはあらじと、我等は実に暗黒を歩みつゝあるなり、……」（第一巻、三四〇頁）と書き、その「混沌たる時代」について、次のように記している。

> 今や乱麻の時なり、今や思想界暗黒時代なり、然れども暗黒時代亦其用あるにあらずや、自然は昼を与へて亦夜を給せり、盛夏に植生の繁茂するありて厳冬に草木の凋れるあり、暗黒と厳冬とは休養の為めなり、我等が外に伸る能はざる時は内に強固なるを得べし、暗黒宇宙を掩ひ鳥獣巣に就きし時、孤燈の下、煖炉の辺、一家の団欒、友人の対座あるにあらずや、働くのみが生涯にはあらざるなり、厳風梢を払ひ、霜雪寒深き時、疎林凋零して紅花緑葉眼を歓ばさゞる時、是れ植生の根を深ふする時ならずや、冬なくして春の来るなし、……[1]

だが、キリスト教信仰に生きる内村には、この「乱麻」の状況は、その実は「皮相」であり、「心霊」の根底には「今尚ほ太古の静かなるあり、其処に永遠の平和あり、其処に永遠の歓喜あり、永遠の満足あり、永遠の友誼……」（同、三四九頁）がある。

「何故に大文学は出ざる乎」は、冒頭に『国民新聞』第一六一九号に掲

載された、「時勢と文学」という記述のあと、「以太利復活の大風雲」はダンテやアリオスト、タッスを産んだが、「日本大膨張の下一の大文豪産するなき耶」（第三巻、一七七頁）と記され、本文は次のようにはじまっている。

大文学は出ざる乎、大文学は出ざる乎、吾人は希臘の古哲に傚ひ、日中提灯を燈して都の大路を廻り歩くも大文学者に接せざるなり、日清戦争始て大文学出でず、連戦連勝して大文学出でず、戦局を結んで大文学出でず、大政治家あり（？）、大新聞記者あり（？）、大山師あり（然り）、大法螺吹きあり（然り）、然れども大文学者はあらざるなり。(2)

内村鑑三は日本の文学界では、フランス革命時代の「三十銭文学」どころか、「二十銭・十銭・六銭文学」にして、「掃溜雑誌」「法螺吹き雑誌」「理屈雑誌」ばかりで、大文学どころか中文学も小文学もないと、激烈な調子で文学、思想状況を批判している。明治二八年、日本近代文学は、八年前、二葉亭四迷『浮雲』から始まったばかりであった。

「何故に大文学は出ざる乎」では、内村はノルウェーにはイプセンが、ハンガリーにはモーリッツ、ロシアにはプーシュキン、レールモントフがいるが、日本では時代の「膨張論者」たちの大文学者を求める絶叫にもかかわらず、大文学はでてこないといい、次のように書いている。「此国民に向て世界的大文豪出でよと叫ぶ、オヽ日本膨張論者よ、汝は木に向て魚を出せよと叫びつゝあるなり、蒺藜に向て無花果を与よと叫びつゝあるなり、日本国は世界的精神を養はざりしなり、故に世界的大文学は彼より出ざるなり」（同、一八〇頁）。

内村は、ゲーテ、ダンテ、シェイクスピア、ミルトン、ユーゴ、レッシング、カーライルなどの名前を挙げ、日本には大文豪を産みだす思想も、それを迎える社会も、大文学の種子もないと書き、この論文を「大文学の地質吾人にあり、確かにあり、要は世界精神の涵養と注入とにあるのみ、如何にして之を為さん乎、是れ余輩の次回の論題なるべし」（同、一八四頁）と結んでいる。「世界精神」とは、キリスト教へとつながっている。大文学とは、「理想の産」にして、高尚なる理想のないところに文学はないのである。

2 「如何にして大文学を得ん乎」

「如何にして大文学を得ん乎」は、日清講和条約調印、三国干渉の行われた一八九五（明治二八）年、「何故に大文学は出ざる乎」の三カ月後に『国民之友』に発表された。冒頭、日清戦争を背景に、「武力の及ぼす所は狭くして短し、文力の及ぼす所は広くして永し、兵を増さん乎、文を修めん乎、我若し永久に宇内を斫り従へんと欲すれば我は文を修めんのみ」（同、一八五頁）と書いている。さらに、彼は「大文学は天賜」（同前）であり、「詩人は神の特賜」にて、「宇宙は皆な咸く聖楽、我の心琴一たび天の美音に触れて雅韻我より流れて止まず」（同、一八六頁、以下同じ）とつづけ、ダンテのいうように詩人は「愛の書記」で「如何にして愛の書記たるの資格を得ん乎、是れ余輩の実際の問題なり」と記している。

以後、内村は「文躰」「世界文学の攻究」「自然の観察」「品性の修養」と見出しをつけて、「如何にして大文学を得ん乎」を書き進めている。「文躰」では、社会は「文飾欠乏の時代」（同、一八六頁）ではなく、「言語の下痢症と思想の結塞症」（同前）に罹っているといい、「世界文学の攻究」では、ヘブライの聖書、ダンテの聖劇、シェイクスピアの戯曲、ゲーテ『ファースト』などの世界文学を挙げて、自分は小著作を嫌い、大著作を好んで読むという。

「自然の観察」においては、大詩人は常に自然の観察者であり、詩の最古にして最大なるものとして旧約聖書の「ヨブ記」を挙げ、最後に「未来

の大文学は敬虔を以てする自然の密察より来る」（同、一九七頁、以下同じ）と結んでいる。

「品性の修養」は、万巻の書を読むことで人は大文学者になることができるかと問い、「大文学は気魄」であり、大文学者の特性は「人たることなり、人の面を怖れざることなり、正義を有の儘に実行することなり、輿論と称する呶々の喃に耳を傾けざることなり、富を覓めざることなり、爵位を軽んずることなり、……」と書き、テニソン、ゲーテ、カーライル、プーシュキン、イプセン、ディケンズなど大文学者について言及している。「品性の修養」の最後には、次のように記されている。

古人の大著を究むるにあり、自然に真理を探るにあり、自己を清ふして天来の思想に接するにあり、是れ余輩の信ずる大文学を得るの途なり、余輩は此大問題を悉せしと言はず、然も余輩の論ぜし所の全く無益ならざるを信ず。(3)

内村鑑三は、日清戦争直後に、「何故に大文学は出ざる乎」「如何にして大文学を得ん乎」によって、言語や思想の「下痢症」「結塞症」に罹っている日本に、「世界精神」の発露としての大文学がでないことを嘆いている。内村にとって、「大文学」は、自然の真理を探究し、自己を清くして「天来」の思想に接することから生まれてくる。「大文学」とは、「時勢」の表層ではなく、時代と社会、人類史の地層深くを流れる「世界精神」＝「純福音」の水脈と深く関わっている。それはキリスト者の詩人・北村透谷の「自由」「内部生命」「心の秘宮」とも通じているであろう。

3　文学者と文学観

「何故に大文学は出ざる乎」「如何にして大文学を得ん乎」から二七年後、一九二二（大正一一）年、六一歳の内村鑑三は、四月二五日付「日記」に、社会では多数の「小悪魔」が弱者を苦しめていると書いたあとに、最近の出版物で感動を受けた著書として島崎藤村編『透谷全集』（春陽堂出版、一九二二年）を挙げ、以下のように記している。

透谷は近代日本に於ける真詩人の一人である、彼にバイロンの熱情と光輝とがあつた、而して英詩人の如くに己が内に耀く光に幻惑されて終に其の生命を縮むるに至つた、惜しむべきの限りである、彼に若し和平の福音ありたらば！　と時々思はせらる（中略）余は本誌の読者に此書を推薦するに躊躇しない、信仰の書ではないがたしかに誠実の書である、而して誠実は信仰を作る為の第一の要素である。(4)

内村は、透谷はバイロンの「熱情と光輝」があり、英国詩人のように、自らの内なる「光」を見つめ、それに「幻惑」されて夭折したキリスト者の「真詩人」＝文学者として認めている。透谷の詩には、内村の文学観と相通ずるものがあったであろう。それはキリスト教的世界精神と理想でもあった。だが、透谷にはついには「和平の福音」（＝贖罪の回心）がなく、内村が『伝道之精神』『地理学考』を刊行し、娘ルツが生れた二カ月後の一八九四（明治二七）年五月一六日未明に、二五歳五カ月で自ら命を断ったのである。それは内村にとって、有島武郎の四五歳の死とは異なっていたのである。

「背教者としての有島武郎氏」と題して、内村は次のような短歌を発表した。

人の子の智慧も才能もなにかせん
神を棄れば死ぬばかりなり。(5)

内村鑑三における文学とは、「何故に大文学は出ざる乎」で、「深く憂へざる民は大文学を有つ能はず」（第三巻、一八一頁）と記したように、世界精神と福音の純粋なる発露としての「大文学」なのである。内村にとって、同時代の文学者は「大文学」（＝信仰）からは遠かったのである。「大文学」とは、コーヘレスやヨブの「憂い」の果てに神を見る、もっとも低き信仰的「小文学」でもある。日清戦争後、除夜、月清く、星白く、人帰らず、そんな「寡婦」の涙……。あるいは、四季、路傍の草花、散る木の葉、風、雨など、万物悉く可なりの宇宙のように。

「文学者の信仰」（『聖書之研究』二二八号、一九一九（大正八）年七月一〇日）という、「当にならぬ者とて文学者の基督教信仰の如きはない」という一行からはじまる文章がある。このなかで、内村は有島武郎、正宗白鳥、国木田独歩、志賀直哉、小山内薫など、自らの門下に入っては去って行った文学者[7]を想ってか、以下のように述べている。――彼らはキリスト教に接し、歓迎し、その美的側面に憧れる一方、厳格な道徳的要求にこれを棄て去る、文学者がキリストの「僕」として一生を終える者は稀である、と。以下、次のように記している。

基督教は愛の宗教である、義に基く愛の宗教である、故に厳格なる義の要求に応ぜずして基督教の愛を覚ることは出来ない、罪を罪として認め、罪の価は死なりと信じて、自身罪の子たる以上、死の刑罰を価ひする者なるを承認してのみ初めて基督教の有難さが解かるのである、然れども是れ大抵の文学者の為す能はざる所である、彼等は夫れが為に基督教を去て、他に彼等の都合好き人生哲学に走るのである（中略）文学者は批評家、劇作家、小説家、然り、特別の場合に於ては詩人と成る事が出来る、然れども十字架を負ふてキリストに従はんが為には、彼等は余りにも繊弱である、繊美である、勇気が足りない。[8]

ここには、「文学は基督教を解せんと欲する者の択むべき最悪の途である」（第二五巻、五一頁）とまで書いている。彼の念頭には、世界文学としての「聖書」、ホメロスの二大叙事詩、ダンテ『神曲』、シェイクスピアの戯曲、ゲーテ『ファースト』、さらにはミルトン、ユーゴ、レッシング、カーライルなどがあったのかもしれない。だが、文学は「大文学」「世界文学」ばかりではなく、『聖書之研究』の読者の実験録のように、魂の偉大な「小文学」もある。内村鑑三がもっとも惹かれたのは、旧約の預言者・詩人エレミヤのような人ではなかったか。また、彼がひそかに好んだのは、「大劇詩」ばかりではなく、自らの「寒中の木の芽」「我等は四人である」「桶職」のような「小詩」ではなかっただろうか。

内村鑑三には、「雪は降りつゝある／然かし春は来りつゝある」と始まる「春は来りつゝある」という詩がある。以下は、最後の連である。

慰めよ苦しめる友よ
汝の患難多きにも拘はらず
汝の苦痛強きにも拘はらず
　春は汝にもまた来りつゝある[9]

この戦争、パンデミックなど、患難、苦痛の多き世界にも、一人ひとりにも「春」は来たりつつある。これは希望の「大文学」でもある。

一八九七（明治三〇）年、『早稲田文学』（七年三号）に発表された「文学局外観」（『小憤慨録上』では「口述」となっている）という文学時評がある。内村は、ここで日本文学の現状は「悲観的」であるといい、文学は常に二つの「元素」があり、一つは美が生れるもととなる「沈痛」で、それは人類とこの世の「悲」を一身に受け、それは文学に「悲憤」「慷慨」「義怒」（第五巻、一七五頁）をもたらすのである。彼は「第二の要素は悲観に伴ふ歓喜です、希望です」（同、一七六頁）と述べる。

世界文学の要素は、この二つに尽き、ヘンデルの譜「メサイヤ」、地獄から煉獄、天国へ遍歴するダンテ『神曲』、ゲーテ『ファースト』、レッシング『賢者ナータン』も、悲惨から歓喜へと至る物語である。一方、シェイクスピア『ロミオとジュリエット』、レッシング『エミリア＝ガロッティ』など、悲惨から悲惨に終る「悲劇」もある。だが、悲惨は歓喜へ、歓喜を知る人は悲劇を書ける人であり、日本文学には幾分かの悲惨が描かれているにすぎないと述べ、次のように結論づけている。「「此の悲惨の人生はやはり歓喜の人生である」、といふ観念を強く人類に与へたものは基督教だと思ひます」（同、一七八頁）と。

純福音は純恩恵である、律法の痕跡だも混ざる神の恩恵の宣言である、……[10]

内村鑑三にとって、文学は理想という世界精神と「純福音」＝「純恩恵」の発露である。それが無教会信仰のキリスト者・内村鑑三の文学観である。

注

（1）『内村鑑三全集』第二巻、三四八頁。「内村鑑三の文学観」は、小林孝吉『内村鑑三――私は一基督者である』（御茶の水書房、二〇一六年）の「一　日本近代とキリスト教――北村透谷と内村鑑三」における文学観、文学論にあたる部分をもとに、加筆等も含め再構成した。「3　文学者と文学観」は、新たに加えた。

（2）『内村鑑三全集』第三巻、一七七頁。

（3）同前、二〇一頁。

（4）『聖書之研究』二六二号、一九二二（大正一一）年五月一〇日、『内村鑑三全集』第三四巻、四一―四二頁。

（5）『万朝報』一九二三年七月一九日―二一日、『内村鑑三全集』第二七巻、五三一頁、解題、参照。

（6）「背教者としての有島武郎氏」『万朝報』一九二三（大正一二）年七月一九日―二一日、『内村鑑三全集』第二七巻、五三二頁、解題、参照。

（7）鈴木範久『内村鑑三をめぐる作家たち』（玉川大学出版部、一九八〇年）では、主に国木田独歩、正宗白鳥、魚住折蘆、小山内薫、有島武郎、志賀直哉、長与善郎などが取り上げられている。田中浩司「内村鑑三の文学観――近代日本文士たちの憧憬と絶望」（『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第四一号、二〇〇八年一二月）は、内村の文学観と離れていった作家、劇作家など、近代の文学者たちとの関係を論じている。一度は、彼らが内村に魅せられながら離反していったのは、通説とされる内村の「芸術・文学蔑視」ではなく、「一段深い所」にあったことを、日本近代文学における内村の位置付けとともに明らかにしている。田中氏は、次のように述べている。「彼らは決して内村の文学観を嫌い、反発したが故に内村から離反したのではない。いずれの文士たちもむしろ、内村を憧憬し、その文学観にも積極的に感化を被った。しかし、その憧憬・感化の故に、むしろ文士たちは自身の内に横たわる弱さ、醜さ、罪に気づいてしまった。憧憬故に、自身に絶望し、内村から離れていった」（一九七頁）。それが自然主義文学へとつながっていった、と。

（8）『内村鑑三全集』第二五巻、五一頁。

（9）『新希望』七三号、一九〇六（明治三九）年三月一〇日、『内村鑑三全集』第一四巻、六一頁、解題、参照。

（10）「純福音」『聖書之研究』一七六号、一九一五（大正四）年三月一〇日、『内村鑑三全集』第二一巻、二二七頁。

内村鑑三略年譜

一八六一（万延二）年
三月二三日（陽暦）、江戸小石川鳶坂上（現、文京区本郷）、高崎藩の武士屋敷に生まれる。父は同藩藩士内村宜之（よしゆき）、母はヤソ。
一八六五（慶応元）年　四歳
祖父の死去により、父宜之、禄高五〇石御馬廻格の家督を継ぐ。
一八六九年（明治二）年　八歳
父陸前国牡鹿・桃生・本吉三郡権判事として単身で石巻に赴任、七〇年陸前国本吉郡北方総轄に任じられ気仙沼に移る。
一八七四（明治七）年　一三歳
三月、東京外国語学校英語学下等第四級に編入。
一八七七（明治一〇）年　一六歳
七月二七日、開拓使附属札幌農学校第二期生として入学許可、九月三日、札幌着、九月一五日、授業開始。同級生には、岩崎行親、太田（新渡戸）稲造、宮部金吾などがいた。一二月一日、クラークの残した「イエスを信ずる者の契約」に署名。
一八七八（明治一一）年　一七歳
六月二日、メソジスト監督教会宣教師M・C・ハリスより、太田、宮部らとともに受洗。
一八八〇（明治一三）年　一九歳
論文「米の滋養分」（『農業叢談』二号）を発表。
一八八一（明治一四）年　二〇歳
一月九日、札幌独立基督教会の建設委員となる。七月九日、札幌農学校を卒業、七月二七日、「開拓使御用係准判任」の辞令を受ける。一〇月二三日、札幌ＹＭＣＡを結成し、副会長となる。サケ漁の調査に従事。
一八八二（明治一五）年　二一歳
二月八日、開拓使廃止に伴い札幌県御用係となり、開拓使民事局勧業課に勤務し、石狩川の漁業視察、幌別地方、祝津などに調査出張する。「千歳川鮭魚減少の源因」（『大日本水産会報告』一号）を発表。九月、祝津村に鮑の生殖実験所を開設し、一〇月下旬鮑の卵子を発見する。
一八八三（明治一六）年　二二歳
四月二二日、病気療養を理由に札幌県に辞表を提出。五月九日、浅草井生村楼で「空ノ鳥ト野ノ百合花」と題して講演。八月一二日、静養のために伊香保に向かう途中、安中教会（海老名弾正牧師）に出席、八月一五日、同教会で講演し、この頃同教会の会員で、新島襄から洗礼を受けた浅田タケを知る。八月、将来の進むべき道として、生物学者、漁業・水産学者、伝道者をあげ、伝道者は望まないと宮部金吾宛書簡に記している。一二月一四日、農商務省農務局水産課に勤務し、水産慣行調を担当し日本産魚類目録の作成に従事。タケとの結婚は母親の反対などで困難をきわめ苦悩する。
一八八四（明治一七）年　二三歳
三月二八日、浅田タケと上野池之端長酡亭でM・C・ハリスの司式により結婚式をあげる。四月、日本生物学会で「ダルウイン氏ノ行状」を講演。ダーウィン『種の起源』は、札幌農学校の頃から影響を受け、それが進化論とキリスト教へとつながっていく。一〇月頃、タケは安中の実

家に別居し、一八八九年に正式に離婚する。同月、農商務省を辞職。この年、タケとの間には「重大なる危機」があり、あるときハリスに託された数冊の本を持ち、熊谷へ向かう途中、そのなかの一冊の余白に記された「ホセア書」の一節に神の慰安の言を聞く。一一月六日、シティ・オブ・トウキョウ号で、内部に「真空」をかかえてアメリカへ向けて出航、一一月二四日サンフランシスコ港着。一二月五日、鉄道でユタ州オグデン、シカゴを経て、ペンシルヴァニア州イリー着、一二月一五日フィラデルフィアに行き、W・モリスを訪ね、同一八日、エルウィンのペンシルヴァニア知的障がい児養護院の院長I・N・カーリンと会い、同院に滞在。

一八八五（明治一八）年　二四歳

一月一日、エルウィンのペンシルヴァニア知的障がい児養護院の看護人になり、「エレミヤ書」を読み感動する。四月一五日、タケ長女ノブを出産。五月八日、渡米中の新島襄と会う。七月二七日、エルウィンを去り、新島襄の勧めで、アマスト大学入学を決意する。九月七日、アマスト着、アマスト大学シーリー総長を訪ね、同大学に二年間学費が無料で寄宿舎の一室が与えられる選科生として入学。

一八八六（明治一九）年　二五歳

三月八日、「霊魂の父」という、シーリー総長の言葉で贖罪の回心（Conversion）を体験する。

一八八七（明治二〇）年　二六歳

六月二九日、アマスト大学を卒業、理学士（Bachelor of Science）の称号を受ける。九月一三日、教職免許を受けないことを決めて、コネチカット州のハートフォード神学校に入学するためにアマストを去る。

一八八八（明治二一）年　二七歳

一月末、ハートフォード神学校を退学。三月一〇日、ニューヨークを出航、同二一日、パナマからサンフランシスコに向かう。四月二一日、イギリス船パーシャ号で、サンフランシスコを出港、五月一六日、「二つのJ」（イエスJesusと日本Japan）のもと、日本を新キリスト教国にする夢を抱いて帰国。九月一〇日、「仮教頭」として赴任した北越学館始業式で就任演説、一〇月一五日、北越学館発起人、校友に意見書を送る。宣教師が教派から伝道費を受け、学校では無給であることなどに反対し、一二月一八日、北越学館を辞職し、帰京する。ここでは、「エレミヤ書」、儒教、仏教も教えた。

一八八九（明治二二）年　二八歳

三月、カナダのメソジスト派が開校した東洋英和学校、大日本水産会が東京に設立した水産伝習所の動植物学科の教師となる。五月一四日、タケと正式に離婚し、七月三一日、高崎の横浜かずと結婚する。

一八九〇（明治二三）年　二九歳

足尾銅山の鉱毒で渡良瀬川の魚類が多数死滅し、田中正造が帝国議会で質問する。それに共感し、後に「鉱毒地巡遊記」（『万朝報』一九〇一年四月）を書く。九月二日、第一高等中学校嘱託教員に就く。

一八九一（明治二四）年　三〇歳

一月八日、札幌教会を退会通告、九日、第一高等中学校教育勅語奉読式での奉拝の低頭の仕方が「不敬事件」に発展する。三一日、第一高等中学校に辞表提出、二月三日、依頼解雇。四月一四日、妻かず病床で受洗し、一九日死去、結婚生活は一年九カ月であった。

一八九二（明治二五）年　三一歳

一〇月、『未来観念の現世に於ける事業に及ぼす勢力』（警醒社書店）を刊行。一二月二三日、京都の判事岡田透の娘しづと結婚する。

一八九三（明治二六）年　三二歳

二月、『基督信徒の慰』（警醒社書店）、四月下旬、泰西学館を辞し、熊本英学校に教師として七月一一日まで赴任。八月、熊本市郊外の託摩ケ原の槙樹の下で、古い鞄を台に書き上げた『求安録』（警醒社書店）を刊

行、京都へ転居。一一月一一日、『How I Became a Christian』を脱稿する。

一八九四（明治二七）年　三三歳

二月、『伝道之精神』（警醒社書店）、三月一九日、娘ルツ生まれる。五月、『地理学考』（警醒社書店、一八九七年『地人論』に改題）、**詩「海」**（『地理学考』所収）。七月一六日―一七日、箱根山中で開かれた基督教青年会第六回夏期学校で「後世への最大遺物」を講演する。八月、「流鼠録」を『国民之友』（二三三号―二五一号）に連載する。九月、「日清戦争の義」（訳文）（『国民之友』二三四号）、一〇月、「日清戦争の目的如何」（『国民之友』二三七号）を発表し、日清戦争を義戦と意味づける。一一月、『Japan and the Japanese』（民友社、一九〇八年 Representative Men of Japan に改題）を刊行。

一八九五（明治二八）年　三四歳

五月、『How I Became a Christian』（警醒社書店）を刊行。七月、「何故に大文学は出ざる乎」（『国民之友』二五六号）、一〇月、「如何にして大文学を得ん乎」（『国民之友』二六五号―二六六号）を発表。

一八九六（明治二九）年　三五歳

一月、**詩「楽しき生涯」**（『国民之友』二七七号）、二月、**詩「寒中の木の芽」**（『国民之友』二八四号）、八月、「時勢の観察」（『国民之友』三〇九号）、一二月、**詩「寡婦の除夜」**（『福音新報』七八号）などを発表し、日清戦争を義戦と見たことを恥じ、キリスト教的非戦論・戦争廃止論へと向かう。

一八九七（明治三〇）年　三六歳

一月、黒岩周六（涙香）に招かれ、朝報社に入社する。二月、『万朝報』英文欄主筆の執筆を開始。七月、『夏期演説　後世への最大遺物』（便利堂書店）、**『愛吟』**（内村鑑三纂訳、警醒社書店）を刊行。

一八九八（明治三一）年　三七歳

一月一〇日―二月七日、東京基督教青年会館で文学講演。五月、朝報社を退社。六月、『東京独立雑誌』（主筆・内村鑑三）を創刊。

一八九九（明治三二）年　三八歳

七月、東京府豊多摩郡角筈村の女子独立学校校長に就任。九月一五日、『東京独立雑誌』（四三号―七一号）に「興国史談」を連載。

一九〇〇（明治三三）年　三九歳

四月、『宗教座談』（東京独立雑誌社）を刊行。七月一二日、『東京独立雑誌』七二号で廃刊。九月三〇日、誌上のエクレシア『聖書之研究』を創刊し、三〇年間三五七号まで発行する。一〇月、『興国史談』（警醒社書店）を刊行。

一九〇一（明治三四）年　四〇歳

二月、「洗礼晩餐廃止論」（『聖書之研究』六号）を発表。三月一四日、『無教会』を創刊し、同誌に「無教会論」を発表。朝報社の黒岩周六、幸徳秋水、堺利彦らとともに理想団を結成。六月、『独立雑談』（独立叢書第一編、聖書研究社）を刊行。一二月一二日、東京基督教青年会館での足尾鉱毒演説会で巌本善治、黒岩周六らとともに講演。

一九〇二（明治三五）年　四一歳

四月二日、東京基督教青年会館で開かれた鉱毒問題解決演説会で、巌本善次、木下尚江らと講演。七月二五日―八月三日、第三回夏期講談会を精華女学校（前角筈女学校）で開催する。八月五日、『無教会』第一八号をもって廃刊する。**詩「新詠」**（『聖書之研究』二四号）

一九〇三（明治三六）年　四二歳

六月三〇日、「戦争廃止論」（『万朝報』）を発表。一〇月九日、日露戦争開戦論のなかで非戦論の立場をとり、幸徳秋水、堺利彦らとともに開戦論へ傾く朝報社を退社する。

一九〇四（明治三七）年　四三歳

一月、**詩「陸中花巻の十二月廿日」**（『聖書之研究』四八号）、二月、『角

筈パムフレット第五　日本国の大困難』（聖書研究社）、四月、『角筈パムフレット第六　聖書は如何なる書である乎』（聖書研究社）を刊行、同月、「戦時に於ける非戦主義者の態度」（『聖書之研究』五一号）を発表。七月、詩「**天地の花なる薔薇**」（『聖書之研究』五四号）、八月、『百約記』（聖書研究社）を刊行。九月、「余が非戦論者となりし由来」（『聖書之研究』五六号）、一〇月、「非戦主義者の戦死」（『聖書之研究』五七号）を発表。

一九〇五（明治三八）年　四四歳

二月、『基督教問答』（聖書研究社）を刊行。六月、『聖書之研究』を『新希望』と改題（六四―七四号）。

一九〇六（明治三九）年　四五歳

三月、詩「**春は来りつゝある**」（『新希望』七三号）、四月、詩「**春の到来**」（『新希望』七四号）を発表。五月、『新希望』を『聖書之研究』に誌名を戻す。

一九〇七（明治四〇）年　四六歳

二月、『角筈パムフレット第九　基督教と社会主義』（聖書研究社）を刊行。四月一三日、父宜之七五歳で死去。

一九〇八（明治四一）年　四七歳

六月、『聖書之研究』一〇〇号を迎える。同月、今井館開館式を行う。

一九〇九（明治四二）年　四八歳

一月、『**櫟林集　第壱輯**』（聖書研究社）刊行。一〇月、第一高等学校校長新渡戸稲造の読書グループ聖書研究会に入会し、柏会と名づける。一一月、『**歓喜と希望**』（聖書研究社）刊行。

一九一〇（明治四三）年　四九歳

三月、『近代に於ける科学的思想の変遷』（聖書研究社）を刊行。一〇月、福島県本宮に伝道、長野県の研成義塾創立満一二年感謝記念会で「教育の基礎としての信仰」を講演。

一九一一（明治四四）年　五〇歳

二月、詩「**二月中旬**」（『聖書之研究』一二八号）、九月、「世界の平和は如何にして来る乎」（『聖書之研究』一三四号）、一一月、「デンマルク国の話」（『聖書之研究』一三六号）を発表。

一九一二（明治四五／大正元）年　五一歳

一月一二日、娘ルツ死去、再臨信仰に大きな影響を与える。二月、詩「**我等は四人である**」（『聖書之研究』一三九号）を発表。三月七日、大森で「基督教とその信仰」、四月二八日、数寄屋橋教会で「地上の教会に関するイエスの比喩的予言」、五、六月、同教会で「四福音書に就て」「馬太伝と路加伝」を講演。六月、詩「**『其日其時』**」（『聖書之研究』一四三号）を発表。一〇月一三日、札幌独立基督教会で「我は福音を恥とせず」、一五―一八日、新約聖書「ロマ書」（四回）を講演。沼田、伊香保、札幌、津山などで伝道、講演、説教を行う。一二月、詩「**イエスを思ふて**」（『聖書之研究』一四九号）、詩「**今年のクリスマス**」（同前）を発表。

一九一三（大正二）年　五二歳

二月、『所感十年』（聖書研究社）、『デンマルク国の話』（聖書研究社）を刊行。七月、詩『**エスペランザ**』（『聖書之研究』一五六号）を発表。一〇月、「天職発見の途」（『聖書之研究』一五九号）、一二月、『研究十年』（聖書研究社）を刊行。

一九一四（大正三）年　五三歳

一月、詩「**建碑**」（『聖書之研究』一六二号）を発表。二月、三浦半島を訪れ、一人の桶職人の姿を見て、「桶職」の詩を書く。二月一日―三月二二日、「山上の垂訓」を聖書研究会で講義、四月、詩「**桶職**」（『聖書之研究』一六五号）を発表。『**平民詩人**』（畔上賢造合著、警醒社書店）を刊行。五月八日―一二日、第四高等学校基督教青年会の招きで、九日、「宗教の必要」、一一日、日本基督教金沢教会で「私の聖書」、六月八日、日本バプテスト神学校卒業式で「永遠に在す基督」などを講演。七月、

『宗教と現世』（警醒社書店）を刊行。第一次世界大戦開戦に伴う失望とともに、非戦論者としての信仰の試練を受け、再臨信仰へと向かっていく。一〇月四日、日本基督教会レバノン教会で「欧洲の戦乱と基督教」を講演。一二月、『感想十年』（聖書研究社）を刊行。

一九一五（大正四）年　五四歳

一月、「戦争の止む時」（『聖書之研究』一七四号）を発表。五月三〇日―六月二七日、聖書研究会で「ヨブ記」、一〇月一〇日―一一月一四日、「伝道之書」を講義。一二月、『旧約十年』（聖書研究社）を刊行。

一九一六（大正五）年　五五歳

八月、D・C・ベルから『日曜学校時報』（The Sunday School Times, June 24）が届き、そこに掲載されたC・G・トランブルの「キリストの再臨は果して実際的問題ならざる乎」（Is the Truth of Our Lord's Return a Practical Matter for To-Day?）を読み、悲惨な世界大戦を背景に、キリストの再臨に希望をもつ。一〇月、**詩「秋の夕**（ゆうべ）**」**（『聖書之研究』一九五号）を発表。

一九一七（大正六）年　五六歳

三月、『聖書之研究』二〇〇号を発行。四月六日、キリスト教国アメリカの第一次世界大戦への参戦により、世界平和に希望を失い、キリスト再臨の教義を確信する。五月、「米国の参戦」（『聖書之研究』二〇二号）、七月、「戦争廃止に関する聖書の明示」（『聖書之研究』二〇四号）を発表。八月、『復活と来生』（聖書研究社）を刊行。一一月一五日、神奈川県秦野町の『聖書之研究』読者会で、「信仰の階段」を講演。

一九一八（大正七）年　五七歳

一月六日、東京基督教青年会館で聖書の預言的研究の講演会が、中田重治、木村清松とともに行われ、再臨論を内容とした「聖書研究者の立場より見たる基督の再来」を講演し、それが再臨運動の開始となり、高揚のなかで一年半ほどつづく。二月一〇日、第二回聖書の預言的研究講演会で「馬太伝に現はれたる基督の再来」、三月以降、大阪、京都、神戸、横浜で、「信仰の三階段」「基督再来の欲求」「世界の最大問題」「基督の復活と再臨」「世界戦争と基督教」、七月三〇―三一日、箱根で開かれた基督教徒修養会で「再臨と聖書研究」「再臨宣伝の注意」「再来の時期」について講演。八月二六日、日記「日々の生涯」の執筆を始め、『聖書之研究』二一九号から連載。一一月一一日、第一次世界大戦が終結すると、再臨運動は沈静化していく。一一月、『基督再臨問題講演集』（岩波書店）を刊行。一二月二二日、東京基督教青年会館で「平和の到来」を講演。

一九一九（大正八）年　五八歳

一月一七日―一九日、大阪中之島講会堂で開催された基督再臨研究大阪大会で「万民に関はる大なる福音」「伝道と基督の再臨」を講演。三月二三日―四月二〇日、聖書研究会で「パウロの復活論」の講義。五月、『内村全集　第壱巻』（警醒社書店）を刊行。一〇月二三日、千葉の日本同盟基督協会で「世界の現状と基督の再臨」を講演。一二月、『信仰日記』（岩波書店）を刊行。

一九二〇（大正九）年　五九歳

一月一一日―三月一四日、聖書研究会で「ダニエル書」の講義。四月一七日―一八日、兵庫県西之宮で『聖書之研究』の読者会を開催し、「聖書の立場より見たるキリストの再臨」「人生の実験として見たるキリストの再臨」を講演。四月二五日―一二月一九日、聖書研究会で「ヨブ記」の講義。七月、『研究第二之十年』（聖書研究社）、八月、『山上の垂訓に関する研究』（聖書研究社）を刊行。

一九二一（大正一〇）年　六〇歳

一月一六日―一九二二年一〇月二二日、「余自身の信仰」を語った全六〇講の「ロマ書」講義。三月、六〇歳を記念し、今井館で毎日曜日午後に日曜学校を始める。六月、『ルーテル伝講演集』（岩波書店）を刊行。

一九二二（大正一一）年　六一歳
一月一二日、ルツ永眠一〇周年記念会を今井館で開催。三月、『約百記講演』（十字架書房）を刊行。八月二〇日、箱根で開かれた基督教平信徒夏期修養会で「罪の贖主としてのイエスキリスト」を講演。
一九二三（大正一二）年　六二歳
二月、『世界伝道の特権』（世界伝道協賛会）を刊行。七月一九日―二一日、六月九日の有島武郎の自殺について「背教者としての有島武郎氏」（『万朝報』）を発表。
一九二四（大正一三）年　六三歳
三月、『苦痛の福音』（警醒社書店）を刊行。五月一一日―一二日、聖書研究会で旧約聖書「箴言」の講義。九月、『羅馬書の研究』（向山堂書房）、一〇月、『**平民詩人増補改版**』（畔上賢造合著、警醒社書店）を刊行。
一九二五（大正一四）年　六四歳
二月一日―一九二六年三月二一日、聖書研究会で「十字架の道」というキリスト伝の講義。二月一二日、日本バプチスト神学校で「余の観たる使徒パウロ」を講演。七月一二日、『聖書之研究』三〇〇号記念感謝会を開催。九月、『ガリラヤの道』（警醒社書店）を刊行。一二月、「クリスマス夜話＝私の信仰の先生」（『聖書之研究』三〇五号）を発表。
一九二六（大正一五／昭和元）年　六五歳
三月五日、月刊英文雑誌『ジャパン・クリスチャン・インテリジェンサー』（The Japan Christian Intelligencer）を創刊（主筆・内村鑑三）し、一九二八年二月一〇日、第二巻第一二号で廃刊する。一〇月、『一日一生』（警醒社書店）を刊行。
一九二七（昭和二）年　六六歳
四月一〇日―五月二二日、聖書研究会で「エステル記」を講義。一〇月二日―一九二八年四月二九日、日本青年館、今井館附属聖書講堂を会場に、聖書研究会で「イザヤ書」を講義。一一月、『空の空なるか哉』（向山堂書店）を刊行。
一九二八（昭和三）年　六七歳
四月二二日―六月二四日、聖書研究会で「ホセア書」の講義。六月、『内村鑑三先生信仰五十年記念基督教論文集』を刊行。七月二七日―九月一五日、札幌に伝道。一二月、『十字架の道』（向山堂書店）を刊行。
一九二九（昭和四）年　六八歳
四月八日、日本赤十字社病院で診察を受け、心臓の異常と診断され静養生活に入る。一一月三日―一二月二二日、聖書研究会で「創世記」を講義。
一九三〇（昭和五）年　六九歳
三月二六日、内村鑑三古稀祝賀感謝の会が開催され、そこに「人類の幸福と日本國の隆盛と宇宙の完成を祈る」と結ばれるメッセージを届け、それが遺言となる。三月二八日午前八時五一分死去する。三月三〇日、今井館附属聖書講堂で葬儀が行われる。四月二五日、『聖書之研究』三五七号をもって終刊となる。

○本略年譜は、『内村鑑三全集』第四〇巻所収の「年譜」（鈴木範久編）と同『内村鑑三の人と思想』（岩波書店）の「内村鑑三年譜」、同『道をひらく――内村鑑三のことば』（ＮＨＫシリーズ）の「内村鑑三略年譜」、別冊『環』（藤原書店）の「内村鑑三年譜（1861-1930）」等を参考に作成し、『内村鑑三――私は一基督者である』（御茶の水書房、二〇一六年）に収めた。本書では、その一部を改めた。なお、内村鑑三による自作の詩等については、題名が付された主な作品を新たに本年譜に太字で収めた。

参考文献

『アメリカ文学入門』（諏訪部浩一責任編集、三修社、二〇一三年）
『イギリス文学入門』（石塚久郎責任編集、三修社、二〇一四年）
伊東一夫「内村鑑三の文学観」（『内村鑑三研究』第三号、キリスト教図書出版社、一九七四年一二月）
今高義也『内村鑑三の世界像――伝統・信仰・詩歌』（ぺりかん社、二〇二〇年）
内村鑑三『一日一生』（角川文庫、一九五二年、第三版、解説）
内村鑑三・畔上賢造著『平民詩人』（警醒社書店、一九二四年、改版）
亀井俊介『アメリカ文学史講義1、2』（南雲堂、一九九七―一九九八年）
亀井俊介『内村鑑三――明治精神の道標』（中央公論社、一九七七年）
亀井俊介「内村鑑三訳詩集『愛吟』について」（『文學』一九八二年一月）
亀井俊介『日本近代詩の成立』（南雲堂、二〇一六年）
川中子義勝『詩学講義――「詩のなかの私」から「二人称の詩学」へ』（土曜美術社出版販売、二〇二一年）
川中子義勝「聖書と天然と歴史――ハーマンと内村鑑三」（『法学新報』第一二八巻七・八号、二〇二二年二月）
木村毅『日米文学交流史の研究』（恒文社、一九八二年）
桑原武夫編『西洋文学』第二版（岩波書店、一九六七年）
齋藤勇『讃美歌研究――歴史、代表作、注解』（研究社、一九七二年）
『集英社　世界文学大事典』第二巻（集英社、一九九七年）
ジローラモ・サヴォナローラ『ルネサンス・フィレンツェ統治論――説教と論文』（須藤祐孝編訳・解説、無限社、一九九八年）
鈴木俊郎編『回想の内村鑑三』（岩波書店、一九五六年）
鈴木範久『内村鑑三日録』（全一二巻）（教文館、一九九三―一九九九年）
鈴木範久『内村鑑三をめぐる作家たち』（玉川大学出版部、一九八〇年）
『聖書事典』第三二版（日本基督教団出版局、一九九一年）
武田友寿『内村鑑三・青春の原像』（日本ＹＭＣＡ同盟出版部、一九八二年）
武田友寿『正統と異端のあいだ――内村鑑三の劇的なる生涯』（教文館、一九九一年）
田中浩司「内村鑑三の文学観――近代日本文士たちの憧憬と絶望」（『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第四一号、二〇〇八年一二月）
出口保夫『評伝ワーズワス』（研究社、二〇一四年）
『哲学事典』（平凡社、一九七一年）
原田俊孝『ワーズワスの自然神秘思想』（南雲堂、一九九七年）
柳生圀近「今高義也『内村鑑三の世界像――伝統・信仰・詩歌』」（書評）（『内村鑑三研究』第五五号、二〇二二年四月、教文館）
山本泰次郎『内村鑑三――信仰・生涯・友情』（東海大学出版会、一九六六年）
山本泰次郎『内村鑑三とひとりの弟子――斉藤宗次郎あての書簡による』（教文館、一九八一年）
和田勇一『ベン・ジョンソン――人と作品』（研究社、一九六三年）
渡部和隆「内村鑑三の文学観――美の契機と真の契機との観点からキリストへ」（『アジア・キリスト教・多元性』一一号、二〇一三年三月、https://doi.org/10.14989/173551）

あとがき

日本近代の平和主義の詩人でキリスト者・北村透谷は、「塵戦又た塵戦、都市を荒野に變ずるまでは止まじ」（「平和」發行の辭」、一八九二年三月）と予言し、戦争は「人類の正心の曇れるに因つてなることを記憶せられよ」（同前）と警告した。

その一三〇年後、グローバル世界も、日本社会も、戦争とパンデミック、環境危機と気象変動など、人が地球の命運を左右する「人新世」と呼ばれる「人類の時代」を迎えても、共通の未来を描けずに世紀の大きな困難のなかにたたずんでいる。ときに人の無辜な生命は、旧約の風前の籾殻のように吹き散らされ、イザヤの終りの日の預言のように、もはや剣を鋤に、槍を鎌に打ち換えることはできないのであろうか。

旧約「哀歌」は、「ああ、むかしは、民の満ちていたこの都、国々の民のうちで大いなる者であったこの町……」（第一章一節）と、人々の嘆きの歌からはじまっている。それは戦争で破壊された都市、町、村々であろうか。

そんな終末的な時代風景のなかに、明治維新前の一八六一（万延二）年に生れ、明治・大正から、日清・日露、第一次世界大戦を経て、アジア・太平洋戦争へと向かう昭和初期の一九三〇（昭和五）年まで、近代の激動の時代をどこまでも一キリスト者として生きた内村鑑三の伝道的生涯と、その福音的な無教会信仰と、旧新約聖書の奥義とした再臨信仰、さらにはキリスト教的非戦論、戦争絶対廃止論は、後世へ、未来への人類の希望、社会の闇に輝く光としてきわだって見えてくる。

内村鑑三は、若き日の箱根山上での講演「後世への最大遺物」のなかで、「天地無始終、人生有生死」（頼山陽の一三歳のときの漢詩の一部、詩「桶職」、解題、参照）の生涯に、だれもが遺すことのできる「紀念物」について、こう語った。

> 即ち此世の中は是は決して悪魔が支配する世の中にあらずして、神の世の中であると云ふ事を信ずる事である。失望の世の中にあらずして、望みの世の中であることを信ずる事である、此世の中は悲みの世の中でなくして、喜びの世の中であるといふことを我々の生涯に実行して其生涯を世の中の贈物として此世を去るといふことであります。其遺物は誰にも出来る遺物ではないかと思ふ。（『内村鑑三全集』第四巻、二八一頁、口絵参照）

美しい地球に、社会に、私たちを育んだ山や河に遺す、この「後世への最大遺物」（＝「Memento」）は、内村鑑三の信仰的生涯、全著述を希望の地下水脈のように流れている。

内村鑑三には、主に信仰のエクレシア『聖書之研究』（全三五七号）に発表された旧新約聖書六六書の講解、注解、神学、宗教的著作、時勢への評論など、英文も含めて厖大な著述がある。そのなかで、天然宇宙を伝える独自な信仰詩、英米詩人の「精神訳」と呼んだ訳詩、「一日一生」の心の風景を垣間見せる短歌など、その文学叙述は、これまで形づくられてきた内村鑑三の別な側面に、その信仰、思想に新たな光をあてることにつながっている。それは天然詩人内村鑑三とその天然思想であり、宇宙、万物、人生、悉く可なりの福音的宇宙でもある。

本書『内村鑑三の信仰詩・訳詩・短歌等集成――附、解題、解説、文学論、略年譜』は、これまでまとめられることのなかった内村鑑三の詩的世界を集成したものである。それに内村の信仰、評伝、時代を背景とした解題、信仰詩、訳詩、短歌の解説、日本近代の文学者に影響を与えた内村鑑

三とその文学観、略年譜を収めている。

二〇〇〇年一一月、私は当時キリスト教研究所長であった橋本茂教授がプロテスタントの作家・椎名麟三の研究プロジェクトを開始したとき、本研究所の協力研究員として活動に参加させていただき、椎名麟三を中心としたキリスト教と文学研究に携わり、すでに二〇年以上となる。協力研究員として一〇年ほど経った頃、私は人生の懐疑のなかで、内村鑑三と出会い、『内村鑑三――私は一基督者である』（御茶の水書房、二〇一六年）、『内村鑑三の聖書講解――神の言のコスモスと再臨信仰』（教文館、二〇二〇年）を刊行した。その過程で、天然詩人としての内村鑑三に惹かれるとともに、それらの著述を集成する研究意義がしだいに大きくなっていった。

今年度、キリスト教研究所の伝統ある研究誌オケイジョナル・ペーパーという、本研究にとってもっとも適した形で発行できる機会をいただいた。橋本茂元所長、徐正敏前所長、久保田浩所長、キリスト教文化・芸術研究プロジェクトの齊藤栄一プロジェクト長をはじめとした諸先生、キリスト教研究所の所員の先生方に、ここに感謝を申し上げたい。また、本集成を発行まで事務手続きを丁寧に進めてくださった教学補佐の髙橋英里さん、訳詩の資料調査にご協力いただいた神奈川大学図書館のレファレンスサービス担当者、口絵資料等の使用をご許可くださったＮＰＯ法人今井館教友会に、ここに併せてお礼を申し上げたい。

本書が半世紀前の一九七〇年代前半に、私が文学部英文学科の一学生として学んだ、この明治学院大学のキリスト教研究所から発行していただけたこと、大きな喜びである。本書が内村鑑三研究の一端に資することを願っている。

二〇二二年一〇月一〇日（初秋の日に）

小林孝吉

©2022 MICS
All rights reserved
Institute for Christian Studies
Meiji Gakuin University
Shirokanedai 1-2-37, Minatoku, Tokyo, Japan 108-8636
Telephone：03-5421-5210
Telefax：03-5421-5214

内村鑑三の信仰詩・訳詩・短歌等集成——附、解題、解説、文学観、略年譜
〔MICS オケイジョナル・ペーパー 19〕

2022 年 12 月 20 日発行　©非売品　無断転載禁止

編集・発行：明治学院大学キリスト教研究所

〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
電　話　03-5421-5210
ＦＡＸ　03-5421-5214

印刷：株式会社 精興社